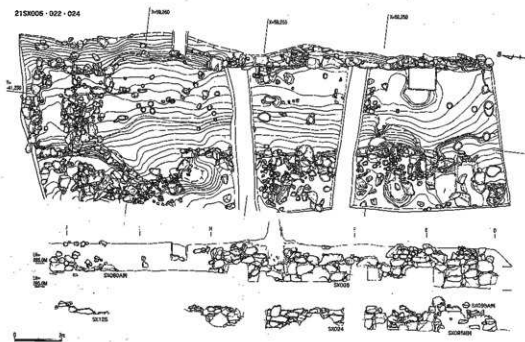


# 宝満山遺跡群 III

第11次・21次調査報告書

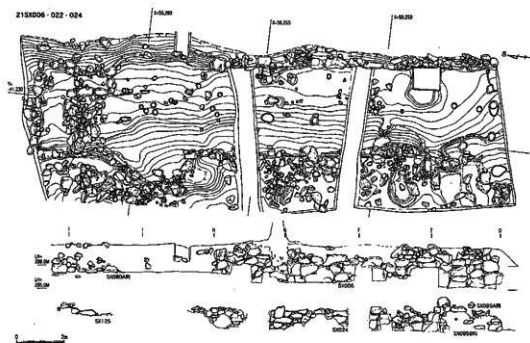


2001

太宰府市教育委員会

# 宝満山遺跡群 III

第11次・21次調査報告書



2001

太宰府市教育委員会



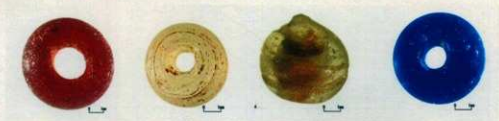
宝満山遺跡群11次調査  
空中写真（西から）



宝満山遺跡群21次調査  
南側全景（北から）



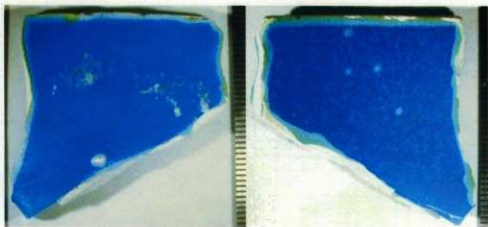
宝満山遺跡群21次調査  
庭園状遺構21SX001付近  
（東から）



宝満山遺跡群第11次調査 11ST019出土ガラス製数珠玉（顕微鏡写真）



宝満山遺跡群第11次調査 11ST019出土ガラス製数珠玉



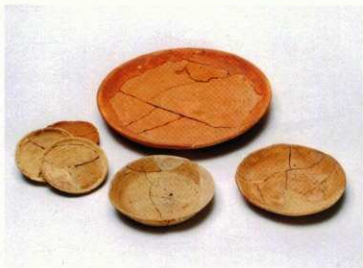
原遺跡第8次調査08SK430出土ガラス片（周辺部分に白色ガラス状の物質が観察される。）



宝満山遺跡群21次調査  
石垣SX006・022・024  
(西から)



宝満山遺跡群11次調査  
出土遺物



宝満山遺跡群21次調査  
出土遺物

## 序

今回報告いたします宝満山遺跡群は、寺院建設に伴っておこなった埋蔵文化財の発掘調査であります。

宝満山は中世以来、修験道の霊峰として知られ、今では多くのハイカーが訪れる森林浴や登山の山として市民に親しまれております。

今回の調査では中世の庭園を含む館跡、墳墓など今まで存在が知られていなかった、中世大山寺、有智山城にかかわる貴重な遺構が発見されました。

今後、本報告が宝満山の研究の一助として、また広く文化遺産の保存と啓発に活用していただければ幸いに存じます。また、調査及び整理に参加されました作業員の皆様、調査にご理解ご協力いただきました承天寺ならびに関係機関の皆様に対して、厚く御礼申し上げます。

平成13年 3月  
太宰府市教育委員会  
教育長 關 敏 治

## 例 言

1. 本書は平成4年度および平成10年度に太宰府市教育委員会が調査した宝満山遺跡群内での寺院建設および重要遺跡確認に伴う発掘調査に関係する成果をまとめたものである。
2. 本書に掲載した調査は、国庫補助を受けておこなった第11次（平成4年度、担当山本信夫）、第21次（平成10年度、担当山村信榮）の調査である。
3. 本書に掲載した発掘調査の原因、期間、面積、担当者などは各調査の報告部分に記載している。
4. 遺構の実測は各調査担当者のほか井上信正、坂本雄介がおこなった。写真撮影は山村、坂本が、調査区全景の空中写真は（有）空中写真企画がおこなった。また第21次調査の遺構実測図の一部は、写真測量による機械素図作成までをアジア航測株式会社に委託した。
5. 遺構の実測には国土調査法第II座標系を利用した。したがって本書に示される方位は特に注記のない限りG.N.（座標北）を示している。
6. 遺物の実測および浄書（トレース）は山村の他、森田レイ子、森部順子、松隈里恵子、中村陽子、坂本雄介、平島義孝、酒井三保子、阿部浩子、境一美がおこない調査担当者が検査の上必要部分を補足した。また遺物写真撮影は山村がおこなった。
7. 本書の執筆は山村、森田、坂本がおこなった。また、11次調査出土のガラス玉について肥塚隆保先生（奈良国立文化財研究所）の玉稿を賜り第5章に掲載している。
8. 本書の編集は山村がおこなった。
9. 本書に使用した図、写真、遺物については一括して太宰府市教育委員会が太宰府市文化ふれあい館で収蔵、管理している。
10. 本書に掲載される遺構番号は、以下の要領で理解される。なお遺構の性格を表記する記号については、SB掘立柱建物跡、SK土坑、ST墳墓、SD溝、SXその他の遺構（石垣、溜まり状遺構）などであり詳細は『佐野地区遺跡群 1』に記載している。

	宝	1	SK	001	
遺跡名	調査回数	遺構種別	遺構番号		

11. 付属のCD-ROMには全ての文章及びデータ、図版（カラー）を収容している。動作環境については、CD-ROM中の「Read Me」を参照のこと。
12. 出土遺物および図面、写真等の記録は太宰府市教育委員会が保管している。
13. 本書で用いる分類は以下の文献に記載されている。

土師器・須恵器

太宰府市教育委員会（1983）『大宰府条坊跡 II』

太宰府市教育委員会（1992）『宮ノ本遺跡 II -竈跡篇-』

陶磁器

太宰府市教育委員会（2000）『大宰府条坊跡 XV』

## 目次

第1章 宝満山遺跡群の調査の概要	1	(山村)
第2章 調査組織	6	(山村)
第3章 調査の概要		
(1) 第11次調査	9	(森田、坂本)
(2) 第21次調査	25	(山村、坂本)
第4章 総括	88	(山村)
第5章 附編分析結果		
大宰府市宝満山遺跡・原8次調査出土ガラスの分析調査	92	(肥塚)
(付図) 宝21庭園状遺構実測図 (S=1/100)		
(附録) 宝満山遺跡群ⅢCD-ROM		



## 第1章 宝満山遺跡群の調査の概要

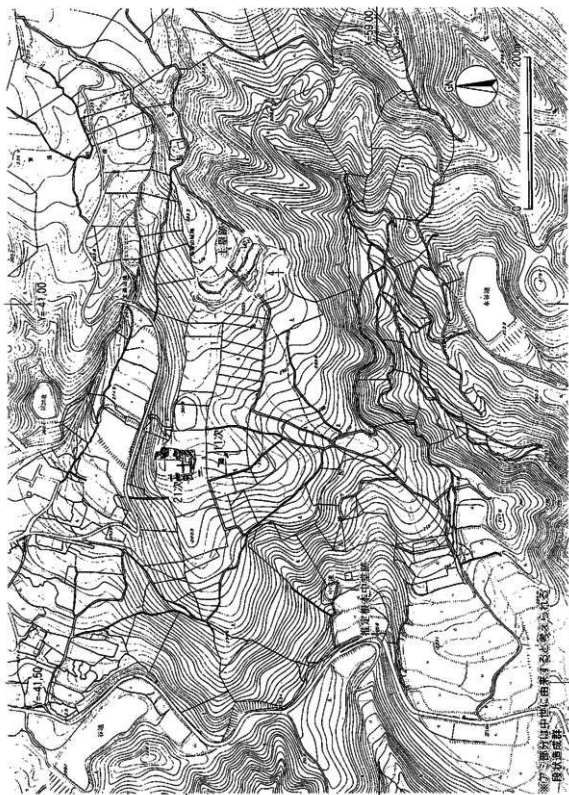
### 1 遺跡の歴史的環境

宝満山(ほうまんざん)別称竈門山(かまどさん)は太宰府市の北東にそびえる標高829.6mの山であり、頂はさらに北東へ頭巾(とっきん)山、三郡山、砥石(とぎいし)山、若杉山へと連なり筑前の主峰の一角をなしている。太宰府市は玄界灘に連なる博多湾に面した福岡平野と、有明海に面した筑後平野を溝状に繋ぐ結節点にあたり、古代には九州を総監する国の役所「大宰府」が設置された場所である。宝満山ではこの大宰府が活発に活動を始めた8世紀前半頃から山頂を中心とする山中で土器を用いた祭祀が始まり、8世紀後半には蕃客や蕃神などを示す「蕃」銘の墨書土器に見られるよう国家的国境祭祀を示唆する遺物が出土するに至っている。延喜式に記載のある竈門神社は山頂の花崗岩の巨石を依代とするもので、出土遺物から奈良時代に引き続き平安時代以降、近世に至るまで何らかの形で山頂祭祀が継続されていたことがわかる。山頂を上宮とし、中腹に中宮、山裾の内山地区に下宮が営まれ、下宮には奈良時代創建で平安期に再建されたと推定される七間五間の礎石建の総柱建物があり、それを中心に平安期から中世にかけての坊跡と考えられる遺構が広がっている。坊跡は内山地区(下宮地区)のさらに北側に南谷地区、北谷地区が存在し(「谷」呼称は比叡山の模倣か)、多くの輸入陶磁器を中心とする遺物が古くから採集されている。

平安期前半には入唐僧が渡唐前後に参遊し、中でも最澄の帰国後の宝塔建設を契機として延暦寺の勢力が台頭し、竈門神社の神宮寺としての竈門山寺の活動が活発化し、平安末期には他寺院や大宰府政庁府との間で軋轢を生じるにまで至ったらしい。鎌倉期には修験の場としての位置づけも明確化し、宗教活動も活性化したと見られ、中宮には文保二年(1318年)の銘を持つ梵字磨崖仏が残されている。寺院は中世には有智山(うちやま)寺、大山(だいせん、内山の音の転訛か)寺などと称され、「大山寺神人」と称する寺に係わる商人が主人公となり港湾都市博多を拠点に貿易活動で富を重ねたとされている。中世に於いては山の西麓にはあまたの坊と称す生活空間があり、近世地誌「筑前国統風土記」(1710年貝原益軒著)には「有智山、南谷、北谷、三所の僧舎すへて三百七十坊有しとかや。此内三百坊は衆徒方とて、専経説を学ぶ。七十坊は行者方とて、専戒行をつとめて、入峰を事とす。今もむかしの僧坊の跡、三所にのこりて昭々たり。」と記されている。これら近世の初頭まで明確に残されていた坊跡は後の耕作地化、宅地化によって不鮮明となり、現在に至っている。内山地区(下宮地区)で発掘調査によって坊の一角が明らかにされつつある。近世の坊跡は山頂付



第1图 宝满山遗址群位置图



第2図 宝満山遺跡群第11・21次調査地点図

近を中心とするエリアに移動し、その範囲は筑紫野市域側まで広がっている。

鎌倉時代の後半には筑前守護武藤少武氏が山中に「有智山城」を置いたとされ、建武三年（1336年）の記事として『太平記』には「内山ノ城」と記され、『梅松論』によれば少武は平時には「宰府ノ宅」を館として使用し、有事には「内山ト云山寺ヲ要害ニ」していたことが記されている。また、少武貞経は末子「宗応藏主」を出家させ内山の寺に入れており、寺内に城を造営しただけに止まらず、寺院経営にも関わっていたことが知られる。

少武貞経が守った「内山ノ城」は建武三年二月の戦いで菊池武敏氏ら南朝方によって攻められ、五百余人の死者とともに落城、その際に『梅松論』によれば貞経は自刃し城内は焦土と化したとされている。この記事に見られる「内山ノ城」の建築的要素として、「切岸」に立地する要害であり、中に郎党百余人が入る「大床」のある「堂」の他、貞経が籠って自刃しその末子宗応藏主が放火し自らも焼死した「持仏堂」があったことが記されている。

今回の調査は従来知られている三重の土塁を持つ「有智山城」の前面にある最も広い平坦面上にある中世遺物の散布する周知の遺跡でおこなった初めての発掘調査であり、中世大山寺、有智山城を開明するためにも今後の指針ともなる重要な調査であった。

#### 参考文献

- 小田富士雄「宝満山の地宝・宝満山の遺跡と遺物」1977太宰府天満宮文化研究所  
小田富士雄・武末純一「太宰府・宝満山の初期祭祀」1983財団法人太宰府顕彰会  
小西信二「宝満山及び龜門神社周辺の遺跡分布調査報告書」1984財団法人太宰府顕彰会  
狭川真一「宝満山遺跡」1989 太宰府市教育委員会  
「太宰府市史考古資料編」1992 太宰府市史編纂委員会  
山村信榮・松川博一「大大宰府展」1997 太宰府市文化ふれあい館  
森弘子「宝満山歴史散歩」2000 葦書房

## 2 調査に至る経緯

本書で報告する調査地点は従前より二重の土塁を主体とする「有智山城」の前面にあたり、段状の大規模な造成が残されていることで知られており、同土地を承天寺（福岡市博多区博多駅前一丁目）が買い上げ、山門、鐘樓、仏像、修行道場の建設を

計画し、その仮設計図に基づいて本市教育委員会文化課（当時）と協議を重ねた。市では予備調査をおこない、小規模な工事箇所については埋蔵文化財を保護する形で立会のうえ工事をおこなった。修行道場については計画図に基づいて試掘、および発掘調査（11次）を平成4年度に実施し、遺構保護のため設計を変更した上で施行に至った。予備調査に伴って修行道場予定地に土塁、石組が確認され、庭園遺構の可能性が考えられたため、両者が再度協議の上、指定保護を前提とした確認調査（21次）を平成10年度に実施した。

### 3 調査・整理の方法

発掘調査区は大半が杉、桧を主体とする人工林の中にあり、遺構の検出には工事に伴う立木の伐採終了後に大半が重機を用いて表土を除去し、人的な石組みが認められる箇所については人力で鍬を用いて表土剥ぎをおこなった。

遺構の検出時にはS-1からはじまる仮の遺構番号を付与し、遺構実測、写真撮影、遺物取り上げをし、付与した仮番号については今回の整理作業時点で、例えば「宝満11次調査S-1」という土坑状遺構の場合「宝11SK001」と変換表記している。遺構実測は個別遺構は基本的に1/20および1/100で手測りで実測した図を原図とし、縮小したものをトレースしたものである。21次の平面図は点網によって設定した杭から手ばかりで作成した1/100の図および航空測量によって作成した1/50の図をベースに手測りで実測した1/20図を座標値に基づいて張り込んで作成した図を使用している。

今回使用している国土座標の数値、ならびに標高レベル値はすべて、GPS測量によって導き出したものである。

遺物については取り上げ後に水洗し、乾燥、注記（墨による出土地点の書き込み）、仮復元の後、実測、取拓し接合石膏復元、彩色し写真撮影をおこない収納している。なお、複数地点で出土した遺物が接合する場合、層的にはより下位の古い層で、層位と遺構出土のものが接合した場合、性格が明確な遺構出土のものに帰属させて報告をおこなっている。製図については作成した原因の原寸コピーをトレースし1/3に縮小したものである。

本文中で使用される土器の型式の表記は一貫して本市が使用している分類基準に基づいて表記されている。

## 第2章 調査組織

報告する調査が複数年度にまたがるため、ここで一括して調査体制を列挙する。

(平成4/1992年度)

総括 庶務	教育長	長野治己
	教育部長	中川シゲ子
調査	文化課長	佐藤恭宏
	埋蔵文化財係長	高田克二
	文化振興係長	大田重信
	主任主事	岡部大治
	主任技師	川谷 豊
		山本信夫
		狭川真一
		城戸康利
		緒方俊輔
	技 師	山村信榮 (4年7月1日～)
山村信榮 (~4年6月30日)		
中島恒次郎		
技師 (囑託)	塩地潤一	
	田中克子	

(平成10/1998年度)

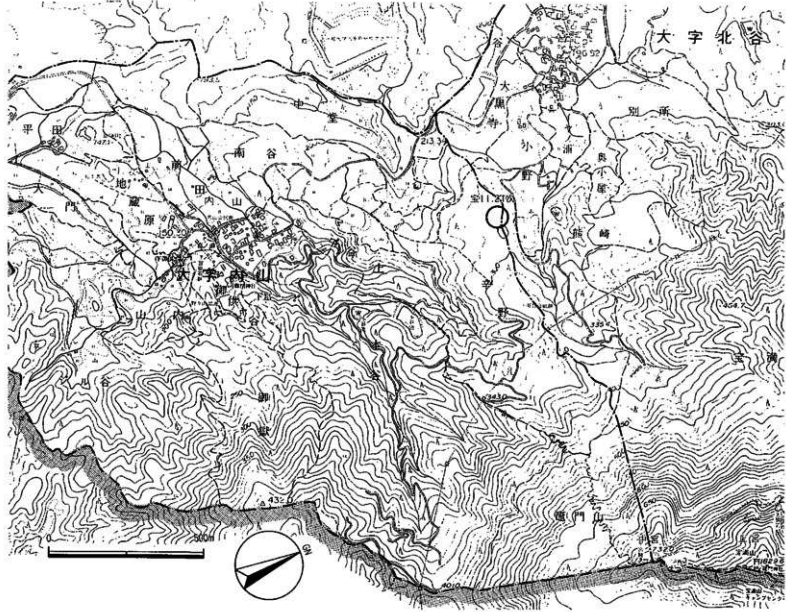
総括 庶務	教育長	長野治己
	教育部長	小田勝弥
調査	文化財課長	津田秀司
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	山本信夫
	主任主事	藤井泰人
	主 事	今村江利子
	囑 託	鈴木弘江
	技術主査 主任技師	狭川真一
		城戸康利
		山村信榮
		中島恒次郎
井上信正		
技 師	高橋 学	
	宮崎亮一	
技師 (囑託)	下川可容子	
	森田レイ子	

(平成12/2000年度整理作業)

総括	教育長	長野治己 (～12月24日) 関 敏治 (12月25日～)
庶務	教育部長	白石純一
	文化財課長	津田秀司 (～3月31日) 木村和美 (4月1日～)
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	山本信夫 (～10月23日) 神原 稔 (11月1日～)
	主任主事	藤井泰人 野寄美希
調査	嘱 託	鈴木弘江
	技術主査	城戸康利
	主任技師	山村信榮 (整理担当) 中島恒次郎 井上信正 高橋 学 宮崎亮一
	技師 (嘱託)	下川可容子 (保存処理担当) 森田レイ子 佐藤道文

また、このほか寺院関係者、発掘調査に従事された作業員のみなさまをはじめとする多くの方々のご協力とご教示をいただき調査をおこなうことができました。記して感謝申し上げます。

本中眞 (文化庁)、肥塚隆保、加藤允彦 (奈良国立文化財研究所)、小田富士雄、梶原良則 (福岡大学)、川添昭二、坂上康俊、佐伯弘次 (九州大学)、佐藤正彦 (九州産業大学)、田鍋隆男 (福岡市博物館)、冷川昌彦 (福岡大学付属大濠高校)、坂本紘二 (下関市立大学)、宮武正登、高瀬哲郎 (佐賀県名護屋城博物館)、栗原和彦、横田賢次郎 (九州歴史資料館)、田上稔 (福岡県教育委員会)、森弘子 (西南学院大学)、小西信二 (太宰府天満宮)、大庭康時 (福岡市教育委員会)、斎藤善徳 (北谷区) (以上順不同、敬称略す、所属は当時)



第3図 宝満山西側地域概念図



### 第3章 調査の概要

#### (1) 第11次調査

##### 1. 調査地

調査地は、太宰府市大字内山字辛野6-1外に所在する。調査は平成4（1992）年11月17日から翌年2月16日まで実施した。調査面積は225m<sup>2</sup>で、調査は山本信夫が担当した。なお測量及び平板実測にあたっては田中克子・井上信正の協力を得た。

##### 2. 遺跡立地

調査区は東西に延びる「九重原」と呼ばれる尾根線上にあり、本調査地点では表面に赤色の粘質土が堆積し、その土壌中に花崗岩の風化珪礫が含まれ、場所によって花崗岩の崩壊路頭が見られる。調査地は西に傾く緩やかな斜面になっており、同一面に大陸からもたらされた黄砂によって形成されたレスが堆積しているとされている。

遺構は現地表面から浅いところでは約10cmで確認され、土師器などの出土遺物を出すピット群が検出されていた。その下位にそれらに切られる「濁黄色土」が存在し、奈良時代の遺物が出土している。調査区の東側には表石を持つ墳墓が発見されている。

調査後の整理過程で遺構番号台帳が失われ、残念ながらピット群などの詳細に言及できない。（山村）

##### 3. 遺構

###### (1) 墓施設

###### 11ST018（第5図、Pla.003）

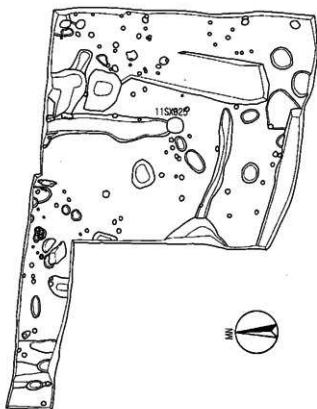
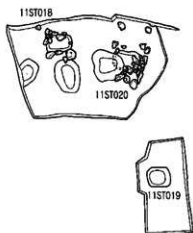
方形の石積み上部施設を持つが、その大半を後世の掘削により失っている。復原すると一辺1.4m前後の石積であったと推定される。石積みの中から長方形プランの埋葬主体（長軸1.3×短軸0.9mの土坑）が検出された。主体部は地山から切り込まれる。後述の11ST020と並列する位置にある。

###### 11ST019（第6図、Pla.006）

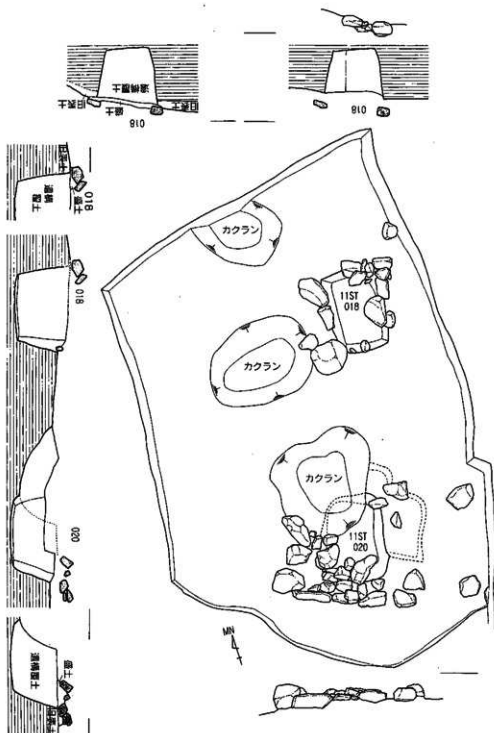
上部施設は後世の掘削により消失しているが、周辺に散らばった石材から見て、11ST018・11ST020と同様の石積が存在した可能性がある。主体部は方形（長軸1.2×短軸1.0mの土坑）で床面に近い底部からはガラス製の数珠玉102点が出土した。

###### 11ST020（第5図、Pla.005）

11ST018・019・020・025

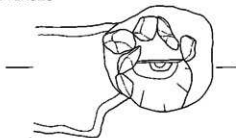


第4図 宝満山遺跡群第11次調査遺構全体図及び北壁断面図 (1/200)

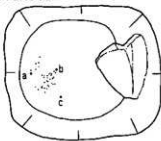


第5図 11ST018・020遺構実測図 (1/60)

11SX025

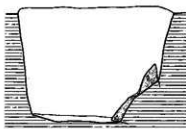
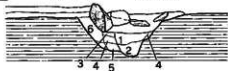


11SX019

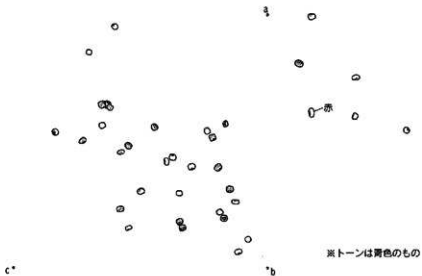


(土層凡例)

- |         |         |
|---------|---------|
| 1.赤褐焼土  | 4.炭混雜質土 |
| 2.炭混質灰土 | 5.炭層2   |
| 3.炭層1   | 6.結菜土   |



11SX019 ガラス玉出土状況 (一部)



第6図 11ST019・11SX025遺構実測図 (1/30・1/3)

上部施設は平面方形プランの石積。その大半を後世の掘削により消失しているが、残存する石積から一辺2.4m程に復原される。石積下には長方形の埋葬主体（長軸1.4×短軸1.1mの土壇）があり、底部からは人骨歯部分（成人30歳代）を検出した。主体部は地山から切り込まれる。

#### 11ST025（第6図、Pla.002）

上部施設は残存が良くないが円形の石組があり、主体部の掘り込みは直径0.85mの略円形を呈す。調査は保存のため半敷し土層を確認するに留めた。（坂本、山村）

### 3. 遺物

#### 11ST018出土遺物（第7図）

##### 土師器

器種不明（1） 口縁まで直線的に立ち上がり、端部を外方へ揃んで断面三角形に調整している。鉢か。

#### 11ST020出土遺物（第7図、Pla.009）

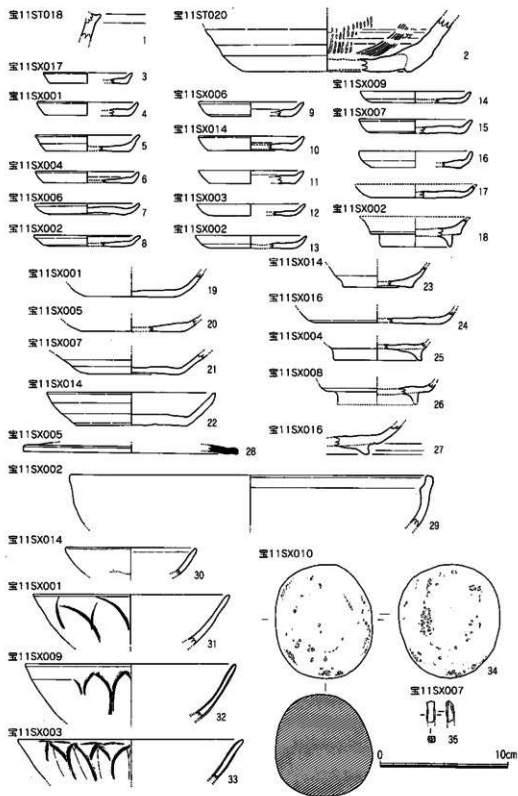
##### 陶器

摺鉢（2） 底径13.5cm。灰色の素地に白色砂と黒色粒を含んでいる。キメは細かいが気泡が多い。全面に薄く明褐色を呈す。一単位11本の櫛で摺り目を右回りで放射状に刻しているが、左側が強く、右側は下位に刻み目が残らない。使用のため内面は磨耗している。焼成後半段階では完全な酸化焼成であることから第III期（鎌倉後期）以降の備前産と考えられる。

#### 11ST019（第8図）

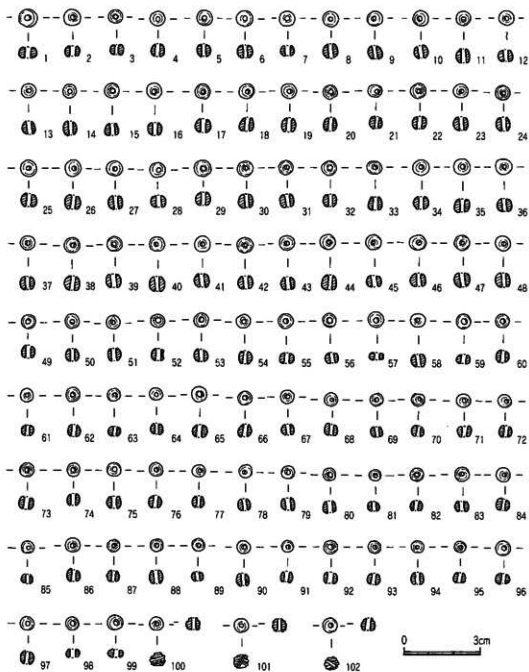
ガラス玉（1～102） 1・2は径が0.6～0.8cm、厚みは0.4～0.45cmでやや扁平な球形である。色調は半透明な赤茶色を呈し表面は白濁気味。1は2箇所小さな穴がある。3～48は明るい群青色を呈し、透明感のあるものが多いが表面が白濁するものもある。径は0.5～0.65cm、厚みは0.4～0.6cm。殆ど丁寧に研磨され、表面がなめらかな球形をなすものが多い。49～102は透明な白色を呈し、径0.4～0.6cm、厚み0.3～0.55cmである。形状・仕上がりにはばらつきがあり、表面に白い粉状のものが付着しているもの、研磨が十分でないもの、100～102のようにガラスを熔けてまだ柔らかい段階に心棒に巻き付けて球体を作ったことが観察できるものなどがある。ガラス玉の重量を計測したが、小数第一位までしか測り得なかったため、各個体の差は明瞭ではないが、赤玉は0.3・0.4g。青玉は殆ど0.2g前後、白玉は0.1g前後と考えられる。

その他の遺構出土遺物（第7図、Pla.009、010）



第7图 11ST018、020、11SX001~010、014、016、017出土遺物実測図 (1/3)

宝11ST018



第8图 11ST019出土遗物实测图 (1/2)

## 土師器

小皿a (3~17) 3~16は復原口径7.0~9.0cm、器高0.8~1.3cm。すべて底部切り放しは回転糸切りである。17は口縁端部をわずかに欠くが口径9.5cm前後に復原される。底部はやはり回転糸切りである。4・5はSX001、8・13はSX002、12はSX003、6はSX004、7・9はSX006、15~17はSX007、14はSX009、10・11はSX014、3はSX017より出土した。

小皿c (18) 口縁端部と高台端部をわずかに欠損しているが、口径は8.5cm前後と考えられる。底部から体部へ鋭く立ち上がった皿部に断面三角形の高台を貼付している。SX002から出土。

坏a (19・21~24) 19・21は底径は7.6・8.0cmで底部処理は回転糸切り。21は直線的に開き坏bになる可能性がある。いずれも板状圧痕が残る。19はSX001、21はSX007出土。24は底径10.2cmに復原され、磨耗のため底部処理は不明。SX016出土。22は口径13.4cm、器高2.6cm、底径9.0cmを測る。底部は回転糸切りされ、板状圧痕が残る。23は底径5.6cmに復原。前者とは異なる器形で上部は器壁が薄くなっており、器高は2.0cm前後と考えられる。小坏aであろう。底部は回転糸切り。22・23ともにSX014出土。

坏d (20) 残存部は少ないが、底部と体部下位は回転ヘラ削り調整され、内面が平滑でミガキ処理されていると考えられる。底径8.2cmに復原される。SX005から出土。

坏c×小皿c (25・26) 25は高台径7.0cm。全体的に磨耗しており、体部は欠損する。26は口縁部と高台底部を欠損しており、調整は磨耗のため不明。25はSX004、26はSX008からの出土。

坏c (27) やや器肉が厚めの底部に、断面三角形に近い高台を貼付する。内面はナデ調整と考えられる。SX016から出土。

## 須恵器

蓋3 (28) 推定口径17.0cm。胎土は青灰色を呈し、焼成・還元ともに良好。扁平な形で、口縁端部は断面三角の形状を残している。SX005より出土。

## 瓦質土器

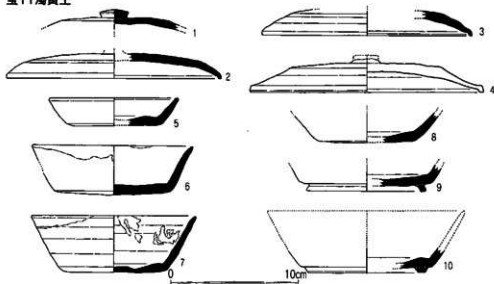
鉢 (29) 口径28.7cmに推定復原される。胎土は白色砂を多めに含み粗い。焼成が甘く全体的に磨耗気味で、口縁の形状は中国陶器の鉢I類を模倣する。SX002より出土。

## 白磁

皿 (30) 口径10.4cm。灰白色の素地にやや灰色を帯びた半透明の釉を施している。口縁端部の釉は削りとり、体部下位は施釉しない。IX-2類。SX014出土。



宝11濁黄土



第9図 濁黄土出土遺物実測図 (1/3)

龍泉窯系青磁

碗 (31~33) 推定口径15.4・16.6・17.8cm。明灰色から灰色の緻密な胎土に灰緑色から淡緑色の透明釉を施す。口縁に一部ひび割れ有り。外面にはヘラで蓮弁を片彫りして31と32は鐏はない。大宰府分類でII-a。33は鐏があってII-b類。31はSX001、32はSX009、33はSX003出土。

石製品

摺石 (34) 巾、厚みともに8cm強を測る。全体的に敲打痕が残るがかなり使用されたと考えられ球面の表面は平滑になっている。石材は風化が著しいが玄武岩と考えられる。SX010出土。

金属製品

釘 (35) 断面方形の鉄釘。腐食のため内部が空洞になっている。頭部は折り曲げられた先端部があったと考えられる。SX007出土。

濁黄色土出土遺物 (第9図、Pla.012)

須恵器

蓋c (1) 扁平な柄みを貼付している。胎土は青灰色を呈し、焼成・還元ともに良好。

蓋c3 (2) 口径17.0cmに復原される。口縁端部の処理はやや丁寧さを欠き、断面の三角形が丸味を帯びている。焼成・還元とも良好。

蓋3 (3) 推定口径16.6cm。口縁端部は丸味を帯びる。

坏a (5~8) 5は口径10.2cm、器高2.2cmを測る小坏a。6・7は口径13cm前後で、いずれも口縁部内側に煤が付着している。底部はヘラ切り後丁寧にナデ調整される。口

縁部外面の黒色部分は焼成時に重ね焼きの結果と考えられる。8は復原底径7.6cm。  
坏c (9・10) 9・10は底部のみの破片。底部から体部への屈曲は明瞭でシャープである。内面見込みはナデ調整されるが、9は内面が平滑で転用硯と考えられる。

#### 土師器

蓋c3 (4) 口径18.5cmを測り、摘みの頭部は欠損する。天井部から口縁部への屈曲が明瞭で口縁端部は断面三角形を呈す。

#### 表土 (第10図、Pl.013)

#### 須恵器

坏a (1) 口径12.6cm、器高4.1cm、底径9.2cmを測る。体部はやや外方へ直線的に開いている。底部はヘラ切り後丁寧にナデ調整する。口縁部外面は黒灰色を呈す。

坏c (2) 高台径10cm。底部から体部への屈曲は鋭いが、焼成が甘いため磨耗気味である。体部内面は灰白色、外面は黒灰色を呈す。

皿a (3) 口径16.0cm、器高1.8cm。体部はやや外方へ開いている。底部は回転ヘラ切りされ、簡単なナデ調整を行っている。焼成・還元ともに良好。

#### 土師器

小皿a (4・5) 口径8.5・8.7cm、器高1.1cmに復原される。底部はいずれも回転糸切りされる。

坏a (6~8) 7・8は口径12.6・13.2cm、器高2.4cmに復原される。6・7は底部は回転糸切り。8は磨耗している。

大皿c×大坏c (11) 口径は推定26cm前後を測る。全体的に磨耗しており、調整は不明。胎土に赤茶色粒を含んでいる。

大椀 (9) 高台部のみ残存。高台は高く、高台径10.4cmに復原される。

小甕a (10) 推定口径15.4cm。体部内面はヘラ削り、外面は刷毛で調整している。口縁部は横ナデされる。

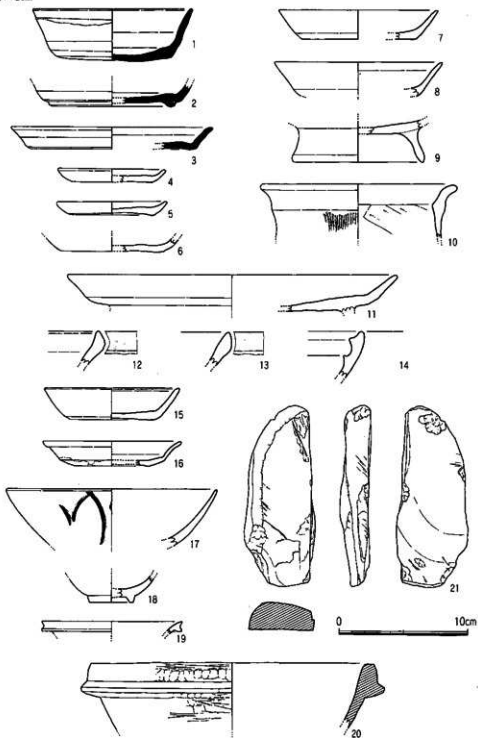
#### 須恵質土器

鉢 (12・13) どちらも口縁部の小片で、端部を扁平な王縁状につくっている。いずれも口縁部外面は黒灰色に焼け、それ以外は明灰色から暗灰色を呈す。東播系と考えられる。

#### 白磁

皿 (15) 口径10.7cm、器高2.5cmに復原される。素地は黄灰色を呈し、黄白色の不透明釉を施す。口縁端部の釉は削り取っている。焼成は甘い。全面施釉で、法量からIX-1bに分類される。

宝11表土



第10図 宝満11次調査表土出土遺物実測図 (1/3)

#### 龍泉窯系青磁

碗 (17) 口径16.7cmに復原される。外面に錆のない蓮弁をへらで片彫りする。素地は明灰色を呈し、やや濁った明緑灰色の釉を施す。II-a。

#### 同安窯系青磁

皿 (16) 口径10.9cm。明灰色から黄灰色の素地に灰色味を帯びた半透明釉を体部中部まで施している。見込みに文様は無く、I-1aに分類される。

#### 肥前系磁器

白磁小碗 (18) 高台径3.6cmに復原される。素地は灰色を呈し、明灰色の釉を施す。高台壘付の釉は削り取ったと考えられ、底部に砂が焼き付いている。

#### 陶器

鉢 (14) 素地は明赤茶灰色を呈し、白色砂粒を多量に含んでいる。無釉の鉢で口縁部内面に二段の突起を作る。中国産の鉢でI-1b類。

壺 (19) 口径11.0cmに復原される。薄い作りで、口縁が外側に喇叭状に開き、端部直下を断面三角形に摘んでいる。素地は灰色で釉は黄灰色を呈し暗灰色の斑点が入る。

#### 石製品

石鍋 (20) 口径22.3cmに復原される。短いツバを口縁下に削りだし、体部は斜め上方に開く形態で、外面は残存部全面に煤が付着している。C群。

砥石 (21) 14.3×5.6×2cm。平面部4面とも平滑で使用されている。石材は泥岩を使用している。(森田)

#### 小結

表石を持つ墳墓群はST020出土の陶器 摺鉢 が第III期（鎌倉後期）以降の備前産と考えられることから、この時期以降に形成された可能性を持っている。陶磁器や土師器の出土傾向も大宰府編年の18～19期の鎌倉後期から南北朝初期にかけてのものが大半であり、周辺の遺構形成時期と連動して墳墓が形成されたことが予測される。16次調査の所見では標石を持つ墳墓は基本的に薄葬で墓坑内には遺物を持たない傾向にあるが、11ST019は副葬遺物に数珠と思われるガラス玉があることから、本例では仏教に関係した被葬者が想定し得る。大山寺推定寺域内であり僧侶の可能性もあろう。

濁黄色では遺構は顕著な形成はなく、8世紀後半の煮炊具としての甕、供膳具としての坏がまとめて出土し、キャンプサイト的な活動の痕跡と捉えることができる。同時期には尾根続きの標高400m地点で墨書土器を伴う祭祀がおこなわれており、これとの関係が想起される。(山村)

表1 宝11出土遺物一覧表1

S-1		S-8	
須恵器	蓋3、破片	土師器	坏c、坏a×、小皿c、甕
土師器	坏a(糸)、小皿a(糸)、坏c、破片	土製品	土塊
龍泉窯系青磁	碗：II-a(1)、II(2)		
白磁	皿：IX-2(1)	S-9	
中園陶器	盤I(1)	土師器	坏a(糸)、小皿a(糸)
		龍泉窯系青磁	碗：II-a(1)、II(1)
S-2		S-10	
土師器	坏a(糸)、坏c、小皿a(糸) 小皿c	土師器	破片
同安窯系青磁	碗：I(1)	石製品	擦石×
須恵質土器	鉢		
S-3		S-11	
須恵器	坏a×皿a	須恵器	坏、破片
土師器	小皿a	土師器	甕a
龍泉窯系青磁	碗：II-a(1)、II-b(2)		
S-4		S-12	
須恵器	坏	須恵器	皿a、坏a×皿a
土師器	小皿a(糸)、坏、高台	土師器	坏、甕a、破片
土製品	土塊×	龍泉窯系青磁	碗：II-a(1)
		白磁	碗：破片
S-5		S-13	
須恵器	坏、蓋3、蓋、皿a	須恵器	坏a×皿a
土師器	坏d、甕3、甕a、皿a(ミガキ)	土師器	甕a、破片
その他	木炭		
S-6		S-14	
須恵器	破片	須恵器	蓋3、坏、破片
土師器	坏a(糸)、小皿a(糸)	土師器	坏a(糸)、小皿a(糸)、蓋3、破片
白磁	皿：IX(1)	白磁	皿：IX-2(1)
その他	木炭	S-15	
S-7		須恵器	蓋
須恵器	坏a×皿a	土師器	坏、破片
土師器	坏a(糸)、小皿a(糸)、坏a	S-16	
龍泉窯系青磁	碗：II-a(1)	土師器	坏a(糸)、小皿a、坏a(角閃石)
金属製品	鉄釘		坏c

表2 宝11出土遺物一覧表2

S-17		表土	
土師器	小皿a(糸)、破片	須惠器	坏c、坏a、小坏a、蓋c3、蓋c 蓋3、皿a、破片
S-18主体埋土上層		土師器	坏a(糸)、坏c、大坏c、大碗、 小皿a(糸)、皿a、蓋3、甕a
土師器	小皿a(糸)、機種不明、破片		甕(角閃石)、把手
		龍泉窯系青磁	碗：II-a(7)、II-b(7)、II(7) 小碗I-1b(1)
S-19			坏：III-1(1)
ガラス製品等		同安窯系青磁	碗：I-1b(1)、I(1) 皿：I-1a(1)、I(5)
S-20		須惠質土器	鉢(東播)
		瓦質土器	甕
国産陶器	甕(常滑)	肥前系陶磁器	小碗(1)
中国陶器	蓋類C-b(1)	国産陶器	壺(1)
		白磁	碗：IX(1)、V-1×VIII-2(1) 破片(1)
S-20主体埋土上層			皿：IX-1b、IX-a(1)、IX(2) 皿×(1)
龍泉窯系青磁	碗：II-b(1)	青白磁	皿×(1)
瓦質土器	鉢	中国陶器	壺：A'a(1)、B'a(1)
国産陶器	撞鉢(備前)		鉢：I-1b(1) 盤：I(1)
濁黄色土			不明：破片Ca(1)
		石製品	砥石、石鏃
須惠器	坏c、坏a、小坏a、蓋c3、蓋c 蓋3、皿a	木製品	珪化木
土師器	坏a、蓋c3、甕a、甕	表探	
		須惠器	坏a×皿a、破片
		土師器	坏a(糸)、破片

表3 室11出土遺物計測表1

遺物	No	品名	図面番号	写真番号	尺貫等	口径	高さ	底径	備考
						cm	cm	cm	(+は欠損、*は複製品)
11S1018 (S-16主体掘土上層)	1	土師 器種不明	7		001	-	2.3+	-	
11S1020 (S-20主体掘土上層)	2	陶 福鉢	7	Pla.009	001	-	4.4+	13.5+	国産
11S1017	3	土師 小皿a	7		001	7.0*	0.8	6.2*	高知
11S1001	4	土師 小皿a	7		003	8.0*	1.1	6.7*	高知
*	5	土師 小皿a	7		002	8.2*	1.3	6.7*	高知
11S1004	6	土師 小皿a	7	Pla.009	001	8.2	0.9	7.1	高知
11S1006	7	土師 小皿a	7		002	8.2*	0.9	6.6*	高知
11S1002	8	土師 小皿a	7		002	8.4*	0.9	7.0*	高知
11S1006	9	土師 小皿a	7		001	8.4*	1.1	6.4*	切手磨し不明
11S1014	10	土師 小皿a	7		002	8.4*	1.2	6.8*	高知
*	11	土師 小皿a	7		003	8.4*	1.0	6.8*	高知
11S1003	12	土師 小皿a	7		001	8.6*	0.9	6.8*	高知
11S1002	13	土師 小皿a	7	Pla.009	003	8.8*	1.0	7.0*	高知
11S1009	14	土師 小皿a	7		001	8.8*	0.9	7.3*	六字下
11S1007	15	土師 小皿a	7		001	9.0*	1.1	7.8*	高知
*	16	土師 小皿a	7		002	9.0*	1.3	7.2*	高知
*	17	土師 小皿a	7		004	-	1.6+	8.0*	高知
11S1002	18	土師 小皿c	7		004	-	2.2+	-	
11S1001	19	土師 鉢a	7		001	-	1.9+	7.6	高知
11S1005	20	土師 鉢c	7		001	-	1.1+	8.2*	
11S1007	21	土師 鉢a	7		003	-	1.6+	7.3*	高知
11S1014	22	土師 鉢a	7	Pla.009	004	13.4*	2.6	9.0*	高知
*	23	土師 小鉢a	7		001	-	1.7	5.6*	高知
11S1016	24	土師 鉢a	7		002	-	0.9+	10.2*	切手磨し不明
11S1004	25	土師 鉢c	7	Pla.009	002	-	1.4+	7.0	
11S1008	26	土師 小皿c	7		001	-	1.6+	-	
11S1016	27	土師 鉢c	7		001	-	2.4+	-	
11S1005	28	須 鉢3	7		002	17.0*	0.7+	-	
11S1002	29	須 鉢3	7		001	28.7*	4.1+	-	
11S1014	30	白磁 皿IX-2	7		005	10.4*	2.2+	-	
11S1001	31	備前 鏡II-a	7	Pla.009	004	15.4*	4.0+	-	
11S1009	32	備前 鏡II-a	7	Pla.009	002	16.6*	4.4+	-	
11S1003	33	備前 鏡II-a	7	Pla.009	002	17.8*	3.2+	-	
11S1010	34	石部品 硝石	7	Pla.009	001	8.9	8.0	8.1	支那産
11S1007	35	奈良銅器 銅	7		005	1.6	0.6	0.5	銅研先遺欠損?
11複製色土	1	須 鉢c	9		007	-	1.6+	-	ヘラ
*	2	須 鉢c3	9		007	-	2.0+	17.0*	ヘラ
*	3	須 鉢3	9		009	16.6*	2.0+	-	ヘラ
*	4	土師 鉢c3	9	Pla.012	010	18.5*	3.7+	-	ヘラ
*	5	須 小鉢a	9		004	10.2*	2.2	7.5*	ヘラ
*	6	須 鉢a	9	Pla.012	005	12.7	4.0	9.2	ヘラ
*	7	須 鉢a	9	Pla.012	001	13.0*	4.3	8.8*	ヘラ
*	8	須 鉢a	9		003	-	2.4+	7.6*	ヘラ
*	9	須 鉢c	9		006	-	2.1+	9.8*	ヘラ
*	10	須 鉢c	9		002	-	2.0+	9.3*	ヘラ
11撰土	1	須 鉢a	10	Pla.013	001	12.6	4.1	9.2	ヘラ
*	2	須 鉢c	10		003	-	1.9+	9.9*	ヘラ
*	3	須 鉢a	10		004	16.0*	1.8	13.5	ヘラ
*	4	土師 小皿a	10		005	8.7	1.1	6.8	高知
*	5	土師 小皿a	10		002	8.5*	1.1	6.2*	高知
*	6	土師 鉢a	10		006	-	1.1+	8.3*	高知
*	7	土師 鉢a	10		007	12.6*	2.35	9.1*	高知
*	8	土師 鉢	10		008	13.2*	2.7+	-	
*	9	土師 鉢	10		010	-	3.3*	10.4*	
*	10	土師 鉢	10	Pla.013	011	15.4*	4.3*	-	
*	11	土師 鉢c	10	Pla.013	009	28.0*	3.0+	-	
*	12	須 鉢	10		012	-	2.7+	-	支那産
*	13	須 鉢	10		013	-	2.7+	-	支那産
*	14	陶器 鉢I-1b	10	Pla.013	017	-	3.7+	-	中国産
*	15	白磁 皿IX-1b	10		014	10.7*	2.3	6.6*	
*	16	阿安 皿I-1a	10		016	10.9*	2.0	5.9*	
*	17	備前 鏡II-a	10		015	16.7*	4.5+	-	
*	18	肥前 小鏡	10	Pla.013	018	-	2.2+	3.6*	
*	19	陶器 蓋	10	Pla.013	019	11.0*	1.0+	-	国産?
*	20	石製品 硝	10	Pla.013	020	22.3*	5.3+	-	硝石製
*	21	石製品 硝石	10	Pla.013	021	14.3	5.6	2.1	泥製

表4 宝11出土遺物計測表2 (11ST019ガラス玉観察表)

図版No	遺物No	R-番号	色調	縦×横×厚み (mm)	重量(g)	図版No	遺物No	R-番号	色調	縦×横×厚み (mm)	重量(g)
1	3	001	赤	7.0×7.0×4.5	0.4	52	11	016	白	5.0×5.5×5.0	0.1
2	(1)	037	赤	6.3×6.3×4.0	0.3	53	20	017	白	6.0×5.5×5.5	0.1
3	1	002	青	5.5×5.0×4.5	0.2	54	21	018	白	5.5×5.5×5.0	0.1
4	2	003	青	5.5×5.5×5.0	0.2	55	24	019	白	6.0×6.0×4.5	0.1
5	10	004	青	5.5×5.5×5.0	0.2	56	35	020	白	5.0×5.0×4.5	0.1
6	12	005	青	6.0×6.0×5.0	0.2	57	4	027	白	6.0×5.5×3.0	0.1
7	14	006	青	5.5×6.0×4.0	0.2	58	13	028	白	5.0×5.5×5.0	0.2
8	22	007	青	6.0×6.0×5.5	0.2	59	17	029	白	5.8×5.5×4.0	0.1
9	23	008	青	5.5×5.5×5.5	0.1	60	18	030	白	5.0×5.5×5.0	0.1
10	27	009	青	5.5×5.5×5.0	0.2	61	25	031	白	5.0×5.0×4.0	0.1
11	29	010	青	5.5×5.5×5.5	0.1	62	26	032	白	5.5×5.0×4.5	0.1
12	15	022	青	5.5×6.0×5.0	0.2	63	28	033	白	5.0×5.0×4.0	0.1
13	16	023	青	5.2×5.0×5.4	0.2	64	31	034	白	5.0×5.0×4.5	0.1
14	19	024	青	5.5×5.0×5.5	0.2	65	32	035	白	6.0×6.0×5.0	0.1
15	30	025	青	5.5×5.5×5.0	0.2	66	34	036	白	5.3×5.3×5.0	0.1
16	33	026	青	6.0×5.5×5.0	0.2	67	(2)	038	白	5.0×5.0×4.0	0.1
17	(36)	072	青	6.0×6.0×5.3	0.2	68	(3)	039	白	5.0×5.0×5.0	0.1
18	(37)	073	青	5.6×5.5×5.3	0.2	69	(4)	040	白	5.0×5.0×4.0	0.1
19	(38)	074	青	5.6×5.5×5.5	0.2	70	(5)	041	白	5.0×5.0×4.5	0.1
20	(39)	075	青	5.5×5.0×5.3	0.2	71	(6)	042	白	5.3×5.0×4.5	0.1
21	(40)	076	青	5.0×5.0×5.0	0.2	72	(7)	043	白	5.2×5.2×4.8	0.1
22	(41)	077	青	6.0×5.7×5.0	0.2	73	(8)	044	白	5.2×5.5×4.5	0.1
23	(42)	078	青	5.3×5.5×5.3	0.2	74	(9)	045	白	5.0×5.0×4.7	0.1
24	(43)	079	青	5.8×5.6×5.3	0.3	75	(10)	046	白	5.3×5.3×5.0	0.1
25	(44)	080	青	6.0×5.8×5.5	0.2	76	(11)	047	白	5.0×5.5×4.5	0.1
26	(45)	081	青	6.1×6.0×5.5	0.2	77	(12)	048	白	5.0×5.0×4.5	0.1
27	(46)	082	青	5.8×5.5×5.3	0.2	78	(13)	049	白	5.3×5.0×4.5	0.1
28	(47)	083	青	6.0×5.8×5.0	0.2	79	(14)	050	白	5.0×5.0×5.0	0.1
29	(48)	084	青	6.4×6.2×5.3	0.3	80	(15)	051	白	5.3×5.0×4.8	0.1
30	(49)	085	青	6.0×5.8×5.5	0.2	81	(16)	052	白	4.8×4.8×3.5	0.1
31	(50)	086	青	5.8×5.5×5.2	0.2	82	(17)	053	白	5.0×5.0×4.0	0.1
32	(51)	087	青	5.7×5.7×5.0	0.2	83	(18)	054	白	5.5×5.5×4.3	0.1
33	(52)	088	青	5.0×6.0×5.2	0.2	84	(19)	055	白	5.5×5.2×4.8	0.1
34	(53)	089	青	6.0×6.0×5.0	0.2	85	(20)	056	白	5.0×4.8×3.8	0.1
35	(54)	090	青	6.0×6.0×5.5	0.3	86	(21)	057	白	5.5×5.3×4.5	0.1
36	(55)	091	青	6.0×6.0×5.0	0.2	87	(22)	058	白	5.0×5.0×4.5	0.1
37	(56)	092	青	5.8×5.8×5.2	0.2	88	(23)	059	白	5.0×5.3×5.6	0.2
38	(57)	093	青	6.0×6.0×5.8	0.3	89	(24)	060	白	5.0×4.8×4.0	0.1
39	(58)	094	青	5.5×5.5×5.5	0.2	90	(25)	061	白	5.0×5.0×5.0	0.1
40	(59)	095	青	5.8×5.8×6.0	0.3	91	(26)	062	白	4.8×4.8×4.5	0.1
41	(60)	096	青	5.8×6.0×5.5	0.2	92	(27)	063	白	5.2×5.3×4.5	0.1
42	(61)	097	青	6.0×6.0×5.0	0.2	93	(28)	064	白	5.0×5.0×4.5	0.1
43	(62)	098	青	5.5×5.5×5.4	0.2	94	(30)	066	白	5.0×5.0×4.8	0.1
44	(63)	099	青	5.8×5.8×5.8	0.2	95	(31)	067	白	4.8×4.8×4.0	0.1
45	(64)	100	青	5.8×5.9×4.7	0.2	96	(32)	068	白	5.8×5.5×4.0	0.1
46	(65)	101	青	6.0×6.0×5.6	0.2	97	(33)	069	白	5.5×5.3×5.0	0.1
47	(66)	102	青	5.8×5.5×5.8	0.2	98	(34)	070	白	5.2×5.0×3.0	0.1
48	(67)	103	青	5.6×5.8×5.7	0.2	99	(35)	071	白	5.8×6.0×3.0	0.1
49	6	011	白	5.5×5.0×5.0	0.2	100	7	013	白	5.5×5.0×5.0	0.1
50	5	012	白	5.5×5.5×5.0	0.2	101	8	014	白	5.5×5.0×5.0	0.1
51	9	015	白	5.0×5.0×5.0	0.2	102	(29)	065	白	5.8×5.5×5.0	0.1



## (2) 第21次調査

### 1. 調査地

調査地は、太宰府市大字北谷905-235～内山5-4に所在する。調査は平成10（1998）年9月7日から平成11年3月31日まで実施した。調査面積は3400㎡で、調査は山村信榮が担当した。

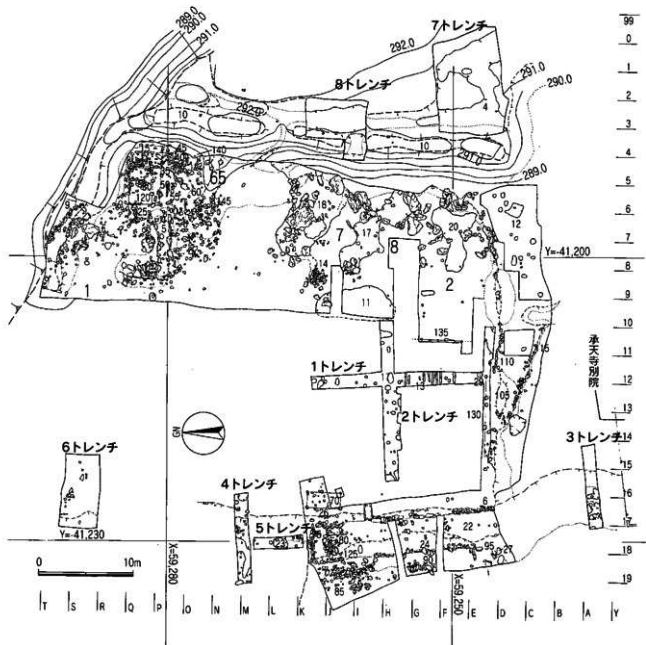
### 2. 遺跡立地

宝満山西裾の標高290mの地点にあり、周辺は「九重原（ここのえばる）」と呼ばれる山中の尾根を難壇状に人工的に造成した平坦な地形を成している。この造成部分の山頂側（東側）には中世「有智山（うちやま）城」が存在する。今回調査した21次調査の南側は本市教育委員会が1992年11月から翌93年2月にかけて発掘調査した11次調査地点にあたる。この調査では奈良時代と13～14世紀にかけて形成された遺物包含層とそれに切り込む柱痕跡、中世と考えられる石組みを伴う墳墓（数珠玉が出土）が検出された（前章参照）。遺跡のステージ面としてはこの11次と21次調査地点は連続している。

### 3. 調査概要

遺構の存在する範囲は、今回調査対象とした南北約50m、東西約45mの平坦面上の全域で確認され、出土遺物から主たる時期は鎌倉時代後半期を中心に南北朝期にかかる中世で、一部に近世江戸時代に遺跡の一部が再利用された状況が見られた。整地層の下位の土層から奈良時代の遺物が出土し、隣地の11次調査区同様に未掘の下面に同時期の文化層が存在する可能性がある。遺構の構成は西に開けた平坦面上に山頂側には造成による切り土崖上に土塁が築かれ、土塁下には地山から露出した花崗岩と人為的に並べられた石が組み合わされたものが南北の帯状にある。石組みには小振りものをを用いる箇所（21SX001）と大きな石が主体になる箇所（21SX002, 007, 008）に分けられる。石組みの西側は平坦な空閑地で現状では杉が密に植林されている。さらに、その西側は落差約3mの段差をもって傾斜し、段の部分には上下2段の石垣が検出された。

以下に遺構を個別に概観する。



第11図 宝満山遺跡群第21次調査遺構全体図 (1/400)

#### 4. 遺構

##### a 建物・柵列遺構

###### 2ISA035 (第12図、Pla.035)

調査区北東側21SB120の南面に東西方向に並行して築かれた礎石柵列で、約5.8mほど確認されている。間隔はばらつきがあり、東から0.65m、0.9m、1.0m、1.9m、1.1mを測る。礎石の高低差は最大約0.05mである。ベース面は東側が若干高くなっている。礎石eは露頭石に0.25×0.2mに彫り込んである。軸はN-88° 5' -Wを指す。

###### 21SB070 (第13図、Pla.033)

調査区中央西I~K17区に築かれた1間×1間の掘立柱建物で、21SX006から連なる21SX075・080という階段状施設の延長上にある。ab間1.28m、bc間1.75m、cd間1.95m、de間3.05m、ea間1.94mを測る。軸は正方位にたいしてN-3° 57' -Wを指す。ベース面はほぼ水平である。おそらく門状遺構と考えられ、調査区平坦面への主の入口であったのだろう。また東側の長辺の中間付近に長さ約0.4m、高さ約0.1mの石が据えてあり、門の留め石ではなかろうか。

###### 21SB120 (第12図、Pla.035)

調査区北東側に南北2間×東西3間の礎石建物跡で、間隔は南北方向北から1.16m、1.26m、東西方向東から1.45m、1.4m、1.26mを測る。長軸はN-89° 30' -Eを指す。広さは現在の6畳程度の広さの数寄屋風の離れ、ないしは持仏堂のような建物ではないだろうか。礎石dは木根により持ち上げられている。g・hは複数の礎石を使用していると認識し、床柱のすげ替えなどが行われた可能性も考えられる。またこの建物の南側には地山から露出した花崗岩と人為的に並べられた石組み(21SX140)があり、これを附属の庭園施設とする考えもある(第4章参照)。

###### 2ISA130 (第14図、Pla.068)

調査区南西のD12~14区付近で検出した東西方向に21SX105に沿う形で築かれた掘立柱式の柵列で、調査では一部検出ただけで全容は把握できてない。柱間は東から2.32m、1.02m、2.24m、2.76mを測る。軸はN-86° 11' -Wを指す。ベース面は東側が若干高くなっている。dからは土師器の坏aが出土。(第22図参照)

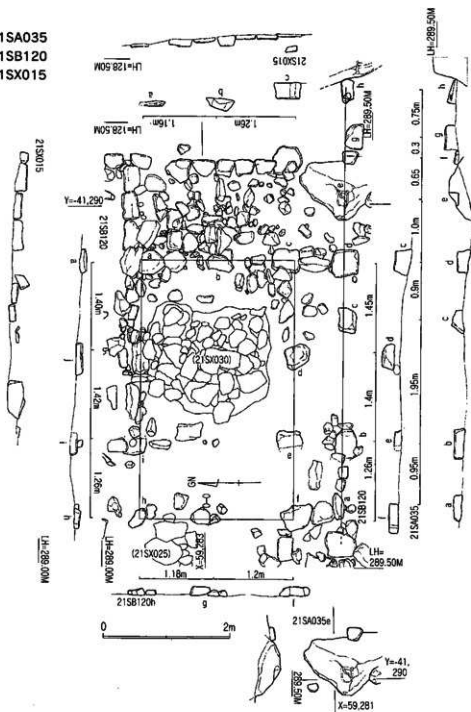
###### 2ISA135 (第14図)

調査区のE11区付近で検出した南北方向の掘立柱式の柵列で、間隔は北から0.85m、0.9m、0.9m、0.8m、0.85mを測る。軸はN-1° 14' -Eを指す。検出のみに留める。

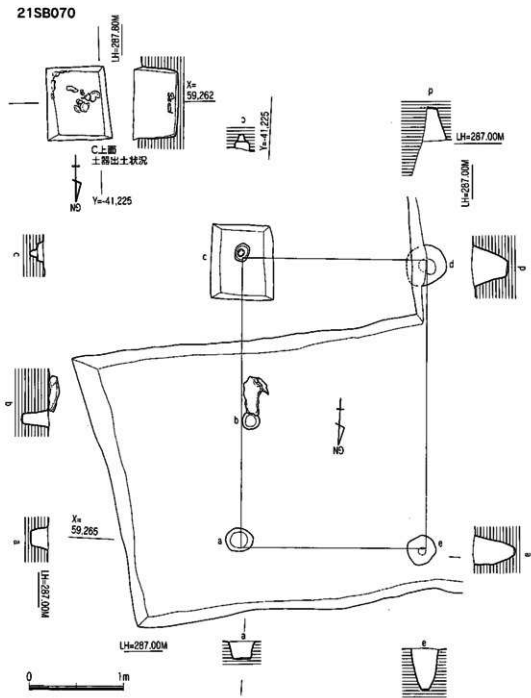
表5 宝21遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	方位 (N基準)	地区
1	21SX001	北側石組群		P5
2	21SX002	栢山水部分		F8
3	21SX003	南辺築山	84° 17' -E	D10
4		土手東壁状遺構		D3~99
5	21SX005	S-1中L字型石組	90°	O6~9
6	21SX006	石垣	6° 20' -W	16ライン
7	21SX007	中央北石組	0° 48' -W	J8~K8
8	21SX008	中央南石組		D8~18
9	21SX009	北辺石垣		Nライン以北
10	21SX010	東辺土塁		I2ライン
11	21SX011	S-8中窪	黄灰土 下層灰濁土 13c~	H9
12	21SX012	S-1南側平地		C5~9
13	21SX013	畝状遺構	90°	F12
14	21SX014	石組		J8
15		S-1内北東L字型石組	90°	P5
16		たまり状遺構		E10
17		ピット		G11
18		たまり状遺構	黄灰土	K7
19		たまり状遺構	黒灰土	G7
20	21SX020	たまり状遺構	白色土	E8
21		ピット		F8
22	21SX022	S-6西側斜面		17ライン以西
23	21SX023	たまり状遺構		K18
24	21SX024	石垣	7° 57' -W	18ライン
25	21SX025	S-1内石組		P~Q7
26		ピット		I16
27		ピット		C17
28		ピット		D12
29		ピット		D11
30	21SX030	S-1内石組		P6
31	21SX031	土器群	黒灰土	I16
35	21SA035	S-1内櫓列	88° 5' -W	P4~6
40	21SX040	石組遺構		O5
45	21SX045	石組群		O5
50	21SX050	S-1内石列		O6
55	21SX055	S-1内石列	64° 14' -W	O6
60	21SX060	S-1内石列	6° 10' -E	N6
65	21SX065	尾根状遺構	88° 55' -W	N5~6
70	21SB070	門跡	3° 57' -W	1~K17
75	21SX075	東西石組	90°	J18~19
80	21SX080	石段	90°	J18~19
85	21SX085	集積		H19
90	21SX090	集積		F19
95	21SX095	石段	90°	D18~19
105	21SX105	築山状遺構		D13
110	21SX110	石列	82° 39' -W	D10~12
115	21SX115	石列	66° 34' -W	B11~C14
120	21SB120	S-1内礎石建物	89° 30' -E	P6
125	21SX125	石列	14° 45' -W	I~J19
130	21SA130	櫓列	86° 11' -W	D12~14
135	21SA135	櫓列	1° 14' -E	E11
140	21SX135	石組み		O5
145	21SX135	石組み	66° 22' -W	O5

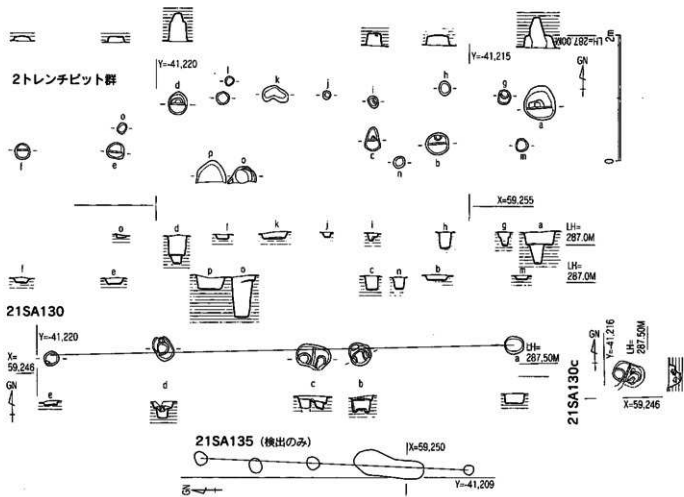
21SA035  
21SB120  
21SX015



第12図 21SA035・21SB120・21SX015遺構実測図 (1/60)

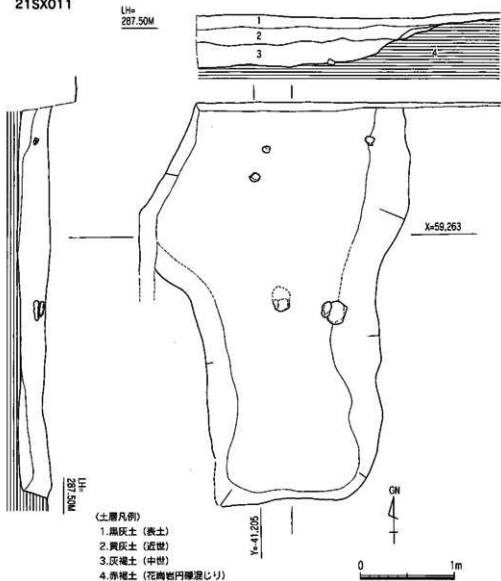


第13图 21SB070遺構実測图 (1/40)



第14図 21SA130・21SA135・2トレンチピット群遺構実測図 (1/60)

21SK011



第15図 21SK011遺構実測図 (1/40)

## b 土坑

21SK011 (第15図、Pla.038)

21SK008中西側H9区に位置する窪状遺構で、長辺約4.1+αm、深さ約0.35m(検出は一部に止まる)を測り平面形は略長方形を呈す。長軸はN-0°を指す。表土の下に近世の陶磁器片が出土した黄灰色土層、その下に中世の土師器の坏a、皿aが出土した灰褐色土層が確認された。一部は未掘のままである。灰褐色土層は近世の遺物を含まず、上下層の堆積に時間差が見られる。



### c 石組み・その他の遺構

#### 21SX001 (第11図、Pla.039)

遺物の取り上げに際して調査区北東側の石組み群を総称して付けた遺構番号であり、調査前の地表面には小振りの石が散在していた。遺構検出下状況では、礫群は上下2つの群が重複した状況で存在し、場所によってその二者の間に茶灰色の整地層が挟まっている。その層は出土遺物から鎌倉時代後半前後の時期が想定される。礫群はその配置から建物の礎石(21SB120)と建物の外側にあったL字に並べられた縁石(21SX015)、建物と縁石の間の敷石で構成されている。また、これらの遺構形成後に墳墓の標石と考えられる石組みが切り込んで形成される箇所が2箇所(21SX030,040)で見られる。また、建物の南西側は石を「L」字形に組んだ施設(21SX005)が付帯している。

#### 21SX002・020 (第16図、Pla.040)

調査区の南東側にある地盤から露頭する花崗岩周辺に人為的に石(以下、景石)を置いた空間全体を21SX002としている。中央部の窪み(21SX020)には厚さ約10cmの白色土を貼った箇所(21SX020)が存在する。この形態からこれらが枯山水を意識した造作によるものと判断される。景石および白色土下には大きく二つの層群に分けられる遺物包含層が確認され、表土、茶黒色、黄灰色が上層、黄色、黄褐色が下層と認識される(黒色土、茶灰土はその中間にあって所属不明。21SX020東端の石組みの隙間の黒色土からは21SX002(1)土師器坏aが出土(第36図参照))。そこから出土した遺物によれば上層群には近世陶磁器片が含まれている。このことから景石は少なくとも中世鎌倉時代以降に設置され、白色土は江戸時代以降に置かれたと考えられる。このことからこの遺構は鎌倉時代に形成された庭園部分を江戸時代に再利用したものと判断される。

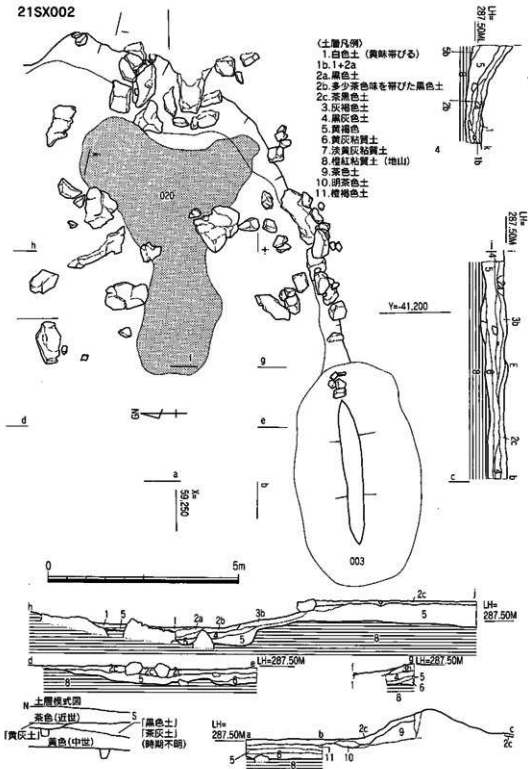
#### 21SX003 (第16図、Pla.046)

調査区南D10区に東西に築かれた築山状の盛土塊で、長さ約5.9m、幅約3.3m、高さ約0.7mを測る。ベース面はほぼ水平である。軸はN-84°17'-Eを指す。東側は21SX002枯山水部分の護岸石列に接し、西は石列21SX110、築山21SX105につながっている。土層のつながりから(第16図)近世に構築された庭園状遺構の一つであろう。

#### 21SX005 (第17図、Pla.047)

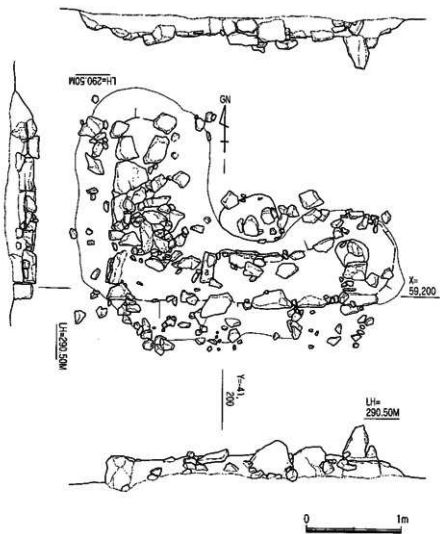
調査区北西O6~9区に南北・東西方向に築かれたL字形の石列で、上部の石は調査前より地表に露出していた。南北5.5m、東西7.9m、幅約3.4m、基壇の高さ約0.5mを

21SX002



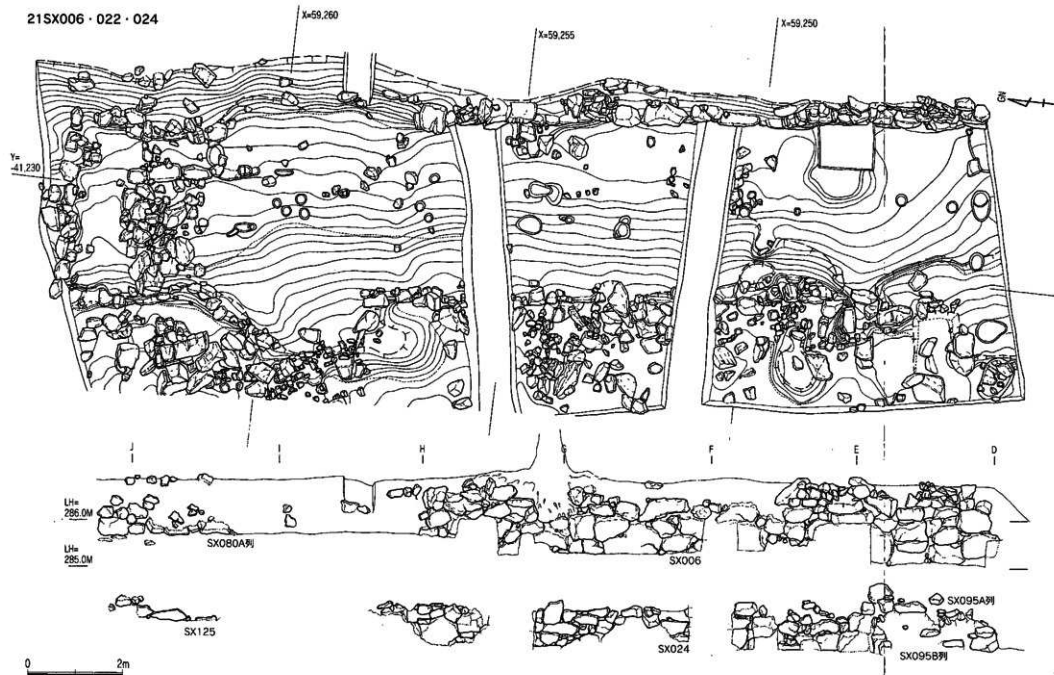
第16図 21SX002・003遺構実測図 (1/100)

21SX005



第17図 21SX005遺構実測図 (1/40)

21SX006・022・024



第18図 21SX006・022・024遺構実測図 (1/80)

測る。長軸はN-90°を指す。ベース面はほぼ水平で、基壇面は若干東側が高くなっている。最大縦0.9m×横1.1mの石材を使用する。東西方向に「a」とした内側に入り込む石があり、この東西方向の「a」までの石列は面が見えるように組んであるのに対して、南北方向は小口が見えるように平積みされている。これにより東西方向の石列と南北方向の石列には構築に時間差がある可能性が考えられる。また、長辺東端に周囲より約0.5m高い標石のように立った石が一つある。21SB120の前面に位置し、一乗谷朝倉氏遺跡例などから花壇のような機能を持つ可能性がある（酸化した赤色土壌のため土のサンプリングはおこなっていない）。

#### 21SX006（第18図、Pla.051）

調査区の西崖に南北に築かれた石垣で、南端は調査前より地表に露出していた。調査の結果から上下2段ある石垣の上段にあたるのが判明した。（下段は21SX024）上段と下段の間には2層以上の土色の異なる層が挟まれており、両者の形成時期に差がある可能性も考えられる。上段の石を覆う包含層の時期が中世を示しており、上記21SX001、21SX002のある平坦面上の鎌倉期の遺構群と同時期に存在したと考えられる。長さ約12.9m、幅約0.4～1.0m、高さ約1.0～1.8mを測り、面は西を向く。軸はN-6°20'-Wを指す。ベース面は北ほど高い傾斜面で、石垣自体は崩落している部分もあり高さは一定しない。石は整然と積んでいる訳ではなく、最大縦0.7m×横1.2m～縦約0.2m×横約0.2m程度を使用して組んでいる。

#### 21SX007（第11図、Pla.056）

調査区中央北寄り、21SX001と21SX008に挟まれた空間に広がる石組み群である。中央に地盤から露頭し樹木の貫入などによってその場で崩壊した花崗岩があり周辺に景石を置き、空間を形成している。堆積土中からは鎌倉後期を中心とした土器片が出土している。近世遺物は含まれない。

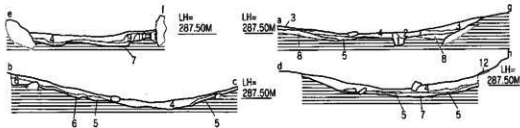
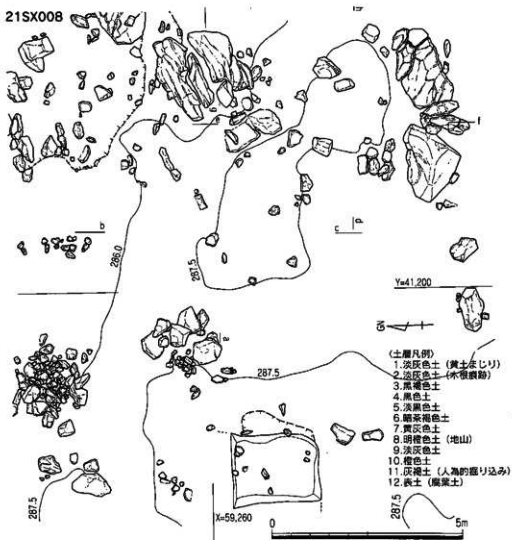
#### 21SX008（第19図、Pla.059）

調査区中央南より21SX002の北側に広がる石組み群で、地盤から露頭する花崗岩周辺に景石を置き、空間を形成している。露頭石の際で人為的な掘り込みが、また地山に人為的な段が確認された。堆積土を構成する黒色土系土層とその下位層の黄灰土層からは鎌倉後期を中心とした土器片が出土している。近世遺物は含まれない。

#### 21SX009（第20図、Pla.049）

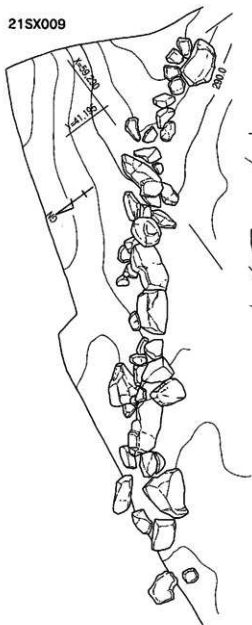
調査区北端にある東西に延びる尾根状の高まりの南斜面Nライン以北に尾根線に沿って北西から南東に築かれた石列で、長さ約6.0m、幅約0.5mを測る。軸はN-48°30'-Wを指す。石列はベース面同様に傾斜し緩やかに西に降っている。石材の大き

21SX008

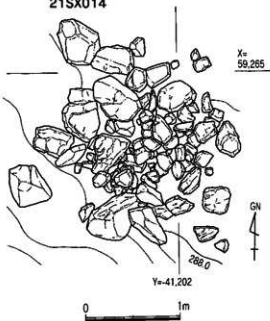


第19図 21SX008遺構実測図 (1/100)

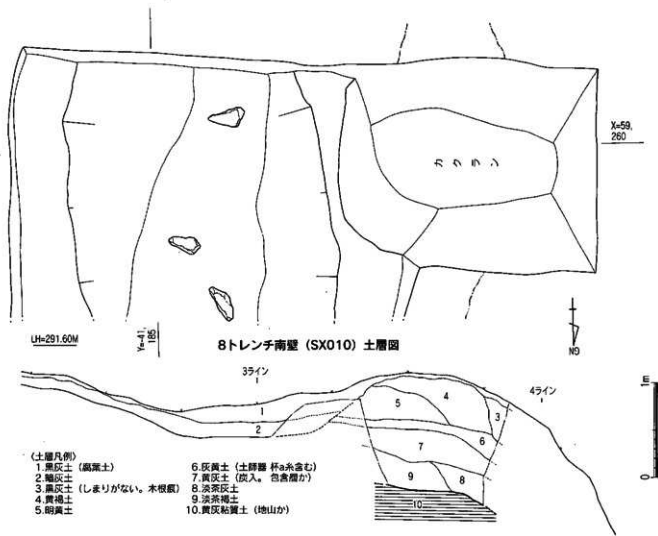
21SX009



21SX014



第20図 21SX009・014遺構実測図 (1/40)





さはまちまちで、長さ約0.6m～0.13mのものを使用している。21SB120に伴い境界（屋敷北辺）を表す遺構の可能性が考えられる。

#### 21SX010（第21図、Pla.092）

調査区東側の段造成の落ち際に南北に築かれている土塁で、長さ約45m、幅約1.3m、積み土（黄褐色土、明黄色土）の高さは約0.5mを測る。西下段にある遺構群との高低差は約3m程ある。軸はほぼ正方位を指す。1箇所トレンチを入れたのみであとは未掘である。土塁上に不定間隔で花崗岩礫が置かれており、下段にある遺構群との境界を表す遺構であろう。また、土塁に沿って東側には2.5mほどの巾が帯状に窪んでおり、排水の意図があった可能性がある。また、西側からの景観として土塁越しに山頂が望まれ、借景を意図とした造作であった可能性も否定できない。

#### 21SX012（第16図、Pla.060）

調査区南東端C5～9区、21SX002南側に位置する平坦地に付した遺構番号である。ここからはピットや土坑、焼け面、青銅製品の破片等を検出したが遺構は未掘である。堆積土中からは鎌倉後期以降の土器片が出土している。

#### 21SX013（第22図、Pla.072）

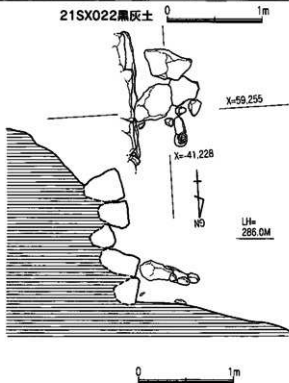
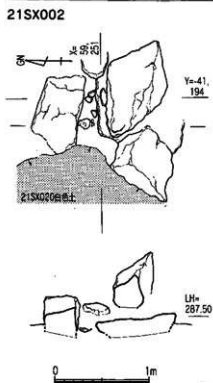
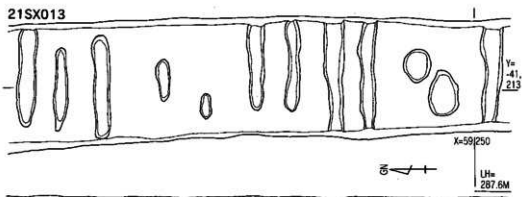
調査区南側の1トレンチ内南側より検出された東西の畝状遺構で、表土下で確認した。トレンチ部分での確認のみであり全貌は分からないが南北範囲は約5.1m、深さは約0.12m～0.05m程度である。軸はN-90°を指す。ベース面はほぼ水平である。耕作痕跡ある。近世まで下る遺構と考えられる。

#### 21SX014（第20図、Pla.061）

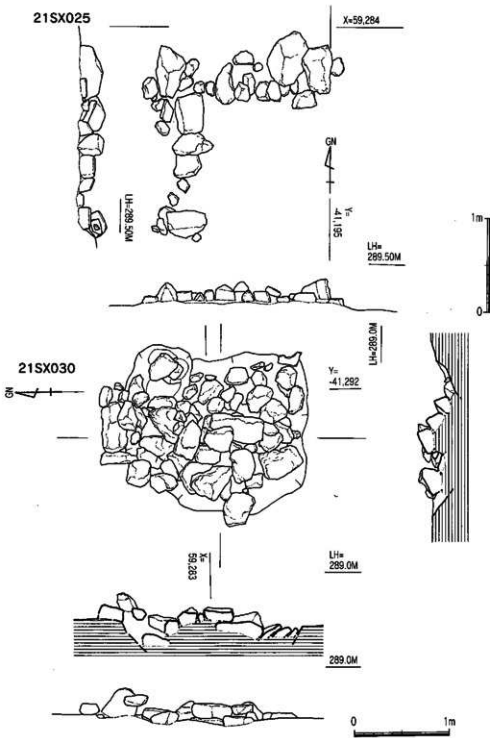
調査区中央西J8区に位置する石組み遺構で、平面形は最大長約2.75mの略円形を呈す。ベース面はほぼ水平である。表土からは鎌倉後期を中心とした遺物が出土している。土製品にトリベとみられる生産関連遺物も出土した。掘り下げずに石組みの検出のみに留める。石組みの形状から周辺に点在する標石を持つ墳墓と同様のものであろう。

#### 21SX015（第12図、Pla.036）

調査区北東端に位置する南北・東西方向に築かれたL字形の石列で、南北2.8m、東西4.55mを測る。長軸はN-90°を指す。ベース面は南北方向の南と東西方向の西が若干低い平坦面である。長さ約0.3m～約0.45mの比較的扁平な石を使用しL字に配列している。石の高低差は最大0.2m程度で、L字の交点付近がもっとも高低差が少ない。21SB120に伴う外郭施設（縁石）の可能性もある。



第22図 21SX013遺構実測図21SX002・022土器出土状況遺構実測図 (1/40)



第23図 21SX025・030遺構実測図 (1/40)

#### 21SX022 (第18・22・33図、Pla.055)

調査区西崖の斜面で、南北約22m、東西約6m、高低差約3mを測る。堆積土の掘り下げ時に石組み、石垣を検出し21SX024,075～095,125の遺構番号を付ける。この時点で21SX006と024との2段からなる石垣が存在することや、その石垣に階段状施設が付属することが判明した。また、この遺構の最終埋没時期は21SX006と21SX024を埋める黄灰色土層の出土遺物から鎌倉時代末期～南北朝時代にかけての時期と推測される。また、黄灰土のすぐ下位に堆積する黒灰土から21SX022黒灰土(3・4)が出土する。(第33図参照)

#### 21SX024 (第18図、Pla.055)

調査区の西崖、21SX006の下段に南北に築かれた石垣で、長さ10.5m +  $\alpha$ 、幅約0.5m～0.9m、高さ約0.6m～1.1mを測り、面は西を向く。軸はN-7° 57' -Wを指す。ベース面は未掘の部分が多いため明確ではないが若干北に上がっていく傾斜面である。石の組み方及び規模等は21SX006と同じである。

#### 21SX025 (第23図、Pla.039)

調査区北P～Q7区に位置する南北・東西方向に築かれたL字形の石列で、南北1.95m、東西2.45mを測る。長軸はN-90°を指す。ベース面は21SX005と接している南側が高くなっている以外はほぼ水平である。長さ0.55m～0.15mの石を使用し、高低差は0.2m程度である。この東端が21SB120に接し、そこで遺構が終わっている。終わりに置かれた石は他の石材より一回り大きく踏石中の「一番石」に見える。21SB120に伴う入口(導入)施設の可能性がある。

#### 21SX030 (第23図、Pla.063)

調査区北東P6区で、21SB120プランのほぼ中央に位置する石組み遺構で、掘り込みの平面形は長辺2.0mの略方形を呈す。ベース面はほぼ水平で、掘り込みは中心部に向いながら落ちていく。長さ0.57m～0.12mの石を使用し、中央部を高く積み上げている。21SX014と同様に掘り下げずに石の検出のみに留める。これも形状から墳墓施設の可能性がある。

#### 21SX031 (第13図、Pla.064)

調査区西I16区の21SB070を検出したトレンチから出土した土器群で、鎌倉時代後期の土師器、中国陶器、焼土塊等が出土した。一括して廃棄されたものであろうか。21SB070柱痕跡はこの土器群を除去した後に検出された。

#### 21SX040 (第24図、Pla.065)

調査区北東O5区に位置する石組み遺構で、平面形は略方形を呈す。長辺1.96m、短

辺1.5mを測る。長さ0.63m～0.2mの石で周りを囲み中央は一段低くなっている。石組みの検出のみに止める。21SX014,21SX030と同様の墳墓施設であろう。(現存する庭園のつくばいなどを据える場所に類似している。21SB120に伴う庭園状遺構であろう。)

#### 21SX045 (第24図、Pla.065)

調査区北東O5区の尾根状遺構21SX065と土塁21SX010の接する斜面に位置する。列状の石組み遺構21SX140を含み、小規模な庭園的空間を成している。21SB120に付帯する遺構か。

#### 21SX050 (第25図、Pla.066)

調査区北O6区に東西に築かれた石列で、長さ約1.5m、高さ約0.12mを測る。ベース面は西側が若干高くなっている。面は南を向く。軸はN-90°を指す。長さ約0.2m前後の石を敷いている模様で、21SA035との関連性が考えられる。

#### 21SX055 (第25図、Pla.066)

調査区北O6区に位置し、21SX050に接して北西～南東に築かれた石列で、長さ約1.25m、高さ約0.15mを測る。ベース面は西側が若干高くなっている。軸はN-64°14'-Wを指す。長さ約0.4m前後と21SX050にくらべて大きな石で構成されている。これも21SB120に伴う庭園状遺構であろうか。

#### 21SX060 (第25図、Pla.039)

調査区北東21SX010より尾根状の張りだし21SX065の北斜面に南北に築かれた踏み石状遺構で、4段、長さ約2.35m、高さ約0.6mを測る。軸はN-6°10'-Eを指す。一番下段の石が長さ約0.7mの略円形で、その他の石は約0.2m～約0.3mを測る。この踏み石状遺構を通り、尾根状の張りだし21SX065を登ると土塁21SX010に至る。おそらく通路上の階段状施設であろう。

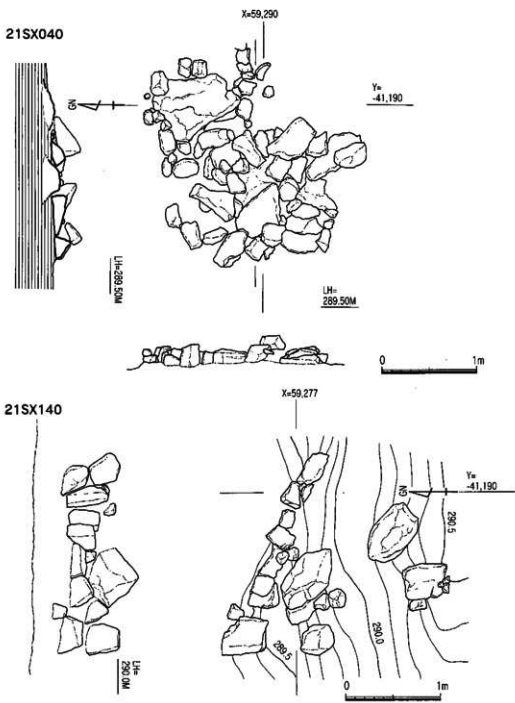
#### 21SX065 (第26図、Pla.027)

土塁21SX010から西側に派生した尾根状遺構で、削り出しによって構築される。西先端の南側に列状の石組み21SX145を持つ。

#### 21SX075 (第27図、Pla.052)

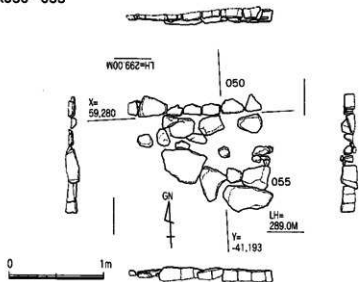
調査区西崖斜面北J18～19区に東西に築かれた石列で、長さ約4.85m、高低差約2.3mを測る。面は南を向く。軸はN-90°を指す。石は最大長約0.6mのものからなり大きな石を使用している。一部崩壊している。平行する21SX080と共に21SX006に設けられた階段状施設に伴う可能性がある。

#### 21SX080 (第27図、Pla.052)

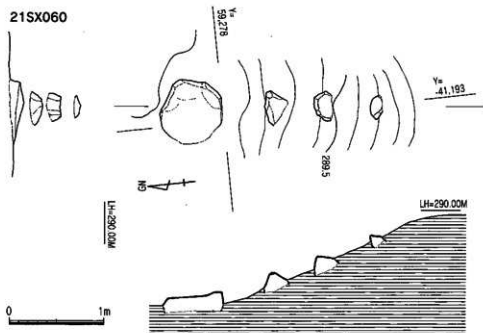


第24図 21SX040・140遺構実測図 (1/40)

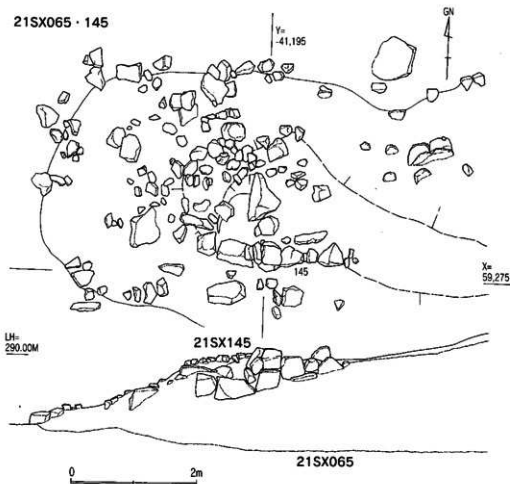
21SX050・055



21SX060



第25図 21SX050・055・060遺構実測図 (1/40)



第26図 21SX065・145遺構実測図 (1/60)

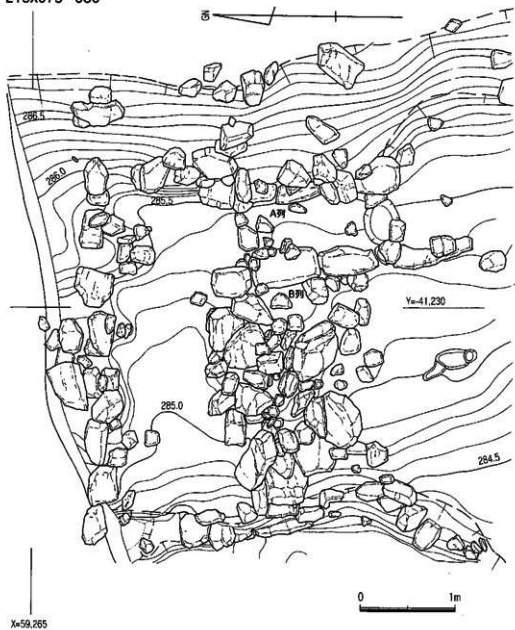
21SX075に平行する調査区西崖斜面北に東西に築かれた石段で、21SX006の北端付近と接し、長さ約4.2m、低差約2.3mを測る。面は北を向く。軸はN-90°を指す。21SX075と同様に石は最大長約0.7mのものなどかなり大きな石を使用している。石段A列より上位の段が崩壊しB列以下に転落している。A列は土手面のはらみにより傾斜面に飲み込まれたような格好になっている。この石段は石段21SX095から石垣21SX006前面のスロープに連なる導入路の延長上にあり、門21SB070に接続する機能を果たしたものと考えられる。

21SX085 (第28図、Pla.052)

調査区西崖北西H19区に展開する集石群の総称で付けた遺構番号である。集石群は石垣を埋める堆積土中ないし上にあり、土層上は後事的な様相を呈す。石が集中している部分は一部半規則的であり、平面形はそれぞれ約1.7m、約1.7m、約2.0mの略三

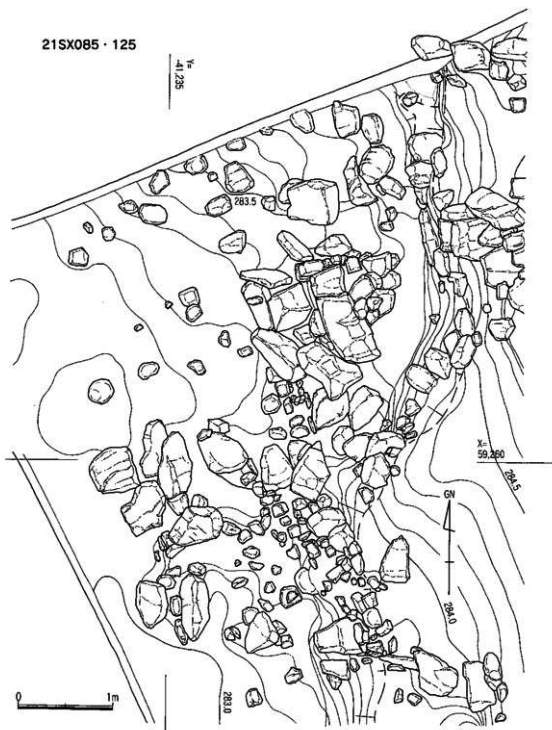


21SX075・080



第27図 21SX075・080遺構実測図 (1/40)

21SX085・125



第28図 21SX085・125遺構実測図 (1/40)

角形状を呈し、最大約0.8mの石から構成されている。遺構の性格は不明である。

21SX090 (第29図、Pla.051)

調査区西崖中央西F19区に位置し、21SX024の下段に展開する集石群の総称で付けた遺構番号である。最大約0.9mの石から構成されている。21SX085と同様に遺構の性格は不明である。

21SX095 (第29図、Pla.067)

調査区西崖南西D18～19区に東西に築かれた石段遺構で、21SX024の南端に接している。最大約0.8mの石から構成されている。軸はN-90°を指す。A列は南北方向の踏み石が残り、B列は両裾の土止めの東西方向の石が斜面に食い込む形で残る。21SX080と同様に石垣21SX024に設けられた階段状施設である。

21SX105 (第30図、Pla.068)

調査区南D13区に東西に築かれた築山で、長さ約6.5m、幅最大約3.7m、高さ約0.5mを測る。ベース面はほぼ水平である。軸はN-90°を指す。頂上部分は多少平らになっている。南側の裾を覆う形で21SX115がある。21SX002から続く庭園状遺構の構成要素の一つであろう。近世の可能性がある。

21SX110 (第30図、Pla.069)

調査区南D10～12区に東西に築かれた石列で、長さ約5.2mを測る。一部の石は調査前より地表に露出していた。軸はN-82°39'-Wを指す。ベース面は東が若干高くなっている。大きさ約0.5m～0.2mの石を築山状遺構の裾に並べて、面は北を向く。21SX002・003から続く庭園状遺構の一つであろう。

21SX115 (第30図、Pla.070)

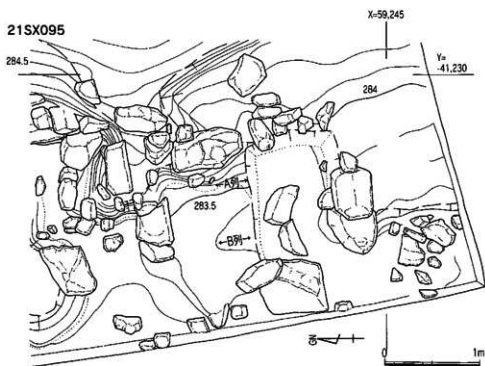
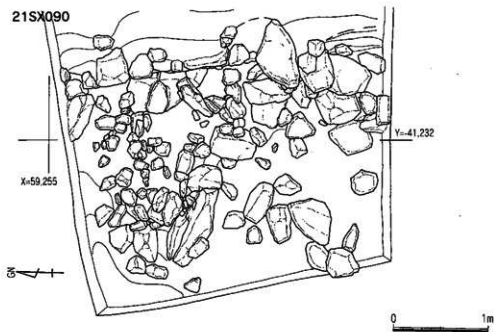
調査区南B11～C14区に東西に築かれた石列で、長さ約8.7mを測る。一部の石は調査前より地表に露出していた。軸はN-66°34'-Wを指す。0.4m～0.2mの石を築山状遺構の裾に並べて、面は南を向く。21SX002・003から続く庭園状遺構の一つであろう。

21SX125 (第28図、Pla.052)

調査区西崖21SX075・080の西端に接している石垣状遺構で、面は西を向く。途中屈折していて長さ約3.9mを測る。長軸はN-14°45'-Wを指す。21SX024から続く石垣の可能性はある。

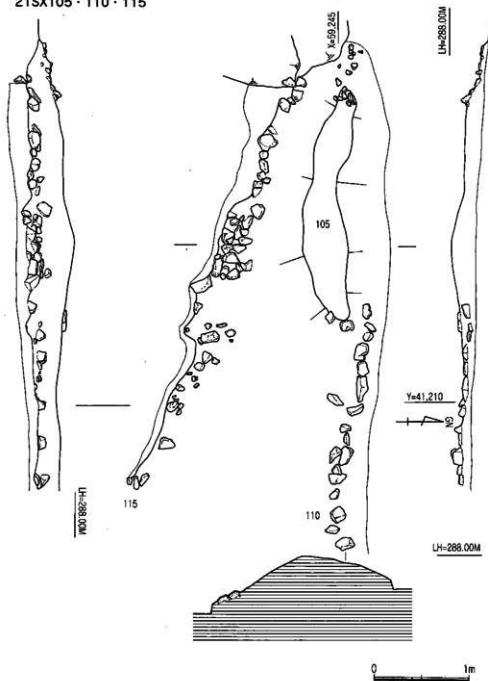
21SX140 (第24図、Pla.039)

調査区北東O5区に位置し、21SX010(土塁)より尾根状に張りだした21SX065の北



第29図 21SX090・095遺構実測図 (1/40)

21SX105・110・115



第30圖 21SX105・110・115遺構実測図 (1/80)

斜面にはほぼ東西に築かれた石組み遺構で、面は北を向く。長さ約2.15m、高さ約0.7m～約0.4mを測る。ベース面は若干東側が高くなっている。軸はN-66° 22' -Wを指す。露頭石も使用し、石の大きさはばらつきがある。21SB120に伴う庭園状遺構であろう。

#### 21SX145 (第26図、Pla.050)

調査区北東21SX010 (土壘) より尾根状に張りだした21SX065の南側先端部に築かれた石組みで、長さ2.7mを測る。面は南を向く。最大長さ0.65m、高さ0.4mの石を使用している。軸はN-88° 55' -Wを指す。目的、用途は不明だが、テラスの崩壊を防ぐために築いたものであろうか。

### e トレンチ

#### 1・2トレンチ (第014・022図、Pla.071・073)

庭園遺構と石垣の間の空閑地に、東西南北を幅約1mの十字形に最初の遺物包含層をはぎ取る高さまで掘り下げた。ここからは掘立柱建物に関係する柱痕跡2トレa～fと畑に関係する畝状遺構21SX013が検出された。このことから、この空閑地には建物が展開していた生活空間であると判断される。包含層からは近世の遺物が出土している。

#### 3トレンチ (第31図、Pla.075)

調査区南の西崖に、斜面に合わせて長さ約8.7m、幅約1mの長方形に掘り下げた。高低差は約2.6mを測る。灰褐色土層より中世の遺物に混じって奈良時代の須恵器が多数出土した。21SX022や4トレンチの断面形状と比較すると落ち際の角がはっきりしており、中段のテラスなどはなく、急斜面を成している (第33図参照)。

#### 4トレンチ (第31図、Pla.076)

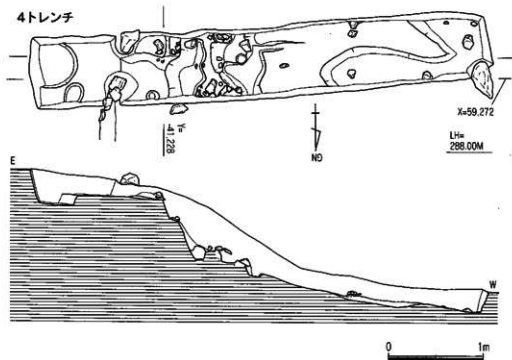
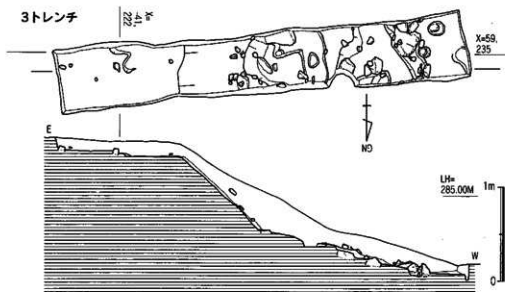
調査区中央の西崖に、斜面に合わせて長さ約9.64m、幅約1mの長方形に地山まで掘り下げた。高低差は約2.5mを測る。3トレンチにくらべ斜面に石が多く、全体に緩い斜面を成し、3トレンチとの違いを見せている (第33図参照)。

#### 5トレンチ (第32図、Pla.076)

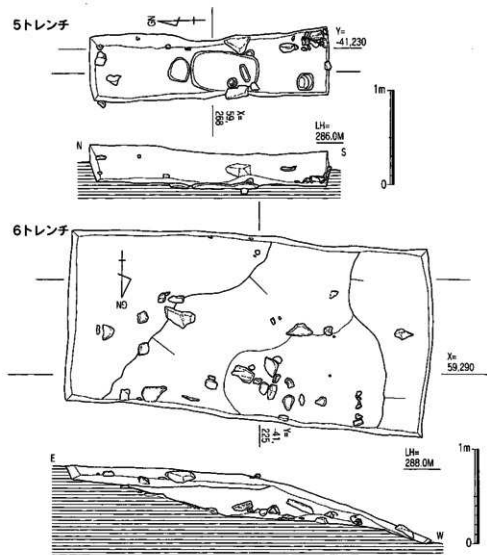
調査区中央の西崖に、4トレンチに直交するような形で、斜面下南北方向に長さ約5.04m、幅約1mの長方形に地山まで掘り下げた。どの層からも輸入陶磁器が多く出土している。中央に長さ約1.4m、幅約0.9mの性格不明の浅い土坑21SX023がある。

#### 6トレンチ (第32図、Pla.077)

調査区南の西崖に、斜面下南北方向に長さ約7.6m、幅約3.6mの長方形に地山まで



第31図 3・4トレンチ遺構実測図 (1/80)

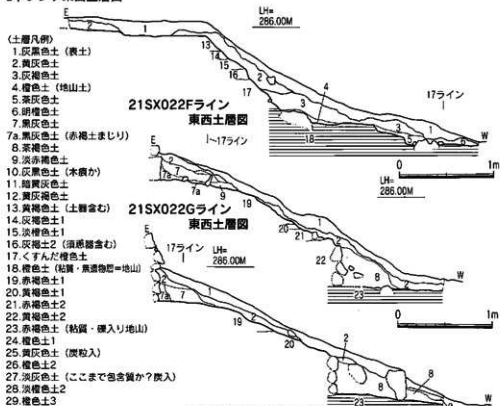


第32図 5・6トレンチ遺構実測図 (1/80)

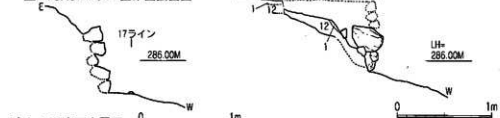
掘り下げた。L字形に配列した石を検出した。一部浮いている石もあるが、恣意的な配石の可能性もある。東西の断面形状は4トレンチ箇所よりさらに緩い斜面を成している。



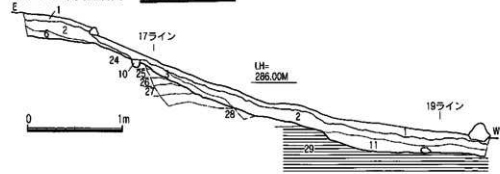
### 3トレンチ東西土層図



### 宝21SX022G17区東西断面図



### 4トレンチ東西土層図



第33図 21SX022・3・4トレンチ土層実測図 (1/80)

## 5. 出土遺物

### 出土遺物

21SK011灰褐色土出土土器 (第34図、Pla.098)

#### 土師器

小皿a (2) 口縁が短く延びる。底部は糸切りで、板状圧痕が残り、内底ナデが確認される。

坏a (3・4) 3は底部の調整は不明である。4は復元底径8.3cmを測る。底部は糸切りで、板状圧痕が残る。

#### 陶器

第34図 21SK011出土遺物実測図 (1/3)

皿 (1) 折縁形皿の口縁部で、内面は刷毛手を施している。唐津系か。

21SX001茶灰土出土遺物 (第35図、Pla.100)

#### 土師器

小皿a (1・2) どちらも底部は糸切りで、1は板状圧痕が残る。

小皿b (3) 口縁部を欠き、底部は糸切りで、板状圧痕が残り、内底ナデが確認される。

坏a (4・5) 4は口縁部を欠き、底部は糸切りで、板状圧痕が残る。5の底部は糸切りのみ確認。

#### 石製品

鍋 (6) 底部は欠損し、復元口径20.0cm、器高2.1+cmを測る。短いツバを口縁下に削りだし、体部は斜め上方に開く形態で、内面は研磨された可能性がある。森田分類のC群にあたる。

#### 土製品

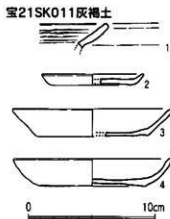
像 (7) 縦6.5cm、横6.0cm、高さ3.5cmを測る。像は焼成前に複数の部品を組み合わせたもので、接合面を串様の工具で傷付けて、接合には串様のものが通されていた可能性がある。内面はユビオサエの後にナデられ、焼成時のイブシがかかっている。このことから像は中空構造であった可能性がある。

21SX001黄灰土 (第35図、Pla.102)

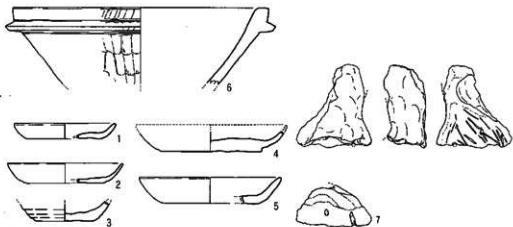
#### 土師器

小皿a (1) 口縁部を欠損し、底部は糸切りで、内底の調整はナデである。

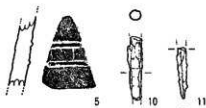
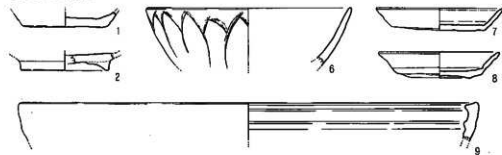
小皿c (2) 高台部分のみ残存、断面三角形の中央側の幅が広い張り付け高台である。



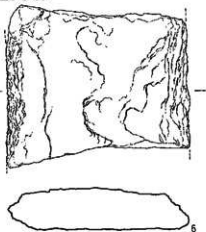
室21SX001 赤灰土



室21SX001 黄灰土



室21SX001



第35图 21SX001出土遺物実測図 (1/3)

坏a(3・4) 3は底部のみで、底部は糸切りある。4は底部糸切りで、板状圧痕が残り、内底ナデが確認される。

#### 瓦質土器

鉢(5) 体部の破片で、器高5.5+cmを測る。胎土は細かく、金雲母を少し含む。外面は黒色にイブシてあり、方形を重ね対角線を引いた0.9cm×0.9cmのスタンプが横一列にある。胎土は褐色系の色調を呈す。

#### 龍泉窯系青磁

碗(6) 口縁部～体部にかけて残存し、体部には片影蓮弁文を描くが鏝は入らない。素地は灰色でキメ細かい。やや黄色味を帯びた緑色の透明釉を施し、少し貫入が入る。

#### 碗II-a類

##### 白磁

皿(7) 素地は黄灰色でキメ細かい。黄褐色味を帯びた透明釉を施す。全面施釉だが、口縁端部は釉をかき取る。皿IX-b類

#### 同安窯系青磁

皿(8) 素地は乳黄灰色でキメ細かい。やや空色気味の透明釉を施す。体部外面下方は施釉されていない。皿I-1a類

#### 中国陶器

鉢(9) 口縁部のみで、復元口径36.0cm、器高3.0+cmを測る。胎土は芯は暗灰色で表面は茶褐色を呈し、砂粒を多く含みキメが粗い。無釉である。鉢I-1b

#### 金属製品

釘(10・11) どちらも鉄製で、10は先端部を欠損し、現存長5.1cmを測る。断面は腐食膨張により略円形を呈し層状に膨れている箇所がある。11は鉄釘の先端部のみで現存長4.0cmを測る。断面は方形を呈す。腐食し中空になりかけていて、外面は気泡状に錆ができています。

21SX001(第35・36図、Pl.103・104)

#### 土師器

小皿a(1) 口縁が短く延び、底部は磨耗により調整は不明である。

皿c(2) 高台部のみで残存。胎土は金雲母を多く含む。内底ナデが確認される。

大皿a(3) 復元口径27.2cm、器高2.5cm、復元底径21.0cmを測る。胎土は砂粒を多く含む。底部はきれいな回転糸切りで、板状圧痕が残り、内底ナデが確認される。太宰府では同時期では希少な器種である。

#### 龍泉窯系青磁

碗(4) 高台部～体部下半のみで、器高2.7+cm、底径5.1cmを測る。素地は淡茶灰色でキメ細かい。青灰色味を帯びた透明釉を施し、高台外面まで施釉する。貫入が入り、内面見込みに葉文の印刻がある。碗II-c類

白磁

皿(5) 復元口径10.5cm、器高1.9cm、復元底径6.0cmを測る。素地は灰白色でキメ細かい。青味を帯びた灰白色の透明釉を施す。全面に施釉するが口縁部は釉を削り取っている。皿IX-1b類

石製品

板状石製品(6) 縦12.7cm、横14.4cm、幅3.4cmを測る。両端は剥離加工を施す。石材は長石岩か。

21SX001表土(第36図、Pla.105)

白磁

碗(1) 高台部のみで、器高2.1+cm、復元底径7.5cmを測る。素地は灰色味を帯びた白色で、気泡がある。灰色味を帯びた白色の透明釉を施す。体部下半まで施釉し、一部高台にも掛かる。高台外面から体部にかけて連続したスジ状の痕跡がある。碗IV-1a類

石製品

鍋(2) ツバの部分のみで、高さ3.3+cmを測る。内面に線状のキズが多くある。ツバの部分にはススが付着している。

土製品

像(3) 縦5.0cm、横4.2cm、幅1.2cmを測る。外面はナデで、内面はユビオサエである。中空構造であったと考えられる。21SX001茶灰土出土(7)と同一個体か。

21SX002黄色土(第36図、Pla.107)

土師器

小皿a(1・2) どちらも口縁部が欠損し、底部は糸切りで、強い板状圧痕が残り、内底ナデが確認される。

大皿(3) 口縁部のみで、器高3.1+cmを測る。胎土は微細雲母を少し含む。激しい磨耗により調整は不明。

須恵器

蓋4(4) 口縁部のみで、器高1.1+cmを測る。淡灰白色を呈し還元は良好。外面は不定方向のナデが施される。

土師質土器

風炉 (5) 直立した口縁部片で、器高3.9+cmを測る。胎土は0.5~1mmの砂粒を多く含み、淡黄褐色を呈す。外面に方形を重ねた0.9cm×0.9cmのスタンプが横一列にある。21SX003茶色土 (2) と同一個体か。火鉢E-3類 (山村1997)。

金属製品

釘 (6) 鉄製で両端とも欠損し、現存長2.6cmを測る。断面は方形を呈し、腐食により膨張し、一部中空になる。

21SX002黄灰土 (第36図、Pla.107)

土師器

小坏a (1) 口縁~体部にかけての薄片。磨耗により調整は不明。

土製品

土鈴 (2) 縦1/2欠損し、縦3.7cm、横2.8cm、厚さ0.3cmを測る。胎土は砂粒を僅かに含む。上部に紐を通すための穴がある。片面が欠損する。

21SX002黄褐土 (第36図、Pla.107)

土師器

坏a (1) 口縁部を欠損し、胎土に1.5mm以下の雲母をわずかに含む。磨耗により底部の調整は不明。

須恵器

坏a×坏c (2) 底部を欠損する。色調は淡青灰色を呈し、還元は良い。

21SX002 (第36図、Pla.108)

土師器

坏a (1) 底部は完形だが口縁は僅かに残存するのみで、底部は糸切りで、板状圧痕が残る。

21SX003茶色土 (第37図、Pla.110)

土師器

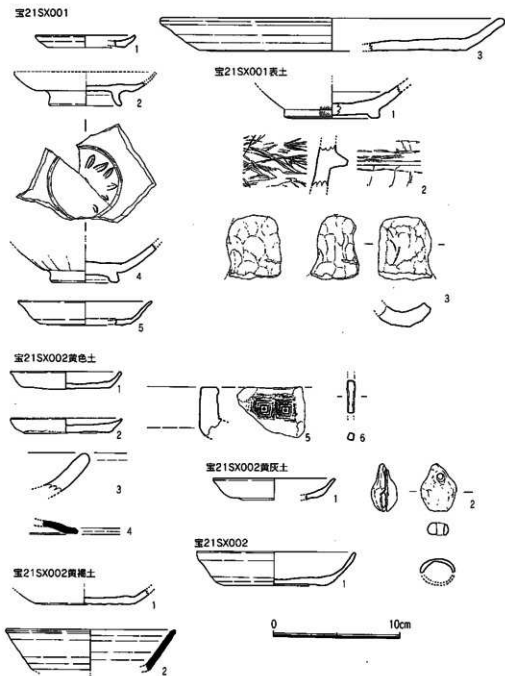
小皿a (1) 口縁部1/2を欠損し、胎土に微細雲母も少し含む。底部は糸切りで、板状圧痕が残る、内底ナデが確認される。

土師質土器

風炉 (2) 直立する口縁部の方形を重ねた0.9cm×0.9cmのスタンプのみで、器高2.8+cmを測る。21SX002黄色土 (5) と同一個体か。

白磁

碗 (3) 復元口径16.8cm、器高6.6cm、底径13.0cmを測る。素地は僅かに黒色粒を含むがキメ細かい。灰白色~淡灰黄色味を帯びた透明釉を施す。体部下半まで施釉す



第36图 21SX001・002出土遺物実測図 (1/3)

る。見込みは環状に釉を掻き取っている。火災などによる2次焼成を受けた可能性がある。椀VIII-3類

21SX003黄灰土（第37図、Pl.110）

土師器

小皿a (1) 口縁が短く延びる。底部は糸切りで、板状圧痕が残り、内底ナデが確認される。

21SX003表土（第37図、Pl.110）

龍泉窯系青磁

坏 (1) 復元口径12.3cm、器高4.3cm、復元底径7.1cmを測る。素地は淡褐黄色を呈す。淡緑灰色味を帯びた透明釉を全面に施すが、高台端部はふき取り露胎している。

坏III-5b

21SX004淡灰土（第37図、Pl.110）

石製品

砥石 (1) 縦7.0cm、横3.4cm、厚さ0.8～2.5cmを測る。黄褐色を呈し、目地は荒い。石材は砂岩。

金属製品

釘 (2～4) いずれも鉄製で、2は釘の先端部で現存長2.1cmを測る。頭側は欠損する。断面は膨張により略円形を呈す。錆の付着は少ないが、腐食して中空になりかけている。3は錆の膨張により上部がさけY字形になっている。現存長2.7cmを測る。断面は長方形を呈す。4は有頭の釘で現存長6.8cmを測る。頭部は折り曲げられている。断面は方形を呈す。腐食が進み層状・気泡状に錆が発生している。

21SX004表土（第37図、Pl.110）

石製品

砥石 (1) 縦9.5cm、横7.8cm、厚さ4.3cmを測る。淡褐黄色を呈し、目地は粗い。石材は花崗岩。

21SX006黄灰土（第37図、Pl.113）

土師器

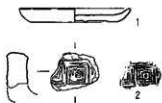
小皿a (1～3・5～7) 全て口縁が短く延びる。底部は糸切りで板状圧痕と内底ナデが確認されるものもある。

小皿c (4) 断面三角形の高台を貼付していて、調整は磨耗して不明。

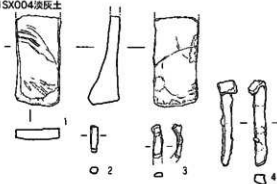
坏a (8～11) いずれも口縁～底部半ば程度まで残存。8・10は須恵質で2次焼成を受けた可能性がある。底部は糸切りで板状圧痕及び内底ナデが確認されるものもある。



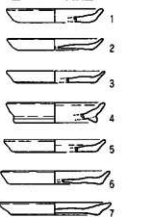
宝21SX003茶色土



宝21SX004淡灰土



宝21SX006黄灰土



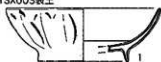
宝21SX003黄灰土



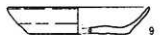
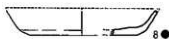
宝21SX004表土



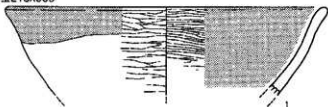
宝21SX003表土



宝21SX007表土



宝21SX009



0 10cm

●は須恵質化した土師器

第37図 21SX003・004・006・007・009出土遺物実測図(1/3)

21SX007表土 (第37図、Pla.114)

石製品

フレーク (1) 縦2.7cm、横3.1cm、厚さ0.8cmを測る。混入物が少なく漆黒色を呈す黒曜石である。表面は風化して素地に土がしみた様にして入っている。

21SX009 (第37図、Pla.114)

瓦質土器

鉢 (1) 口縁部～体部にかけてのみで復元口径25.3cm、器高7.0+cmを測る。胎土は0.5～1mmの砂粒を多く含み、微細雲母を僅かに含む。内外面ともミガキが施され、内面と外面口縁部下まで黒色化する。太宰府では器種としては希少な存在である。イブシなどは黒色土器A類のような質感である。

21SX012黄灰土 (第38図、Pla.114)

石製品

鍋 (1) 口縁部のみで、器高4.3+cmを測る。胴部の割れ口は2次加工面によって平坦化している。外面は黒灰色に変色し、ツバの部分にはススが付着する。石材は滑石。

土製品

焼土塊 (2) 縦2.7cm、横2.8cm、厚さ1.1cmを測る。胎土は白色砂粒を僅かに含み、色調は橙褐色を呈す。土師で焼成は良好である。

金属製品

銅製品 (3) 板状で縦2.8mm、横3.6mm、厚さ0.1mmを測る。3本の稜が放射状に入りこの部分は厚さ2.5mmを測る。どの端も欠損しており製品の形状を特定できない。

21SX031黄灰土 (第38図、Pla.116)

土師器

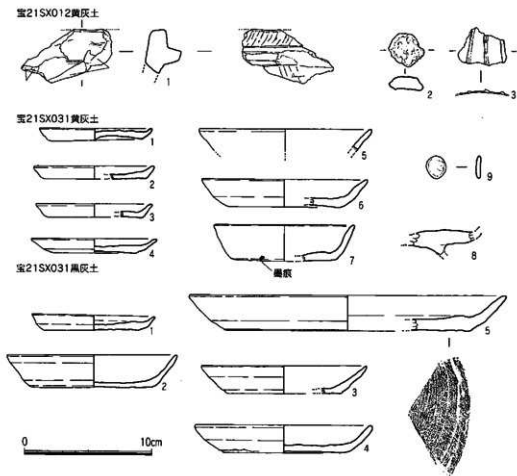
小皿a (1～4) 1は底部糸切りで、強い板状圧痕により凹凸が激しい。また強い内底ナデで二条の線が確認される。2・4は口縁が短く延び底部は糸切りで、板状圧痕が残り、内底ナデが確認される。3は内底外側が凹む。

皿c (8) 高台部のみで、器高1.5+cmを測る。胎土は砂粒をやや含む。

坏a (5～7) 5は口縁部のみの小片。6は底部糸切りで、板状圧痕が残り、内底ナデが確認される。7は外面底部との境にシミ状の墨跡がある。底部は糸切りで、板状圧痕が残り、内底ナデが確認される。

石製品

玉状石製品 (9) 縦1.8cm、横1.6cm、厚み0.4cmを測り平たな形を成す。淡乳褐色を呈す。石材は泥岩か。



第38図 21SX012・013・031出土遺物実測図 (1/3)

21SX031黒灰土 (第38図、Pl.117)

土師器

小皿a (1) 底部は糸切りで、板状圧痕が残り、内底ナデが確認される。

皿a (4) 底部は糸切りで、板状圧痕が残る。

坏a (2・3) 2は底部は糸切りで、板状圧痕が残り、内底ナデが確認される。3は底部に黒色化した部分がある。底部は糸切りで、内底ナデが確認される。

大皿a (5) 復元口径25.0cm、器高2.8cm、復元底径19.3cmを測る。底部は糸切りで、内底ナデが確認される。

21SX022茶褐土 (第39図、Pl.119)

土師器

小皿a (1・2) 1は糸切り。2は磨耗により調整は不明。どちらも小片。

坏a (3) 底部は糸切りである。

#### 龍泉窯系青磁

碗(4・5) 4は高台部分のみで、見込みに「河濱遺范」のスタンプがかるうじて読みとれる。碗I-1c類。5は高台部分のみで、全面施釉の後高台部分の釉を拭き取る。外面は鎚連弁文様。II-b類。

#### 白磁

壺(6) 釉調は少し青味を帯びた透明釉で、内面も全面施釉し外面は高台外側まで施釉した後、設置面の釉をカキ取る。高台は削りだして露胎し、茶赤色を呈す。よって胎土は鉄分を多く含むか。壺III類で四耳壺か。

21SX022黒灰土(第39図、Pl.121)

#### 土師器

小皿a(1) 底部は糸切りで、板状圧痕が残る。

坏a(2~4) いずれも底部は糸切りで、板状圧痕が残るものもある。2は全体に器形がゆがんでいる。

#### 瓦質土器

皿c(5) 胎土は砂粒と微細雲母を少し含む。底部糸切り後高台を貼り付ける。内底はナデが確認される。

21SX022灰褐土(第39図、Pl.122)

#### 土師器

小皿c(1) 胎土に大きめの砂粒が入る。磨耗により調整は不明。

皿c×(2) 胎土に大きめの砂粒が入る。磨耗により調整は不明。

#### 瓦質土器

鍋(3) 直線的な口縁部片で、胎土は0.5~1mmの砂粒を多く、微細雲母を少し含む。焼成は良く、器面は黒灰色でその下が淡褐黄色で芯が黒灰色を呈す。内面はハケ目調整で、外面は磨耗により不明。

#### 金属製品

釘(4) 鉄製。有頭で、長さ3.0cm、幅0.8cm、厚さ0.7cmを測る。腐食により膨張し、ヒビが入っている。

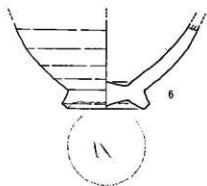
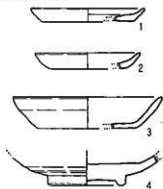
21SX022表土(第39図、Pl.123)

#### 土師器

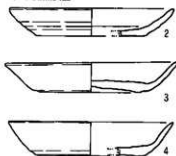
鉢c(1) 器高3.8+cm、復元底径13.8cmを測る。焼成は良く、淡褐黄色を呈す。脚付き鉢の底部か。

#### 中国産陶器

宝21SX022茶褐土



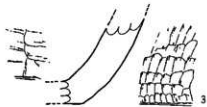
宝21SX022黒灰土



宝21SX022灰褐色土



宝21SX022表土



0 10cm



第39图 21SX022出土遺物実測図 (1/3)

すり鉢(2) 復元口径21.5cm、器高4.0+cmを測る。口縁部内外のみに光沢のある淡茶褐色の釉をかけ、端部をふき取っている。表面は暗茶褐色で芯は淡紅色を呈す。6本一組の掬目がある。鉢II-1a類。

#### 石製品

鍋(3) 底部～体部にかけてで、器高6.8+を測る。外面はススが付着し黒灰色を、内面は淡灰褐色を呈す。石材は滑石。

21SX022黄灰土(第40図、Pl.124)

#### 土師器

小皿a(1～25) 1～4は口縁が長く延びる。5～8は内底外側が凹む。9～22は口縁が短く延びる。23～25は口縁が外反する。24は須恵質である。いずれも底部は糸切りや板状圧痕及び内底のナデが確認される。

坏a(26～30) 26～29は磨耗により調整は不明。30は須恵質で、器高1.3+cm、復元底径9.1cmを測る。底部は糸切りで板状圧痕があり、シミ状の墨跡がある。

坏b(31) 底部のみで、器高1.1+cm、復元底径6.2cmを測る。底部は糸切りで、内底はナデが確認される。

坏c(32) 高台部のみで、器高1.7+cm、復元底径6.9cmを測る。内底はナデが確認される。

#### 瓦質土器

小皿c(33) 口縁～体部のみで、復元口径8.0cm、器高1.7+cmを測る。胎土は0.5mmの砂粒を少し含み、焼成は良い。調整はヨコナデ。

#### 同安窯系青磁

碗(34) 高台～体部下半のみで、器高2.8+cm、底径4.8cmを測る。外面にタテ方向の片彫り風ケズリを施す。釉は緑味を帯びた白灰色の透明釉で、光沢・貫入あり。口縁部欠損のため詳細分類は不明。

#### 中国褐釉陶器

坏(35) 口縁部のみで、復元口径9.0cm、器高2.3+cmを測る。胎土は0.5mmの砂粒を僅かに含む。暗茶褐色を呈し、焼成は良好で堅緻。

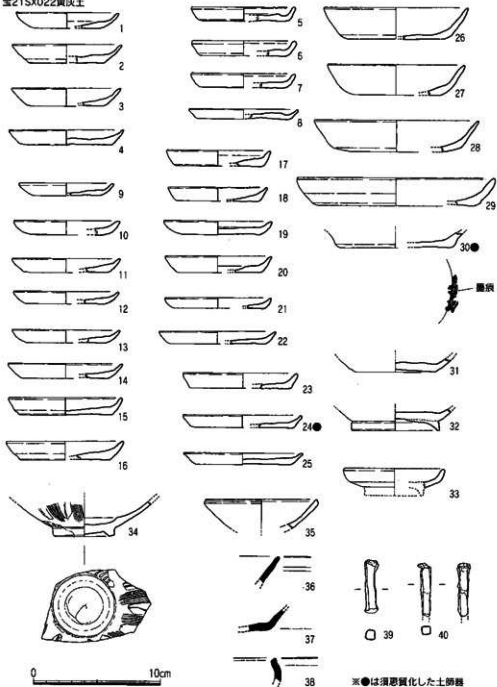
#### 須恵器

坏(36) 口縁小片で、器高2.2+cmを測る。調整はヨコナデ、還元は良好。

坏a(37) 底部のみで、器高1.8+cmを測る。底部は回転ヘラキリ、還元は良好。

鉢a(38) 口縁のみで、器高2.0+cmを測る。調整はヨコナデ、還元は良好。口縁端部は揃んで屈曲する。

宝21SX022黄灰土



第40図 21SX022出土遺物実測図 (1/3)

### 金属製品

釘 (39・40) どちらも鉄製。39は現存長4.2cmを測る。両端とも欠損の様。40は有頭で、頭部はL字形に折り曲げられていて、先端は欠損する。断面は方形を呈す。

1トレンチ橙色土 (第41図、Pl.134)

### 土師器

小皿a (1) 底部は糸切りで、内底はナデが確認され、内底外側が凹む。

小皿c (2) 断面略台形の高台を貼り付ける。内底はナデが確認される。

### 石製品

鍋片 (3) 縦4.1cm、横5.0cm、巾1.8cmを測る。ススが付着する。石材は滑石。

3トレンチ黄灰土 (第41図、Pl.134)

### 土師器

小皿a (1・2) どちらも口縁が短く延び、1は磨耗のため調整は不明。2は底部は糸切りで板状圧痕がある。

小皿c (3) 高台のみで、底部の調整は回転ヘラケズリ。内底は磨耗により調整は不明。

坏a (4~7) 全て底部は糸切りで7以外板状圧痕がある。6は内底のナデが確認され、また中央部が多少還元気味である。

### 須恵器

鉢a3 (8) 口縁部~体部上半が残存し、復元口径20.0cm、復元器高9.4cm、復元底径8.3cmを測る。胎土は1mm程度の砂粒を多く含む。還元は良好。

### 金属製品

釘 (9) 鉄製。3~4本の塊のようで、メインの釘の残存長は5.1cmで断面は方形を呈す。腐食により一部剝離しかけている。

3トレンチ灰褐色土 (第41図、Pl.136)

### 土師器

小皿a (1~4) 2は口縁が多少長く延び、その他は短く延びる。底部は全て糸切りで、2・4は板状圧痕がある。

### 石製品

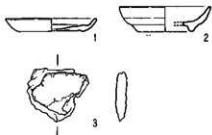
鍋 (5) 縦4.0cm、横7.5cm、巾1.5cmを測る。石鍋の底部でのみ痕が残る。外面はススが付着。石材は滑石。

### 須恵器

蓋3 (6・7) 6は口縁から約1/3残存し、器高1.3+cmで天井部はナデ。7は口縁部小片



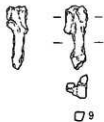
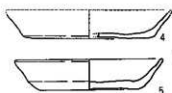
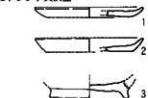
1トレンチ褐色土



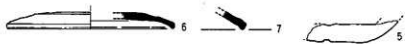
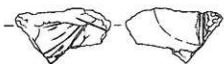
3トレンチ表土



3トレンチ黄灰土



3トレンチ灰褐色土



第41図 1・3トレンチ出土遺物実測図 (1/3)

のため傾きを測るのに難があるが、器高1.4+cmと背が高い。どちらも還元は良好。

坏a(8) 底部は回転ヘラキリで、板状圧痕がある。還元は良好。

坏a×坏c(9) 口縁～体部にかけてのみで、淡灰色を呈し多少焼きがamai。還元は良。

鉢a(10) 口縁～体部にかけてのみで、復元口径18.8cm、器高4.9+cmを測る。還元は良好。

皿a(11) 復元口径17.5cm、器高1.8cm、復元底径14.5cmを測る。底部はヘラキリ後、板状圧痕及び内底のナデが確認される。還元は良好。

#### 3トレンチ表土(第41図、Pl.134)

##### 須恵器

坏(1) 口縁部小片のみで、器高2.8+cmを測る。焼成・還元ともに良好。

鉢a3(3) 底部のみ残存。還元は良好。3トレンチ黄灰土(8)と同一個体か。

##### 石製品

鍋(2) ツバの部分のみで、器高6.5+cmを測る。外面にスガが付着する。石材は滑石。

#### 4トレンチ黄灰土(第42図、Pl.139)

##### 土師器

小皿a(1~6) 1・2・5は口縁が短く延び、3は口縁が長く延びる。4・6は内面外側が凹む。底部は全て糸切りで、板状圧痕の残るものや内底のナデの確認できるものもある。

坏a(7~10) いずれも胎土に金雲母を多く含む。10は須恵質。底部は全て糸切りで、9以外板状圧痕が残る。内底のナデの確認できるものもある。

##### 陶器

鉢(11) 口縁部～体部にかけてのみで、復元口径16.0cm、器高4.5+cmを測る。素地は明赤茶灰色で、全面に光沢のある暗茶褐色の釉が施され、口縁端部は釉がハゲている。中国産か。

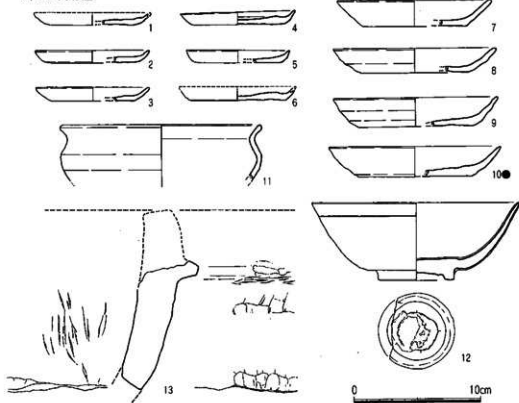
##### 龍泉窯系青磁

碗(12) 高台3/4～口縁1/6までで、素地は明灰色でキメ細かい。緑灰色の透明釉を全体に施釉する。高台の内側には焼き台の剝離痕跡がある。碗I-1a類

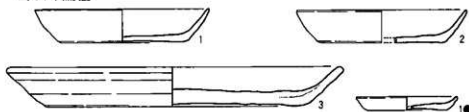
##### 石製品

鍋(13) ツバの部分から下部で、器高10.2+cmを測る。全体的に研磨され胴部割れ口が二次加工により平坦化する。石材は滑石。

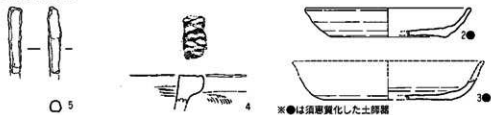
4トレンチ黄灰土



4トレンチ黒灰土



5トレンチ黄灰土



※●は須恵質化した土器

図42 4・5トレンチ出土遺物実測図 (1/3)

#### 4トレンチ黒灰土（第41図、Pla.143）

##### 土師器

坏a（1・2） どちらも胎土は金雲母が多い。底部は糸切りで、板状圧痕が残る。内底のナデも確認できる。

盤（3） 復元口径26.5cm、器高3.1cm、復元底径20.0cmを測る。胎土中に不整合面があり、粘土の継目の可能性がある。明橙色を呈し、底部は糸切りで、板状圧痕が残る。内底のナデも確認できる。

#### 5トレンチ黄灰土（第41図、Pla.145）

##### 土師器

小皿a（1） 口縁が短く延び須恵質。底部は糸切りで、板状圧痕が残る。内底のナデも確認できる。

坏a（2・3） どちらも須恵質。、底部は糸切りで、2は板状圧痕が残る。内底のナデも確認できる。

##### 土師質土器

鍋（4） 口縁部のみで器高は2.2+cmを測り、上面に縄目痕がある。焼成は良く淡茶褐色を呈す。体部外面には縦ハケ目が内面には横ハケ目が確認できる。

##### 金属製品

釘（5） 鉄製。現存長5.2cmを測り、断面は略方形を呈す。有頭ともとらえられるが腐食により明確でない。下部も明確でなく欠損か。

表6 宝21出土遺物一覧表1

東山中墓所表探		同安窯系青磁	皿：(1)
		白磁	碗：IX(1)
須恵器	壺片		その他：煮×(1)
白磁	碗：V×(1)	国産陶器	碗(1)近代×、龜山産壺(1)
北門付近表探		中国陶器	東播鉢×(1)
			壺：褐釉(1)
			壺：褐釉×(2)
土師器	破片		その他：黄釉盤(1)
龍泉窯系青磁	碗：I(1)、II-b(1)	石製品	滑石片(1)、石鍋片(2)
		金属製品	釘(1)
表土			
1・2トレンチ橙色土			
須恵器	壺(1)		
土師器	風炉×(2)、坏b×(1)	土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)
龍泉窯系青磁	碗：I×(1)、II(1)、I(2)	龍泉窯系青磁	碗：I(4)、IIb(1)
同安窯系青磁	皿：(1)		皿：小皿(1)
白磁	碗：VII×(1)	白磁	碗：(1)
	その他：坏IX(2)	石製品	石鍋(1)
瓦質土器	壺×(1)		
国産陶器	須恵質壺(1)	3トレンチ表土	
中国陶器	壺：褐釉(1)		
	鉢：褐釉こね鉢(1)	須恵器	壺4(1)、坏(1)
	壺：無釉×(1)	土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)
石製品	軽石(1)、チャート(1)	龍泉窯系青磁	碗：II(3)、I(2)
			皿：(1)
D16トレンチ黄灰土		白磁	碗：片(1)
		国産陶器	東播こね鉢(3)
土師器	小皿(イト)、坏a(イト)	中国陶器	壺：無釉(2)
白磁	その他：坏IX(1)	石製品	石鍋II(1)
中国陶器	壺：褐釉(1)		
3トレンチ黄灰土			
Iトレンチ表土			
		須恵器	鉢
須恵器	坏a	土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)、皿c
土師器	坏a、小皿a、碗(1)近世～		風炉×
龍泉窯系青磁	碗：I(4)	龍泉窯系青磁	碗：IIa(1)、I(1)
肥前系陶磁器	碗：(2)	白磁	その他：合子(1)
国産陶器	近世碗×(2)	中国陶器	壺：褐釉(1)
青白磁	破片(1)		鉢：黄釉(1)
中国陶器	壺：褐釉(3)		壺：無釉×(1)
	鉢：無釉こね鉢(1)		その他：黄釉盤(2)
		土製品	焼土塊(1)
1トレンチ橙色土		金属製品	釘(1) 3～4本の塊か
土師器	風炉(1)、皿c(1)		
龍泉窯系青磁	碗：II(3)、I(4)、I×(4)		
	皿：(1)		
同安窯系青磁	碗：(2)		

表7 宝21出土遺物一覧表2

3トレンチ灰褐色土			甕：無軸(4)
		石製品	滑石鍋(1)
須恵器	坏a、坏(2)、皿a、皿×(1)		
	壺(3)、鉢(1)、甕(1)	5トレンチ表土	
土師器	坏a、小皿a(イト)、鉢(1)		
龍泉窯系青磁	碗：Ⅱb(1)、I(1)	須恵器	坏
白磁	皿：(1)	土師器	坏a、大坏、小皿a
瓦質土器	碗(1)	龍泉窯系青磁	碗：Ⅱ(1)、Ⅱ-a(2)、Ⅲ×(1)
中国陶器	壺：褐釉(3)		I(2)
	その他：天目碗(1)	白磁	皿：(1)
金属製品	鉄塊(1)		その他：坏IX
石製品	滑石鍋(1)	瓦質土器	鉢(1)
		国産陶器	東播系鉢(1)
		中国陶器	壺：褐釉(3)
			その他：黄釉盤(1)
4トレンチ黄灰土			
土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)、皿c 大坏(イト)	石製品	石鍋(2)
龍泉窯系青磁	碗：I-1a(1)、Ⅱ-b(6)、 Ⅱ-a(3)、I(2)、片(1)	5トレンチ灰色土	
	皿：(1)	土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)
同安窯系青磁	皿：(1)	龍泉窯系青磁	碗：I(1)、Ⅱ-b(1)
白磁	碗：V×(1)、破片(2)		皿：片(1)
	その他：坏IX(2)	白磁	碗：VIII(1)
国産陶器	無軸鉢(1)、東播系鉢(1)		その他：坏IX(1)
中国陶器	壺：褐釉(12) (13c後半以降) 無軸(4)	瓦質土器	破片(1)
	鉢：褐釉(2)、無軸こね鉢(1)	中国陶器	壺：無軸(1)
	甕：無軸×(7)		鉢：無軸(2)、褐釉×(1)
	その他：黄釉盤(9)		その他：黄釉盤(1)
石製品	滑石鍋(2)	5トレンチ黄灰土	
土製品	焼土塊(3)		
		土師器	坏a(イト)、大坏(イト)、甕 小皿a(イト)、鍋(1)
4トレンチ灰褐色土		瓦器	破片(1)
須恵器	坏a、壺3	土師質土器	鍋(1)
土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)	龍泉窯系青磁	碗：K(3)、Ⅱ(1)、Ⅱ-a(4) Ⅱ-b(5)、片(6)
	鉢×(1)、甕(1)、破片	同安窯系青磁	皿：(1)
白磁	碗：VII(1)	白磁	碗：(1)
中国陶器	壺：無軸(3)		その他：坏IX(2)、壺×(1)
		中国陶器	壺：(1)、褐釉(6)
4トレンチ表土			鉢：褐釉(2)、褐釉すり鉢(1)
土師器	坏a(イト)、小皿a		その他：黄釉盤(3)、無軸片(1)
龍泉窯系青磁	碗：I×(2)	石製品	石鍋(2)
	皿：(2)	金属製品	鉄(2)
白磁	その他：合子(1)、坏IX(1)	土製品	焼土塊(10)
中国陶器	壺：褐釉(1)		
	鉢：褐釉(5)、無軸(1)		

表8 宝21出土遺物一覧表3

<b>5トレンチ橙色土</b>		<b>S-1灰色土</b>	
土師器	坏b(イト)、小皿a(イト)		
龍泉窯系青磁	碗：I(2)	土師器	坏a、坏c、小皿a(イト)
石製品	砥石(1)		小皿b(イト)
<b>8トレンチ表土</b>		<b>S-1茶灰土</b>	
須恵器	坏×	須恵器	破片
土師器	坏a、小皿a(イト)	土師器	坏a(イト)、大坏c×、鍋× 小皿a(イト)
<b>S-1表土</b>		白磁	碗：IV(1) その他：坏IX(1)
土師器	坏a(イト)、大坏、皿c(1) 小皿a(イト)、小皿b(イト) 小皿c、甕×(1)	瓦類	人形(1)
龍泉窯系青磁	碗：II(2)、II-b(3)	石製品	滑石片、石鍋(1)
白磁	碗：IV(1) 皿：(1)	<b>S-2黒色土</b>	
瓦質土器	鍋(1)	土師器	坏a(イト)、坏b×(1)
中国陶器	甕：無軸甕×(1) その他：貴粘盤(1)	<b>S-2茶灰土</b>	
石製品	石鍋II(1)、滑石鍋(1)	土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)
金属製品	釘(1)	<b>S-2黄褐色土</b>	
土製品	焼土塊(2)、人形×(1)	須恵器	坏a(2)
<b>S-1</b>		<b>S-2黄色土</b>	
土師器	碗c(1)、大坏(イト)、皿c	須恵器	甕3、破片
龍泉窯系青磁	碗：II(2)	土師器	坏a(イト)、大坏、小皿a(イト)
白磁	その他：坏IX(1)		風炉
国産陶器	備前甕×	龍泉窯系青磁	碗：I(1)、II-b×(1) 皿：(1)
土製品	不明品(1)	石製品	緑色片岩、円礫
石製品	板状製品(1)	金属製品	鉄滓(1)、釘(1)
<b>S-1黄灰土</b>			
土師器	坏a(イト)、坏b(イト)、大坏、 皿c(1)、小皿a(イト)、鉢(2)		
龍泉窯系青磁	碗：I(1)、II-a(1)、II-b(2)		
白磁	碗：(1) その他：坏IX(5)		
瓦質土器	火鉢(1)、鉢(1)		
中国陶器	壺×水注：褐釉(9)、無釉(1) 鉢：無釉(1)、こね鉢		
石製品	砥石(1)、石鍋		
金属製品	釘(3)		
土製品	焼土塊(2)		

表9 宝21出土遺物一覧表4

<b>S-2黄灰土</b>	(近世～)	<b>S-3黄灰土</b>	
土師器	坏a(イト)、小皿b×、大坏(1)	須恵器	坏a(1)
龍泉窯系青磁	碗：I(2)、II-b(2)	土師器	坏a、小皿a(イト)
	皿：(2)	同安窯系青磁	皿：(2)
同安窯系青磁	碗：(1)	白磁	碗：(2)
白磁	碗：V×VII(1)、IV(1)		
	その他：坏IX(1)	<b>S-3茶色土</b>	
瓦質土器	風炉、鉢×(4)	須恵器	坏a
肥前系陶磁器	皿×(2)	土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)、風炉
国産陶器	褐釉皿(近世～)(1)	白磁	碗：VIII-3(1)
	亀山産甕(2)	石製品	石鍋片
中国陶器	壺：褐釉(1)、盃×水注A-2(1)		
石製品	赤間硯×(1)	<b>S-3茶黒色土</b>	
金属製品	銅滓		
土製品	鈴	土師器	坏a×
<b>S-2表土</b>	(近世～)	龍泉窯系青磁	碗：II-b(1)
須恵器	坏(1)、皿×(1)	<b>S-4黄灰土</b>	
土師器	坏a(イト)、蓆×、小皿a、破片	須恵器	坏片(1)
龍泉窯系青磁	碗：I(2)、II-a(2)、II-b(2)、(1)	土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)、破片
	皿：(1)	龍泉窯系青磁	碗：片(1)
白磁	碗：(1)	同安窯系青磁	碗：(1)、片(1)
	皿：(1)	白磁	碗：V×(1)
瓦質	鉢×(1)、破片(1)	金属製品	釘(2)
肥前系陶磁器	碗、小坏(1)	石製品	砥石(1)
国産陶器	東播系鉢(1)		
中国陶器	壺：褐釉(3)		
	鉢：黄油(1)	<b>S-4表土</b>	
石製品	赤間硯(1)、滑石鍋(2)	須恵器	坏a
土製品	鈴×(1)	土師器	坏a(イト)、坏c、碗c
			大坏(イト)
<b>S-3表土</b>		龍泉窯系青磁	碗：I(2)
土師器	風炉(2)	同安窯系青磁	碗：(1)
龍泉窯系青磁	碗：I(2)、II-a(2)	瓦類	丸瓦(格子印)
	皿：(1)	石製品	基子(1)
	その他：坏III-5b(1)		
同安窯系青磁	碗：(1)	<b>S-4</b>	
	皿：(2)		
青白磁	皿×(1)	須恵器	坏a
染付	明染碗(1)	土師器	坏a
中国陶器	壺：褐釉(13)	龍泉窯系青磁	碗：I(1)
	壺：褐釉壺×(5)	同安窯系青磁	碗：(1)
瓦類	平瓦×(1)		
石製品	滑石鍋(1)		



表10 宝21出土遺物一覧表5

<b>S-5茶灰土</b>		<b>S-7黄灰土</b>	
土師器	破片	須恵器	坏a
龍泉窯系青磁	碗：Ⅱ-b(1)	土師器	坏a、小皿a、碗c、破片
<b>S-6表土</b>		龍泉窯系青磁	碗：片(1)、Ⅱ(3)、Ⅰ(1)
			Ⅲ：(1)、小皿×(1)
		同安窯系青磁	碗：(2)
須恵器	鉢、皿×	白磁	Ⅲ：小皿、玉縁(1)
土師器	坏a、小皿a(イト)		その他：坏IX(1)
龍泉窯系青磁	碗：Ⅱ-a(1)、Ⅱ(4)、Ⅰ(2)	中国陶器	鉢：無釉すり鉢I-1a(1)
	Ⅲ：(1)		無釉こね鉢(3)
同安窯系青磁	碗：(1)	石製品	滑石鍋(1)
白磁	碗：V(1)	<b>S-7暗灰土</b>	
肥前系陶磁器	碗(1)	須恵器	坏a
中国陶器	壺：褐釉(4)	土師器	坏a(イト)
	その他：黄釉盤(3)、無釉(1)	中国陶器	鉢：無釉こね鉢I-1a(1)
石製品	滑石鍋(3)		
土製品	焼土塊		
<b>S-6黄灰土</b>		<b>S-7</b>	
土師器	坏a、皿c、小皿a(イト)、碗c	土師器	坏a(イト)
	鉢、筋×		
瓦器	碗×(1)	<b>S-8表土</b>	
龍泉窯系青磁	碗：Ⅱ-b(1)	須恵器	坏c3
	Ⅰ(5)うちⅠ内底花文印有	土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)、破片
	Ⅲ：(3)	中国陶器	壺：褐釉(2)
同安窯系青磁	碗：(1)	石製品	磁石(1)
白磁	碗：(2)		
	その他：坏IX(2)	<b>S-8橙色土</b>	
緑釉陶器	壺×(1)	土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)
中国陶器	壺：褐釉(1)、無釉(1)、壺把手	瓦質土器	鉢×
	その他：黄釉盤(7)		
土製品	焼土塊(2)		
<b>S-7表土</b>		<b>S-8灰色土</b>	
須恵器	坏a、坏(3)、破片	土師器	坏a
土師器	坏a(イト)、大坏、皿c、鉢c	龍泉窯系青磁	碗：片(1)、Ⅰ(1)
	鉢(1)、風炉(1)	白磁	碗：V×(2)
龍泉窯系青磁	碗：Ⅱ-b(2)、Ⅱ(1)、Ⅰ(7)	<b>S-8黒色土</b>	
白磁	その他：合子(2)	土師器	坏a(イト)、大坏
国産陶器	東播鉢		
中国陶器	壺：褐釉(2)		
	壺：無釉(2)		
石製品	石鍋片(3)、滑石片(1)、OB-f		

表11 宝21出土遺物一覧表6

S-8黄灰土		中国陶器	甕：(1)
		石製品	滑石鍋(1)
土師器	坏a(イト)	土製品	坩土塊(1)
龍泉窯系青磁	皿：(1)		
		S-14表土	
S-9		須恵器	鉢
土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)、大坏	土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)
		鉢	トリベ×
龍泉窯系青磁	碗：Ⅱ-b(2)		
		S-17	
S-10灰黄土		土師器	坏a(イト)
須恵器	破片		
土師器	坏a(イト)	S-18	
S-11灰褐土		土師器	坏a(イト)
土師器	坏a(イト)、坏b×(1)、小皿a	S-21	
	小皿a(イト)、鍋×		
龍泉窯系青磁	碗：Ⅱ(1)	土師器	坏a(イト×)
同安窯系青磁	碗：(1)		
白磁	碗：片(1)	S-21黒灰土	
中国陶器	甕：褐釉甕(3)		
	その他：天目碗(1)	土師器	皿c
S-11黄灰土		S-22南区灰褐土	
土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)	土師器	坏a、小皿a、碗c
瓦質土器	鉢×	白磁	皿：Ⅳ(1)
		瓦質土器	鍋(1)
S-11	(近世～)	金属製品	釘(1)
土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)	S-22黄灰土	
龍泉窯系青磁	碗：Ⅱ(2)、Ⅱ-b(1)		
	皿：(1)	須恵器	坏、坏a、蓋、長頸壺(1)
瓦質土器	すり鉢(1)	土師器	坏a(イト)、坏a、坏c、大坏c
肥前系陶磁器	染付碗(1)		大坏×(イト)、皿a(イト)、碗c
国産陶器	唐津刷毛手皿(2)、黒釉壺(1)	龍泉窯系青磁	碗：Ⅱ(2)、Ⅱ-a(2)、Ⅱ-b(5)
中国陶器	壺：褐釉(2)		皿：(2)
		同安窯系青磁	碗：Ⅱ(2)
S-12黄灰土		白磁	皿：(1)
			その他：(1)、坏IX(1)
須恵器	破片	国産陶器	東播鉢(1)
土師器	坏a(イト)、破片	中国陶器	壺：褐釉(4)
龍泉窯系青磁	碗：Ⅱ(1)		鉢：褐釉すり鉢(1)
同安窯系青磁	碗：(1)		その他：天目碗(1)、黄釉盤(2)
	皿：(1)		褐釉小皿(1)

表12 宝21出土遺物一覧表7

須恵質土器	朝鮮系無釉陶器×	S-22南区黄灰土	
石製品	滑石鍋(1)、磁石(1)		
金属製品	釘(1)	須恵器	坏a×
土製品	焼土塊(6)	土師器	坏a(イト)、碗c
		同安楽系青磁	碗
S-22表土		白磁	碗：(1)
		瓦質土器	鉢×
須恵器	坏a(2)、破片	土製品	焼土塊
土師器	坏a(イト)、坏c、大坏、大坏c (1)、碗c、小皿a(イト)、皿c		
	脚付鉢、甕×(1)、鍋(1) 風炉×(1)、破片	S-22茶褐土	
龍泉窯系青磁	碗：I(19)、II-a(1)、II-b(8) II(7) 皿：(7)	土師器	坏a(イト)、小皿a(イト) 大坏(2)
	その他：破片(2)	龍泉窯系青磁	碗：I(1)、II-b(2)、II(1)
同安楽系青磁	碗：I(1)、(6)	同安楽系青磁	碗：(1)
	皿：(1)	白磁	碗：VII-b(1)
白磁	碗：VIII(1)、VII(1)、(4) 皿：(2)	中国陶器	壺：III系(1)
	その他：坏IX(2)、破片(1)	土製品	壺：褐釉(2)、(1) 焼土塊(2)
瓦質土器	破片(1)	S-22黒灰土	
国産陶器	東播鉢(5)、亀山産甕(1)	土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)
中国陶器	壺：褐釉×(15)、無釉(1) 鉢：褐釉こね鉢(1)、すり鉢(1) 無釉こね鉢(5)	瓦器	大坏(2)、碗c、破片 碗(1)
	甕：褐釉(1)	龍泉窯系青磁	碗：I(1)、II-a(1)、II-b(2)
	その他：黄釉盤(6)	白磁	皿：玉縁(1)
石製品	滑石鍋(2)、磁石(1)	中国陶器	壺：褐釉(1)
			鉢：無釉(1)
S-22北区黄灰土			その他：黄釉盤(1)
		金属製品	釘(1)、釵淨(1)
土師器	坏(イト)、皿c(1)、皿(イト) 鉢(1)	S-22南区	
龍泉窯系青磁	碗：I(2)、II-a(2)、II-b(7) 皿：(1)	須恵器	長頸壺(1)
同安楽系青磁	碗：破片(1)	土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)、碗c
白磁	碗：(1)	龍泉窯系青磁	碗：II-b(1)、片(2)
	その他：坏IX(1)	中国陶器	壺：褐釉(3)
瓦質土器	小皿(1)		鉢：無釉(1)、無釉すり鉢(1)
中国陶器	壺：褐釉(2) 甕：無釉大甕(1)	李朝	象嵌(1)
金属製品	釘(1)	S-23	
土製品	焼土塊(2)	土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)
		S-26	
		土師器	坏a(イト)

表13 宝21出土遺物一覧表8

<b>S-27</b>		<b>S-31黄灰土</b>	
土師器	小皿a(イト)、大坏	土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)、皿c
土製品	中子(1)	中国陶器	鉢：無輪鉢×(1)
<b>S-28</b>		<b>S-31黒灰土</b>	
土師器	坏a	土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)、大坏
中国陶器	寛：褐釉×(1)	土製品	焼土塊
土製品	焼土塊(1)		
		<b>Z (ラベル不明)</b>	
<b>S-29</b>			
土師器	小皿	土師器	小皿a
中国陶器	壺：(1)		

表14 宝21出土遺物計測表1

遺 物	No	種 類	国産番号	写真番号	寸 法	高 さ	底 径	備 考
					口 径 cm	高 さ cm	底 径 cm	(注)は女性、●は復原品
21SX001 灰褐色土 (5-1)	1	陶器 甕	34	098 001	-	2.1*	-	櫛毛字向線画、磨滅否?
*	2	土師 小皿a	34	098 001	8.0*	0.9	8.0	イト、板、内
*	3	土師 埴a	34	098 001	12.7*	2.3	8.3*	・
*	4	土師 埴a	34	098 001	12.5*	2.2	8.3*	イト、板
21SX001 黄灰土 (5-1)黄灰土①	1	土師 小皿a	35	100 000	7.9*	1.2	5.8*	イト、板
*	2	土師 小皿a	35	100 001	9.0*	1.6	5.9*	イト
*	3	土師 小皿a	35	100 001	7.6*	1.9*	4.5*	イト、板、内
*	4	土師 埴a	35	100 004	-	1.5*	8.0	イト、板
*	5	土師 埴a	35	100 003	11.2*	2.1	7.5*	イト
*	6	石製品 漆	35	100 001	20.0*	6.0*	-	森田C特
*	7	土師品 漆の一部	35	100 007	6.5	3.5	6.0	21SX001黄土 (3) と同一遺体?
21SX001 黄灰土 (5-1)黄灰土①	1	土師 小皿a	35	102 003	-	1.2*	6.8	イト、内
*	2	土師 小皿c	35	102 004	-	1.5*	7.0*	・
*	3	土師 埴a	35	102 002	-	0.8*	9.4*	イト
*	4	土師 埴a	35	102 001	12.6*	2.5	8.3*	イト、板、内
*	5	瓦製品 漆	35	102 002	-	5.5*	-	・
*	6	骨製 網目a類	35	102 006	16.2*	4.5*	-	堀家須賀骨製
*	7	白磁 埴IX-a類	35	102 001	10.0	1.8	7.3	・
*	8	青磁 埴I-a類	35	102 005	9.6	2.0	4.8	阿波須賀骨製
*	9	陶器 埴IX-b類	35	102 007	36.0*	3.0*	-	中国陶器
*	10	金属製品 釘	35	102 009	5.1	0.8	0.7	鉄製
*	11	金属製品 釘	35	102 010	4.0	0.5	0.7	鉄製、先端部
21SX001 (5-1)①	1	土師 小皿a	36	104 001	8.0*	2.0	6.3*	・
*	2	土師 皿c	36	104 002	-	1.6*	5.6	内
*	3	土師 大皿a	36	104 003	27.2*	2.5	21.0*	イト、板、内
*	4	青磁 網目c類	36	104 004	-	2.7*	5.1	瀬原赤茶骨製
*	5	白磁 埴IX-b類	36	104 005	10.5*	1.9	6.0*	・
*	6	石製品 板状石製品	35	103 001	12.7	14.4	3.4	以谷石?
21SX001 黄土 (5-1)黄土①	1	白磁 埴IV-a類	36	105 001	-	2.1*	7.5	・
*	2	石製品 漆	36	105 003	-	3.5*	-	滑石
*	3	土師品 漆の一部	36	105 002	5.0	4.2	1.2	21SX001黄灰土 (7) と同一遺体?
21SX002 黄褐色土 (5-2)黄褐色土①	1	土師 小皿a	36	107 001	8.8*	1.4	7.2	イト、板、内
*	2	土師 小皿a	36	107 001	8.6*	1.2	7.2	イト、板
*	3	土師 大皿	36	107 003	-	3.1*	-	・
*	4	漆 漆	36	107 001	-	1.1*	-	・
*	5	土師貨 風炉	36	107 003	-	2.9*	-	大塚B-3類 (山村1997)
*	6	漆製製品 釘	36	107 104	2.6*	0.6	0.5	鉄製
21SX002 黄灰土 (5-2)黄灰土①	1	土師 小皿c	36	107 001	9.7*	1.7*	-	・
*	2	土師品 土師	36	107 002	3.7	2.8	0.3	土師貨
21SX002 黄灰土 (5-2)黄灰土①	1	土師 埴a	36	107 002	-	1.3*	7.9*	・
21SX002 (5-2)	2	埴 埴a×埴c	36	107 001	13.4*	3.3*	-	・
21SX003 赤色土 (5-3)赤色土①	1	土師 埴a	36	106 001	12.6*	2.7	8.0	イト、板
*	2	土師品 小皿a	37	110 001	8.7	1.1	6.9	イト、板、内
*	3	土師貨 風炉	37	110 001	-	2.8*	-	・
21SX003 赤色土 (5-3)赤色土①	1	白磁 埴VII-3類	37	110 001	16.8*	6.6	7.0	・
21SX003 黄灰土 (5-3)黄灰土①	1	土師 小皿a	37	110 001	8.6*	1.2	6.2*	イト、板、内
21SX003 黄土 (5-3)黄土①	1	青磁 埴IX-b	37	110 001	12.3*	4.3	7.1*	・
21SX004 赤褐色土 (5-4)赤褐色土①	1	石製品 磁石	37	110 004	7.0	3.4	2.5	砂岩
*	2	金属製品 釘	37	110 002	2.1	0.5	0.6	鉄製
*	3	金属製品 釘	37	110 001	2.7	0.7	0.4	鉄製
*	4	金属製品 釘	37	110 003	6.8	0.8	0.8	鉄製
21SX004 黄土 (5-4)黄土①	1	石製品 磁石	37	110 001	9.5	7.8	4.3	花崗岩
21SX004 黄灰土 (5-4)黄灰土①	1	土師 小皿a	37	113 010	7.8*	1.1	5.3*	・
*	2	土師 小皿a	37	113 001	7.6*	0.9	5.7*	イト、板
*	3	土師 小皿a	37	113 005	7.8*	0.9	4.6*	イト、内
*	4	土師 小皿c	37	113 002	7.8*	1.6	6.7*	・
*	5	土師 小皿a	37	113 011	8.6*	1.0	6.8*	イト、板、瓦質
*	6	土師 小皿a	37	113 003	8.6*	1.05	7.5*	イト、内
*	7	土師 小皿a	37	113 006	8.8*	1.0	7.0*	イト、板、内
*	8	土師 埴a	37	113 004	-	2.2*	8.5*	イト、内、須賀骨
*	9	土師 埴a	37	113 001	11.2*	2.2	8.0*	イト
*	10	土師 埴a	37	113 008	11.4*	3.3	8.0*	イト、板、内、須賀骨
*	11	土師 埴a	37	113 007	11.8*	2.1	7.8*	イト、板、内
21SX007 (5-7)	1	石製品 ob-f	37	114 001	2.7	3.1	0.8	崗石・フレーク
21SX009 (5-9)	1	瓦製品 漆	37	114 001	25.3*	7.0*	-	・
21SX012 黄灰土 (5-12)黄灰土①	1	石製品 石製	38	114 001	4.3	7.0	1.5	滑石

※備考中「イト」は糸印、「板」は板状注釈あり、「内」は内底ナデの存在を示す。

表15 宝21出土遺物計測表2

遺物	No.	品名	図面番号	写真番号	実番号	口径 mm	高さ cm	底径 cm	備考 (●は欠片、●は復原品)
21SX017黄灰土 (S-12黄灰土)	2	土製品 襷子丸	38	114	002	2.7	2.8	1.1	土師製
* (S-12黄灰土)	3	金属製品 銅製品	38	114	003	3.8	3.6	0.1	銅製
21SX018黄灰土 (S-31黄灰土)	1	土師 小皿a	38	116	002	6.9	1.0	7.3	イト、灰、内
* (S-31黄灰土)	2	土師 小皿a	38	116	004	9.6	1.0	8.0	イト、灰、内
* (S-31黄灰土)	3	土師 小皿a	38	116	005	9.2	1.1	7.6	イト、灰、内
* (S-31黄灰土)	4	土師 小皿a	38	116	003	10.0	1.1	6.5	イト、灰、内
* (S-31黄灰土)	5	土師 埴a	38	116	007	13.6	1.8	-	-
* (S-31黄灰土)	6	土師 埴a	38	116	001	13.2	2.2	8.9	イト、灰、内
* (S-31黄灰土)	7	土師 埴a	38	116	009	11.0	2.9	8.2	イト、灰、内、湯痕あり
* (S-31黄灰土)	8	土師 埴c	38	116	006	-	1.5	-	内
* (S-31黄灰土)	9	石製品 犬平土	38	116	008	1.8	1.6	0.4	泥質?
21SX019黄灰土 (S-31黄灰土①)	1	土師 小皿a	38	117	001	9.7	1.2	7.5	イト、灰、内
* (S-31黄灰土②)	2	土師 埴a	38	117	001	13.4	2.5	9.3	イト、灰、内
* (S-31黄灰土③)	3	土師 埴a	38	117	001	13.0	2.2	8.8	イト、内
* (S-31黄灰土④)	4	土師 埴a	38	117	001	14.0	2.1	9.3	イト、灰、内
* (S-31黄灰土⑤)	5	瓦葺 大皿	38	117	001	25.0	2.8	19.3	イト、内
* (S-31黄灰土)		土師 埴a		001	11.0	2.1	7.5	イト、灰、内(未復原)	
* (S-31黄灰土)		土師 埴a		002	12.5	2.9	7.9	イト、灰、内(未復原)	
* (S-31黄灰土)		土師 小皿a		003	8.0	1.4	4.5	イト、内(未復原)	
* (S-31黄灰土)		土師 小皿a		004	8.1	1.1	6.4	イト、灰、内(未復原)	
* (S-31黄灰土)		土師 小皿a		005	7.6	1.1	6.4	イト、内(未復原)	
* (S-31黄灰土)		土師 埴a		006	11.9	1.8	8.1	灰、内(未復原)	
21SX022黄灰土 (S-22黄灰土)	1	土師 小皿a	39	119	001	8.9	1.1	7.2	イト、内
* (S-22黄灰土)	2	土師 小皿a	39	119	002	8.3	1.3	6.1	イト
* (S-22黄灰土)	3	土師 埴a	39	119	003	11.8	2.5	7.6	イト
* (S-22黄灰土①)	4	切磁 瓶1c(破)	39	119	001	-	3.9	5.8	河濱遺風のスタンプ・東京御酒曹製
* (S-22黄灰土)	5	切磁 瓶1b(破)	39	119	004	-	2.3	6.2	東京御酒曹製
* (S-22黄灰土②)	6	切磁 香高瓶	39	119	001	-	7.0	6.9	陶質定寸
21SX022黄灰土 (S-22黄灰土)	1	土師 小皿a	39	122	002	8.6	1.0	6.2	イト
* (S-22黄灰土①)	2	土師 埴a	39	122	001	13.0	2.5	8.7	灰、内
* (S-22黄灰土②)	3	土師 埴a	39	121	001	13.6	2.5	7.8	イト
* (S-22黄灰土③)	4	土師 埴a	39	001	13.0	2.7	8.7	イト、内	
* (S-22黄灰土④)	5	瓦葺 皿c	39	122	001	-	2.0	7.6	-
* (S-22黄灰土⑤)	1	土師 小皿c	39	122	002	8.4	1.5	6.6	-
* (S-22黄灰土)	2	土師 埴c	39	122	001	-	1.2	7.9	-
* (S-22黄灰土)	3	瓦葺 皿	39	122	003	-	4.4	-	-
* (S-22黄灰土)	4	金属製品 釘	39	122	004	3.0	0.8	0.7	釘頭
21SX022黄土 (S-22黄土)	1	土師 埴c	39	123	002	-	3.8	13.8	-
* (S-22黄土)	2	陶器 平り鉢	39	123	001	21.5	4.0	-	中国産陶器
* (S-22黄土)	3	石製品 錫	39	123	003	-	6.8	-	滑石
21SX022黄灰土 (S-22黄灰土)	1	土師 小皿a	40	124	025	8.0	1.25	5.7	-
* (S-22黄灰土)	2	土師 小皿a	40	124	003	8.7	1.5	5.9	イト、内
* (S-22黄灰土)	3	土師 小皿a	40	124	002	6.6	1.45	6.1	イト
* (S-22黄灰土)	4	土師 小皿a	40	124	007	9.0	1.2	6.9	灰
* (S-22黄灰土)	5	土師 小皿a	40	124	021	8.1	1.1	7.0	イト、灰、内
* (S-22黄灰土)	6	土師 小皿a	40	124	009	8.3	1.2	6.8	イト
* (S-22黄灰土)	7	土師 小皿a	40	124	022	8.2	1.1	6.7	イト、内
* (S-22北沢黄灰土)	8	土師 小皿a	40	126	005	8.1	0.8	7.0	イト、灰、内
* (S-22黄灰土)	9	土師 小皿a	40	126	001	7.5	1.0	5.0	内
* (S-22黄灰土)	10	土師 小皿a	40	126	013	8.3	1.2	3.8	イト
* (S-22黄灰土)	11	土師 小皿a	40	126	011	8.6	1.1	6.6	内
* (S-22黄灰土)	12	土師 小皿a	40	126	010	8.4	1.0	6.3	イト
* (S-22黄灰土)	13	土師 小皿a	40	124	005	8.6	1.05	6.3	イト、内
* (S-22北沢黄灰土)	14	土師 小皿a	40	126	007	9.0	1.2	6.6	イト、内
* (S-22黄灰土)	15	土師 小皿a	40	126	026	9.0	1.35	7.3	イト
* (S-22黄灰土)	16	土師 小皿a	40	126	015	9.2	1.5	7.0	イト
* (S-22黄灰土)	17	土師 小皿a	40	128	012	8.3	1.2	7.3	イト、内
* (S-22黄灰土)	18	土師 小皿a	40	128	001	7.8	1.1	6.5	イト
* (S-22黄灰土)	19	土師 小皿a	40	128	023	8.5	1.1	6.4	イト、灰、内
* (S-22黄灰土)	20	土師 小皿a	40	128	004	8.4	1.3	7.1	イト、内
* (S-22黄灰土)	21	土師 小皿a	40	128	014	8.4	0.8	7.1	イト
* (S-22北沢黄灰土)	22	土師 小皿a	40	128	006	9.2	1.0	7.5	-
* (S-22北沢黄灰土)	23	土師 小皿a	40	128	003	9.6	1.2	8.4	イト、内
* (S-22北沢黄灰土)	24	土師 小皿a	40	128	002	9.4	1.0	7.9	イト、灰、内、積層質
* (S-22黄灰土)	25	土師 小皿a	40	128	006	9.5	0.9	7.6	イト、内
* (S-22黄灰土)	26	土師 埴a	40	130	003	11.5	2.5	7.7	-

表16 宝21出土遺物計測表3

遺 跡	No.	品 種	国庫番号	年度番号	目 録	口 径	高 さ	重 量	備 考
					cm	cm	cm		(※は欠損、●は複製品)
215X022黄灰土	(8-22南区黄灰土)	27	土師 埴a	40	130	002	11.0*	2.4	6.8*
*	(8-22黄灰土)	28	土師 埴a	40	130	008	13.0*	2.6	9.9*
*	(8-22黄灰土)	29	土師 埴a	40	130	019	15.6*	2.2	12.2*
*	(8-22黄灰土)	30	土師 埴a	40	130	024	-	1.3*	9.1*
*	(8-22北区黄灰土)	31	土師 埴b	40	130	004	-	1.1*	6.2*
*	(8-22黄灰土)	32	土師 埴c	40	130	017	-	1.7*	6.9*
*	(8-22北区黄灰土)	33	瓦質 小皿a	40	132	008	8.0*	1.7*	-
*	(8-22南区黄灰土)	34	甕 埴	40	132	004	-	3.5*	4.8
*	(8-22黄灰土)	35	陶器 埴	40	132	016	9.0*	2.3*	-
*	(8-22南区黄灰土)	36	甕 埴	40	132	001	-	2.2*	-
*	(8-22黄灰土)	37	甕 埴a	40	132	018	-	1.6*	-
*	(8-22黄灰土)	38	甕 埴a	40	132	020	-	2.0*	-
*	(8-22北区黄灰土)	39	金属製品 釘	40	132	009	4.2	0.8	0.8
*	(8-22黄灰土)	40	金属製品 釘	40	132	027	4.2	0.8	0.7
1トレンチ黄灰土	(1トレンチ黄灰土)	1	土師 小皿a	41	134	002	7.2*	1.0	5.3*
*	(1トレンチ黄灰土)	2	土師 小皿c	41	134	001	7.2*	2.0	4.5*
*	(1トレンチ黄灰土)	3	石製品 石刷片	41	134	003	4.1	5.0	0.8
3トレンチ黄灰土	(3トレンチ黄灰土)	1	土師 小皿a	41	134	003	8.6*	0.8	6.8*
*	(3トレンチ黄灰土)	2	土師 小皿a	41	136	004	8.2*	1.1	7.0*
*	(3トレンチ黄灰土)	3	土師 小皿c	41	136	005	-	1.5*	6.2*
*	(3トレンチ黄灰土)	4	土師 埴a	41	136	001	-	1.9*	9.0*
*	(3トレンチ黄灰土)	5	土師 埴a	41	136	002	11.8*	2.4	7.3*
*	(3トレンチ黄灰土②)	6	土師 埴a	41	136	001	14.3*	2.6	10.0*
*	(3トレンチ黄灰土③)	7	土師 埴a	41	136	001	16.0*	3.0	10.0*
*	(3トレンチ黄灰土)	8	甕 埴a	41	134	001	20.0*	5.0*	-
*	(3トレンチ黄灰土)	9	金属製品 釘	41	134	006	5.1	0.7	0.7
3トレンチ灰緑土	(3トレンチ灰緑土)	1	土師 小皿a	41	138	004	7.8*	0.9	6.2*
*	(3トレンチ灰緑土)	2	土師 小皿a	41	138	003	8.2	1.1	6.1
*	(3トレンチ灰緑土)	3	土師 小皿a	41	138	009	7.5*	1.1	5.6*
*	(3トレンチ灰緑土)	4	土師 小皿a	41	138	005	9.3*	1.0	8.0*
*	(3トレンチ灰緑土)	5	石製品 石刷加工品	41	138	008	4.0	7.5	1.5
*	(3トレンチ灰緑土②)	6	甕 埴c	41	138	002	13.2*	1.3*	-
*	(3トレンチ灰緑土)	7	甕 埴c	41	138	007	-	1.4*	-
*	(3トレンチ灰緑土)	8	甕 埴a	41	138	001	13.0*	3.2	8.3*
*	(3トレンチ灰緑土)	9	甕 埴aX埴c	41	138	006	13.0*	3.4*	-
*	(3トレンチ灰緑土②)	10	甕 埴a	41	138	001	18.8*	4.9*	-
*	(3トレンチ灰緑土)	11	甕 埴a	41	138	002	17.5*	1.8	14.5*
3トレンチ黄土	(3トレンチ黄土)	1	甕 埴	41	134	001	-	2.8*	-
*	(3トレンチ黄土)	2	石製品 石刷	41	134	003	-	6.5*	-
*	(3トレンチ黄土)	3	瓦質 埴底X埴底	41	134	002	-	2.6*	8.3*
4トレンチ黄灰土	(4トレンチ黄灰土)	1	土師 小皿a	42	139	010	-	1.0*	6.6*
*	(4トレンチ黄灰土)	2	土師 小皿a	42	139	002	9.0*	1.0	6.4*
*	(4トレンチ黄灰土)	3	土師 小皿a	42	139	009	9.0*	1.1	6.4*
*	(4トレンチ黄灰土)	4	土師 小皿a	42	139	006	9.2	1.0	7.2*
*	(4トレンチ黄灰土)	5	土師 小皿a	42	139	008	8.2*	1.0	6.5*
*	(4トレンチ黄灰土)	6	土師 小皿a	42	139	007	-	0.8*	7.2*
*	(4トレンチ黄灰土)	7	土師 埴a	42	139	005	12.0*	2.1	8.0*
*	(4トレンチ黄灰土)	8	土師 埴a	42	139	003	13.0	1.9	8.5
*	(4トレンチ黄灰土)	9	土師 埴a	42	139	001	13.0	2.3	9.0
*	(4トレンチ黄灰土②)	10	土師 埴a	42	139	001	13.5*	2.4	9.0*
*	(4トレンチ黄灰土)	11	陶器 埴	42	141	004	16.0*	4.5*	-
*	(4トレンチ黄灰土③)	12	甕 埴 1in1in	42	141	001	16.4*	6.2	6.0
*	(4トレンチ黄灰土④)	13	石製品 甕	42	141	001	-	10.2*	-
4トレンチ黒灰土	(4トレンチ黒灰土)	1	土師 埴a	42	001	14.0*	2.7	10.0*	イト、灰、内
*	(4トレンチ黒灰土②)	2	土師 埴a	42	002	13.5*	2.6	9.6*	イト、灰、内
*	(4トレンチ黒灰土)	3	土師 埴	42	143	002	26.5*	3.1	20.0
5トレンチ黄灰土	(5トレンチ黄灰土)	1	土師 小皿a	42	145	002	8.0*	1.1	6.3*
*	(5トレンチ黄灰土)	2	土師 埴a	42	145	004	13.1	2.3	9.0*
*	(5トレンチ黄灰土)	3	土師 埴a	42	145	003	-	1.7*	10.0*
*	(5トレンチ黄灰土)	4	土師 埴	42	145	005	-	2.2*	-
*	(5トレンチ黄灰土)	5	金属製品 釘	42	145	001	5.2	1.0	0.9

## 第4章 総括

### 1 遺跡の構成について

21次調査区はもともと西側に緩やかに傾斜した土地を切り盛りによって平坦化し、盛りの端に二段の石垣を、切り土崖上に土塁を構築して空間を確定している。その時期は21SX022石垣前面の堆積層出土遺物や21SX002庭園遺構下で検出した地山直上に構築された遺物包含層の時期から13世紀代と認識される。

制約のある調査であったため、この造成面内での構成遺構間の有機的な関係を説明するには不足もあるが、西側にある上下2段の石垣には各段にそれぞれ石段が設けられそれらは筋違いに配置されている。登り切った箇所には掘立柱建物の四脚門1SB070があり、その内側に整地を伴う掘立柱建物と思われるピット群がトレンチで確認された。その奥には切り土崖前面に大きく3箇所に分けられた露頭石を取り込んだ庭園空間が広がり、その北側の一角に数寄屋風の小規模な礎石建物21SB120が置かれている。ここでは堆積層に木炭粒が含まれ火災のあった痕跡とも考えられる。これを補足するように21SX022石垣前面で出土した土師器の中には二次焼成によって完全に須恵器化した硬質の土器が一定程度含まれている。その時期は大宰府編年XVII～XIX期の14世紀前半頃に想定される。遺跡全体での遺物の供給はこの時期で停止することもこのことと関連すると考えられる。

庭園遺構は切り土造成に伴って地盤から露出した花崗岩塊を主体に周辺に花崗岩礫を配したもので、後代の庭園からすれば造作の規模はそれほど大きなものではない。しかし、全体に散漫に広がりを持つのではなく4箇所の集中箇所があり、中でも21SX001では数寄屋風建物を取り込んだ形になっているなど、本調査では明らかにできなかった建物群との関係に於て場面設定が存在したことが充分考えられる。

墳墓は切り合い関係から考えるとこれら館機能が終焉した後に構築されたもので21SX030はあえて数寄屋風建物21SB120の中心を穿って構築されている。

庭園については21SX002について白土を貼ったり築山21SX003,105を造り足すなどして江戸後半期に再利用されていることがわかった。1トレンチの畝状遺構21SX013などはその時期の耕作痕と見られ、至近に小庵があったことが推測される。

造成基盤層には8世紀代の須恵器が含まれており、11次調査区から引き続きキャンブサイト的な土地利用があったと考えられ、宝満山中での祭祀活動の基地になっていたことが考えられる。



## 2 各専門家のご指導および保存の経過について

21次調査は保存を前提として調査に着手しており、調査後に21SX022石垣遺構や21SX001数寄屋風建物周辺を中心とした調査対象地全体において遺構を保護する目的で埋め戻し作業をおこなっている。また、現場作業中に多くの方々にご教示をいただき、それを基に保存への行政的な手続きをおこなっている。以下にその経過を述べる。

(1998年11月24日文化庁本中真氏ご教示)

現状の庭園研究から本例を見た場合、庭園の配置としては自然すぎて（人為的部分が少なく）もう一つほしいという感がある。

簡易な礎石建物がまだあったのではないかと考えられる。

茶室風の建物（21SB120）の存在は面白く、鎌倉期であれば今のところ例がないのではないか。

(1998年11月25日奈良国立文化財研究所加藤允彦氏ご教示)

地中から出た石を用いる考え方は『作庭記』にも見える技法で理解できる。ただ21SX002,007,008については自然すぎて掘みどころを読みづらい印象がある。

21SX007と008の間には地山を掘り残した部分があり、景観として分けられているように見える。

21SX002の白土を土手際に敷く手法は近世的な要素に見える。

21SX001の逆L字状の盛り土の南側は奥の小庵（21SB120）への入り口かと思われ、門があったことも想定される。ここは全体の中でもプライベートな空間として設定されたものであろう。それに対し1、2トレンチ付近は21SX002,007,008を望む「会所」などのあった公的な空間として捉えられる。

21SB120南東側はこの小庵から見るための石組みがある。

(1999年2月8日佐賀県名護屋城博物館宮武正登氏ご教示)

この遺跡は土塁と石垣、柵を備えており、寺院にない軍事的な要素が認められ、単純に寺院であったとはいきれない。むしろ武家の居館と考えるほうが理解しやすい。

構造的には庭と石垣の間の空間が狭く感じられ、土塁のさらに東側にさらに本館

的な建物があった可能性を考えても良いのではないか。

石の配置などは独特のものがあり、今後の庭園史を考える上で指標になる重要な遺構と考えられる。水（池）を用いない鎌倉～南北朝時代の庭園の事例には足利学校、金沢称名寺などが挙げられる。

守護の館には行政官として保有していた守護所としての公的な館と、生活空間としての私的なものの二者があると考えているが、今回のものはその規模や遊び空間と考えられる要素を持つことから私的な館に相当する場所に設えられた庭園と考えられる。守護の館としては九州では熊本県の浜の館遺跡や相良氏館跡などがあげられるが、いずれも部分的な調査に止まっており全容が分かっておらず、この遺跡が少武の館であるとすれば貴重な存在である。

庭園内の礎石建物（21SB120）は床東のある床を上げた構造の建物であると考えられる。位置や構造から後の戦国時代に流行する「数寄屋」建物に類似しており、鎌倉～南北朝時代であるとすればかなり古い遺構であり貴重である。建物に使用された尺度は年代比定に重要な要素とされており、データを明らかにしてほしい。

北側のL字に組まれた石組み（21SX001）は、花壇遺構と報告されたものに類似がある（奈良国立文化財研究所刊行「発掘庭園遺構集成」を参照のこと）。また、鎌倉市の八幡宮参道の壇かずら遺構にも類似している。

「有智山城」について、現在知られている有智山城は城内構造が扇形で手狭な造成面を連続させた構造であり、古い印象を受けるが、正面の濠と土塁は土塁の比高差が大きく、石垣を組み込む手法が採られている点で新しいと考えられる。特に土塁南西側に算木積みの手法が採用された石垣があり、これが織豊期の指標と考えられる要素であることから、16世紀後半にこの有智山城の前面部分だけ改修されたと考えられる。このことから南北朝期の「有智山城」は現在知られている箇所限定して比定するには問題がある。

これらのことから、この遺跡は鎌倉時代から南北朝時代にかけての守護クラスの武家の居館として例が少ない点で重要であり、庭園部分だけを取り上げて時期が古く保存状態が良い点で貴重な遺跡であるといえる。また、石垣の築造技術は同時代には知られていなかった技法が認められ、土木工学的にも今後の指標になる貴重なものであると考えられる。

（1999年2月8日九州大学川添昭二氏ご教示）

筑前守護であった武藤少武氏に関係する資料は、同家が廃絶したためにあまり残さ

れておらず、ここが少々の館であるとすれば、かなり貴重な発見である。

この時期の庭園としても九州では類例がなく、きわめて貴重である。

城と館の関係がもう少し説明されれば、この調査地点に止まらず重要な範囲はもっと広く捉える必要があるのではなかろうか。

以上のような専門家のご意見を受け、平成11（1999）年2月11日 文化財専門委員会を召集し同委員による視察、審議が開催され、遺跡の重要性を認め今後に向けた保存の手続きが必要との指摘を受ける。続く平成11（1999）年2月25日には太宰府市議会総務文教員会による視察、審議がおこなわれ、この中でも活用を視野に入れた保存の方向で審議がおこなわれた。

これを受け文化財課では平成11（1999）年4月9日に土地地権者である承天寺に対し遺跡保存要請の申し入れをおこなった。

## 第5章 付編 分析結果

### 大宰府市宝満山遺跡・原8次調査出土ガラスの分析調査 肥塚隆保（奈良国立文化財研究所）

#### 1.はじめに

福岡県内における12世紀頃から14世紀頃のガラスの科学組成については、山崎・肥塚による博多遺跡で出土したガラス片等の調査報告がある。これらの調査結果から当時のガラスはカリウム鉛ガラス( $K_2O$ - $PbO$ - $SiO_2$ 系)が流通していたことが明らかにされた。また、それらは鉛同位体比法による測定では、中国産や長崎県対州鉱山産の鉛鉱石が使用されていることが判明した。

日本で出土するガラスは材質から見ると、歴史的にかなり変遷していることが明らかになりつつあるが、中世におけるガラスは弥生時代・古墳時代・奈良時代ほど流通していなかったように考えられているが、最近の発掘調査からガラス容器片や小玉類の出土が報告されているが、中世におけるガラスの全容については明らかにされていないのが現状である。ここでは宝満山遺跡・原遺跡8次調査によって出土したガラス小玉とガラス片について測定したので、その結果について報告する。

#### 2.試料と測定方法

観察調査した試料は、表17に掲げる85点であり、色調から見ると透過光源下では赤色透明(反射光ではやや暗い赤色半透明)、青色ないし青紺色透明(反射光では青色半透明)、そして大多数はやや淡黄色を呈する白色透明(やや濁ったような透明感を呈し、水晶のような透明感を与えるものではなく、反射光では白色半透明)である。いずれも表面は風化しており、鱗状を呈するものや、筋状を呈するものなどさまざまである。特に、白色透明ガラスでは表面に白色粉状の物質が二次的に析出しているものなどが顕微鏡下で観察された。また、風化しているため、ガラスの加工方法を顕著に示す、巻き技法の痕跡が明瞭に示されていた。今回の小玉はいずれも巻きつけによって製作されたものである。また、原遺跡8次調査によって検出された青色ガラス片は、青色透明なガラスに白色不透明ガラス状物質が接着しており、なんらかの装飾がなされていた痕跡とも見られたが、残存している部分が少なく詳細は不明である。ただ、この白色ガラス状物質は一見すると陶器のようにも見られるが粉状・軟弱である。

ガラスの物性・材質調査にあたっては、まず全試料についてアルキメデス法による

表17 分析結果表

注記	遺物番号	色調	分析No	外径×厚み (mm)	重量 (g)	比重	注記	遺物番号	色調	分析No	外径×厚み (mm)	重量 (g)	比重		
S-19 990113	1	赤	13-01	6.7×4.2	0.35	3.64	S-19 990113	43	青		5.8×5.6	0.31	3.00		
	2	白	13-02	5.3×4.4	0.21	2.90		44	青		6.1×5.4	0.33	3.21		
	3	白	13-03	5.5×4.7	0.22	2.83		45	青		6.1×5.5	0.34	3.00		
	4	白	13-04	5.2×4.3	0.18	2.85		46	青		5.8×5.3	0.31	3.14		
	5	白	13-05	5.3×4.2	0.17	3.07		47	青		5.9×4.7	0.28	3.02		
	6	白		5.4×4.7	0.22	2.86		48	青		6.4×5.4	0.38	3.20		
	7	白		5.4×4.7	0.19	2.51		49	青		5.8×5.6	0.33	2.94		
	8	白		5.0×3.9	0.14	2.67		50	青		5.8×5.2	0.30	3.15		
	9	白		5.4×4.4	0.17	3.08		51	青		5.9×4.9	0.30	3.13		
	10	白		5.6×4.8	0.21	2.62		52	青		5.6×5.2	0.30	2.94		
	11	白		5.2×4.5	0.20	3.15		53	青		5.9×5.4	0.31	2.92		
	12	白		5.4×5.4	0.19	3.10		54	青		6.0×5.7	0.37	2.91		
	13	白		5.4×4.6	0.22	3.94		55	青		6.0×5.4	0.32	2.97		
	14	白		5.3×5.1	0.22	3.94		56	青		5.7×5.5	0.29	2.95		
	15	白		5.2×4.6	0.17	2.46		57	青		6.0×5.7	0.34	3.19		
	16	白		4.9×3.1	0.12	2.99		58	青		5.8×5.4	0.29	3.14		
	17	白		5.2×4.2	0.16	3.07		59	青		5.7×5.8	0.31	3.18		
	18	白		5.6×4.6	0.20	2.74		60	青		5.9×5.3	0.33	3.16		
	19	白		5.6×4.7	0.21	2.89		61	青		6.0×4.7	0.30	3.05		
	20	白		5.0×3.8	0.15	2.71		62	青		5.7×5.1	0.28	3.14		
	21	白		5.6×4.6	0.21	2.60		63	青		5.7×5.5	0.30	3.12		
	22	白		5.1×4.3	0.15	2.47		64	青		5.7×5.0	0.26	3.17		
	23	白		5.3×5.2	0.23	3.00		65	青		6.1×5.0	0.32	2.92		
	24	白		5.1×4.0	0.16	2.63		66	青		5.6×5.5	0.31	2.97		
	25	白		5.1×4.7	0.20	2.80		67	青		5.8×5.3	0.31	3.21		
	26	白		4.9×4.4	0.15	2.69		S-19 990114	No.3	赤	14-03		5.9×4.5	0.40	3.67
	27	白		5.3×4.1	0.17	3.07			4	白	14-04		5.7×3.2	0.15	3.13
	28	白		5.1×4.4	0.19	2.72			13	白	14-13		5.2×4.8	0.22	2.89
	29	白		5.6×4.6	0.22	3.08			15	青	14-15		5.9×4.9	0.30	2.98
	30	白		5.2×4.7	0.22	2.80			16	青	14-16		5.6×5.3	0.28	2.96
	31	白		4.7×3.8	0.12	2.53			17	白	14-17		5.7×5.5	0.17	2.80
	32	白		5.7×4.0	0.20	2.67			18	白	14-18		5.3×5.5	0.20	2.97
	33	白		5.6×4.8	0.20	2.52			19	青	14-19		5.4×5.5	0.27	2.81
	34	白		5.1×3.0	0.11	3.09			25	白	14-25		5.9×3.8	0.14	2.82
	35	白		5.9×3.6	0.18	3.14			26	白	14-26		5.3×4.7	0.20	2.79
	36	青	13-36	6.0×5.0	0.31	3.00			28	白	14-28		5.1×3.7	0.15	2.74
	37	青	13-37	5.9×5.8	0.34	3.05			30	青	14-30		5.6×5.0	0.25	2.93
	38	青	13-38	5.7×5.7	0.31	2.84		31	白	14-31		4.9×4.4	0.16	2.60	
	39	青	13-39	5.5×5.2	0.28	3.00		32	白	14-32		5.8×4.4	0.21	3.04	
	40	青	13-40	5.3×5.0	0.22	2.80		33	青	14-33		6.0×5.1	0.30	3.12	
	41	青		5.9×5.1	0.31	3.19		34	白	14-34		5.4×4.8	0.21	2.92	
	42	青		5.7×5.7	0.31	3.17		36	淡青	破片					

上記試料に原産部第8次調査からは青色（白色が残存する）ガラス片が1点出土

比重の測定をおこなった。大気中での重量測定と水中による浮力から体積を求めて比重の測定をおこなった。次いで、全試料についてX線透過写真撮影をおこない、すべての試料が同材質か、あるいは材質の異なる試料が混じっているのか検討を加えた。さらに数点の試料を抽出してCR法(Computed Radiography)によってガラスの製作技法に関する構造調査(渦巻き構造・気泡の観察など)を適用した。この調査には、 $8\mu\text{m}$ の超微焦点X線管を使用して3倍の実物投影をおこなった。このCR法は画像の歪がないことや、照射X線量が従来の透過写真法に比べて、約10倍から100倍少なくてすむこと。また、画像データは従来のデジタルデータなので、従来のアナログデータに比べて画像の加工や保存が容易で、かつ現像処理を必要としない。

ガラス材質の測定には、微小領域エネルギー分散型蛍光X線分析装置をもちいて、検出された元素をすべて酸化物に置き換えて、検出された酸化物の合計が100%になるように規格化した値を示した。なお、定量値の測定には濃度既知の標準ガラス試料(BCR126A,SGT8など)を用いてFP法にて計算した。また、測定試料としては26工点の試料を抽出して、いずれも風化層を超音波研磨装置によって取り除いたが、風化が深部におよぶ試料については遺物が損傷することもあって研磨途中で中止してその部分の測定をおこなった。分析領域は $1\text{mm}\phi$ の範囲である。測定条件は次のとおりである。励起用X線管球:Mo,励起電圧:20kV,電流:4mA,計数時間:500sec,コリメータ: $1\text{mm}\phi$ ,測定雰囲気:真空中である。なお、原遺跡出土のガラス片の白色不透明部分についてはX線回折によって、結晶成分が存在するのかわかり測定をおこなった。測定条件は、対陰極(回転対陰極型):CuK $\alpha$ ,励起電圧:40kV,電流:150mA,走査速度:1deg/min,モノクロメータ使用、である。

### 3.測定結果とまとめ

各試料の比重を測定した結果については表17に重量とともに示した。各試料のバラツキは大きく、その比重の最小値は $2.47\text{g/cm}^3$ で最大値は $3.94\text{g/cm}^3$ を示し、全平均値とその標準偏差は $2.97\pm 0.27(\text{g/cm}^3)$ である。これはX線分析法(定性分析)によって調べたところ各試料の材質が異なると言うよりは、風化状態や内部に存在する気泡の分布状態、それに100~300mgと重量が小さくかつ、その体積測定にも誤差が伴うことなどが原因するものと考えられ、今回の試料について大雑把に言えばその比重はほぼ $3\text{g/cm}^3$ 程度である。

蛍光X線分析法による材質調査に関して、まず風化による成分の変動を調べるため、試料No13-1(赤色),13-2(白色),13-36(青色)の各試料について表面の風化部分と風化層を

研磨した部分の化学組成を比較検討した(図44、表18)。風化による化学組成の変動は複雑であるが、今回のガラス試料について言えば、風化によって主成分である酸化カリウムの含有量が著しく減少し、二酸化珪素の含有量が増加している。しかし、No13-02では二酸化珪素の変化はほとんど認められない。いっぽう、酸化鉛については風化によってその含有量が大きく減少するもの(No13-01)、増加するもの(No13-02)、著しい変化を示さないもの(No13-36)などさまざまである。増加しているものは、その表面に炭酸鉛の二次的結晶が析出していることが多いようである。いっぽう、微量に含有する元素については、試料自身の不均一性や分析誤差などが伴うので明確なことはいえないが、酸化鉄に関しては埋蔵環境の汚染を受けやすい表層部分で増加していることは明らかである。また、No13-01試料のように着色材料が関与していると考えられる酸化銅成分については表層部分ではその含有量は減少している。以上のことを総合的に考慮すると、風化部分で酸化カリウム含有量が著しく減少しているため(ガラスを構成する主成分酸化物からガラスの種類を判定するときに)誤ってガラスの種類を判定をおこなう危険性がある。

測定したガラス成分については、表19にまとめて示した。今回、測定した宝満山遺跡11次調査で出土したガラス小玉は、カリウム鉛ガラス( $K_2O$ - $PbO$ - $SiO_2$ 系)であることが明らかになった。主成分として、酸化カリウムを10数%含有し、二酸化ケイ素をほぼ50~60%前後、そして酸化鉛を30~40%前後の組成を示すものである。試料No13-01、No14-03は酸化カリウム含有量が少なく酸化鉛が多くなっているが、これは分析にあたって風化層が十分取り除けなかったことや、見掛け以上に内部まで風化が進んでいることなどが考えられ、他の試料とは材質が異なるものではないと考えられた。

今回測定したガラスは、白色、赤色、青色の三種類のもので、白色ガラスは全体として酸化カルシウムの含有量がやや多い傾向を示しており、これが着色の要因になっているとも考えられた。赤色のガラスに関しては、酸化銅の含有量が特徴的であり、これが赤色の着色に関与している。ガラスに含有している銅がどのような状態になっているのか調査していないが、コロイド粒子を形成しているものと推定される。青色ガラスに関しては微量のコバルトが検出されており、着色にコバルトが使用されているが、酸化鉄や酸化マンガンも他の色調のガラスよりも多く含有しており、コバルト鉱石に伴う不純物の可能性も考えられたが、弥生時代の遺跡から出土する青紺色カリガラス( $K_2O$ - $SiO_2$ 系)(コバルト着色)に含有する酸化鉄や酸化マンガンは1%前後に達するが、本試料ではいずれも1%以下であり、カリガラスとは異なるコバルト 鉱石が使

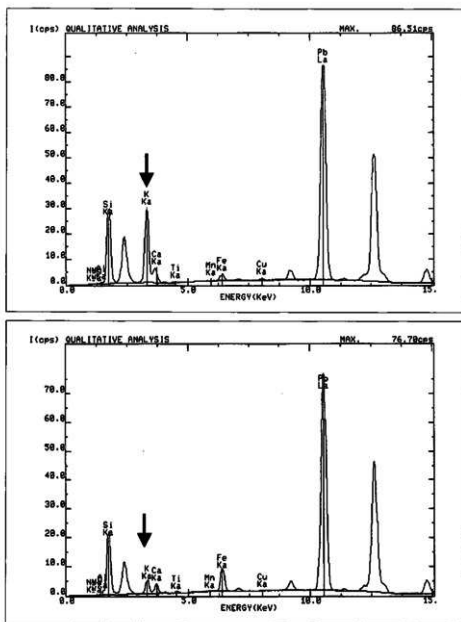
用されていたことも考えられた。

原遺跡8次調査で出土したガラス片(図45参照)のうち、青色半透明ガラス部分は宝満山遺跡11次で出土したガラス材質とは異なるカリ石灰ガラス( $K_2O$ - $CaO$ - $SiO_2$ + $PbO$ 系)に多量の酸化鉛を含有するタイプで、主成分である酸化カリウム:19%、酸化カルシウム:11%、二酸化珪素:55%、これに酸化鉛が11%前後含有するガラスである。もしくは、カリウム鉛ガラスに酸化カルシウムを添加したとも考えられるが可能性は低い(図46)。当時はカリ石灰ガラスも流通しており、北海道などで出土が報告されているが、九州地域における鎌倉期から室町期にかけての遺物としては、分析された結果が報告されるのは初めてであると思われる。いっぽう、白色不透明部分は軟弱で微粒状になっており風化が著しく進んでいると考えられ、ガラスの種類を明確にすることは困難であった。そこで、X線回折法による測定をおこなったところ、ガラスを示すブロードな回折ピーク上にフッ化カルシウム( $CaF_2$ )が検出された(図47)。この物質は、天然には螢石として知られており、ガラスの原料として利用されるもので、風化による二次的生成物とは考えにくい。むしろ、もともと残存している青色ガラス中に $CaF_2$ (Fluorite)の微晶が含まれていて、ガラスの風化が進んで風化に対する抵抗の強い鉱物が残存して、それが検出されたものと考えられ、白色部分ももとは青色ガラスであった可能性が考えられた。白色部分は、二酸化珪素:87%、酸化カリウム:0.2%、酸化カルシウム:4.0%、酸化銅:2.2%、酸化鉛:5.0%を主成分としており、風化が著しく進んで酸化カリウムがほぼ完全に溶出したものと考えられ、着色成分である酸化銅が残存しており、もとのガラス種を推定することが可能であった。これらの事に関しては、中国で出土したカリ石灰ガラスで青色を呈する(light blue opaque glass)ガラス容器(The Metropolitan Museum)から $CaF_2$ が検出されたことが報告されており、今回の試料と色調、ガラス材質(酸化鉛を伴う)が類似しており、半透明感を与えるために用いられたと解釈されている(1991R.H.Bri11)。

これまで九州地域で中世の遺跡から出土したガラス片で、分析によってカリウム鉛ガラスと判定されたのは、博多遺跡群第59次、62次、71次調査で出土したガラス片であり、このタイプのガラスがかなり流通していた可能性も考えられるが、アルカリガラスに比べて耐水性がなく風化に対して抵抗性がないため、多くの遺物は埋蔵中に消失したことなども考えられる。他の地域では東霧島神社遺跡(宮崎県)出土の緑色小玉や上脇遺跡(兵庫県)出土の緑色小玉(風化が著しい)などが同様な種類のガラスである。中世のガラスについてはあまり注目されておらず弥生時代・古墳時代のガラスに比べて分析例が少なく、その全容が明らかにされるのは将来をまたなければならない。な



お、中世のカリウム鉛ガラスの熱的性質についてはコーニングガラスのブリルを中心とするグループが調査しているので、参考として図5に示しておく。なお、今回のCR法による観察は、透明な試料が多く観察結果と同一であったので、写真等については割愛した。



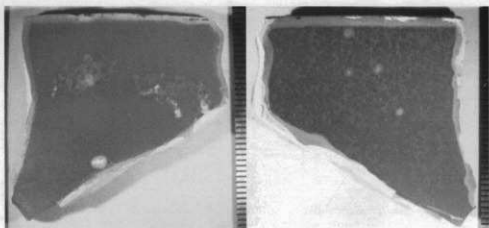
第44図 試料No13-02の蛍光X線スペクトル図

(左は表面の風化ガラス層を研磨した後測定した図で、右は表面をアルコールによるクリーニングのみを行った後に測定した図を示す。風化した図ではK $\alpha$ スペクトルが大きく減少しており、定性的に見ると右図は鉛ガラスと誤る可能性がある。)

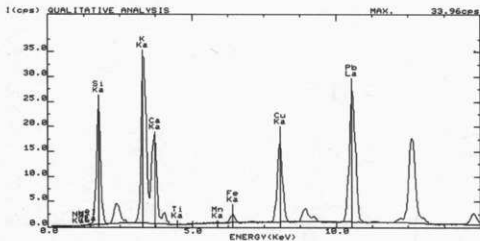
(見本)

No	SiO <sub>2</sub>	PbO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O	MgO	CaO	TiO <sub>2</sub>	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CuO	MnO	CoO
13-01	45.9	46.0	0.2	0.1	6.4	0.01	0.03	0.00	0.25	1.10	0.04	-
13-02	53.7	32.0	0.9	0.0	11.7	0.02	1.40	0.01	0.1	0.04	0.01	-
13-03	53.8	30.8	1.0	0.4	12.5	0.01	1.20	0.01	0.27	0.02	0.01	0.1
13-01W	67.2	29.1	0.2	0.0	2.1	0.01	0.03	0.06	0.55	0.81	0.05	-
13-02W	53.1	42.2	0.3	0.1	2.7	0.02	0.03	0.19	1.3	0.03	0.02	-
13-36W	60.9	33.9	0.4	0.3	2.5	0.43	0.02	0.19	1.24	0.05	0.03	0.1

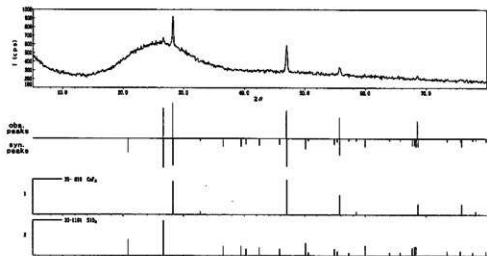
表18 風化層を研磨したガラス成分と風化(表面)ガラス層の成分比較



第45図 原遺跡第8次出土ガラス片(周辺部分に白色ガラス状物質が観察される。)



第46図 青色ガラス部分の蛍光X線スペクトル図



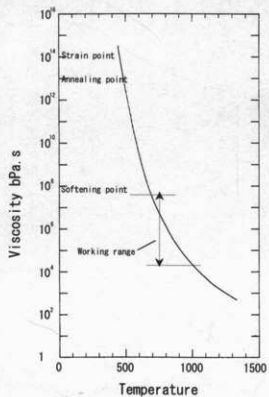
第47図 白色部分のX線回析スペクトル

No	SiO <sub>2</sub>	PbO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O	MgO	CaO	TiO <sub>2</sub>	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CuO	MnO	CoO	PbO/SiO <sub>2</sub>
13-01	45.9	46.0	0.2	0.1	6.4	0.01	0.03	0.00	0.25	1.10	0.04	-	1.0
13-02	53.7	32.0	0.9	0.0	11.7	0.02	1.40	0.01	0.31	0.04	0.01	-	0.6
13-03	53.8	30.8	1.0	0.4	12.5	0.01	1.20	0.01	0.27	0.02	0.01	0.1	0.6
13-04	50.2	29.5	1.3	1.2	15.0	0.01	2.50	0.01	0.24	0.03	0.01	-	0.6
13-05	52.9	30.4	1.1	0.7	13.3	0.01	1.30	0.01	0.27	0.03	0.04	-	0.6
13-36	51.6	32.4	0.9	0.1	12.8	0.01	1.00	0.01	0.60	0.03	0.28	0.1	0.6
13-37	53.3	32.3	0.1	0.4	11.7	0.02	1.00	0.01	0.62	0.03	0.32	0.1	0.6
13-38	53.3	32.6	0.1	0.2	11.1	0.50	1.10	0.01	0.60	0.03	0.27	0.1	0.6
13-39	52.7	31.8	1.1	0.2	12.2	0.01	1.00	0.01	0.55	0.03	0.29	0.1	0.6
13-40	52.3	33.1	0.2	0.3	11.8	0.01	1.24	0.02	0.67	0.05	0.10	0.1	0.6
14-03	43.4	47.0	0.3	0.5	7.4	0.04	0.03	0.01	0.22	1.08	0.05	-	1.1
14-04	45.2	36.3	2.0	0.2	14.2	0.03	1.91	0.01	0.26	0.04	0.02	-	0.8
14-13	52.8	31.3	0.2	0.8	12.8	0.40	1.21	0.01	0.30	0.03	0.02	-	0.6
14-15	49.2	36.2	0.2	0.3	12.8	0.03	0.03	0.01	0.63	0.04	0.29	0.1	0.7
14-16	48.7	36.9	0.2	0.4	12.6	0.04	0.03	0.01	0.67	0.04	0.33	0.1	0.8
14-17	49.7	32.7	0.2	0.3	14.2	0.60	2.10	0.01	0.25	0.05	0.01	-	0.7
14-18	47.5	33.0	0.1	0.3	16.1	0.60	2.27	0.01	0.23	0.03	0.01	-	0.7
14-19	50.1	33.7	0.2	0.3	12.9	0.40	1.04	0.01	0.71	0.03	0.37	0.1	0.7
14-25	51.0	28.0	0.1	0.8	14.5	0.60	4.70	0.01	0.30	0.02	0.06	-	0.5
14-26	52.1	28.9	0.1	0.7	14.3	0.02	3.71	0.01	0.24	0.03	0.01	-	0.6
14-28	50.5	28.3	0.1	0.9	14.5	0.80	4.60	0.01	0.30	0.02	0.01	-	0.6
14-30	50.5	34.7	0.1	0.3	12.8	0.03	0.02	0.01	0.73	0.05	0.01	0.1	0.7
14-31	47.7	30.7	0.1	0.4	17.6	0.81	2.40	0.01	0.31	0.02	0.02	-	0.6
14-32	52.6	29.8	0.1	0.8	14.6	0.01	1.86	0.01	0.23	0.03	0.01	-	0.6
14-33	51.3	33.7	0.1	0.9	12.2	0.60	0.03	0.02	0.68	0.04	0.31	0.1	0.7
14-34	52.4	32.9	0.1	0.3	12.9	0.02	1.05	0.01	0.28	0.03	0.07	-	0.6
原8次	55.0	11.0	0.7	0.8	19.1	0.13	10.99	0.01	0.22	2.08	0.02	-	0.2

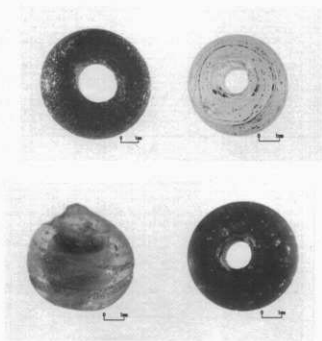
表中試料番号の13、14は宝満山遺跡群第11次調査での出土日を示す。

分析値の-部分は定量限界以下を示す。

表19 宝満山遺跡群11次/原遺跡8次調査で出土したガラスの分析結果

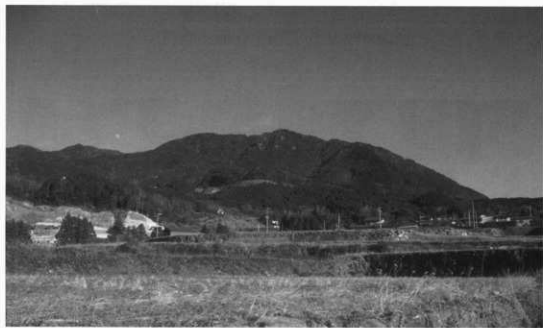


第48圖 粘度・温度曲線 (R.H.Brill)



第49圖 顯微鏡写真

写真図版



宝満山山頂と九重原



Pla.001 宝満山遺跡群第11次調査全体写真（西から）



Pla.002 北東調査区全体写真（西から）



Pla.003 11ST018・020全体写真（西から）



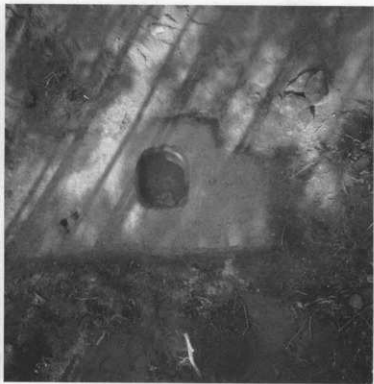
Pla.004

11ST018完掘状況（南から）



Pla.005

11ST020完掘状況（北から）



Pla.006

11ST019完掘状況（南から）





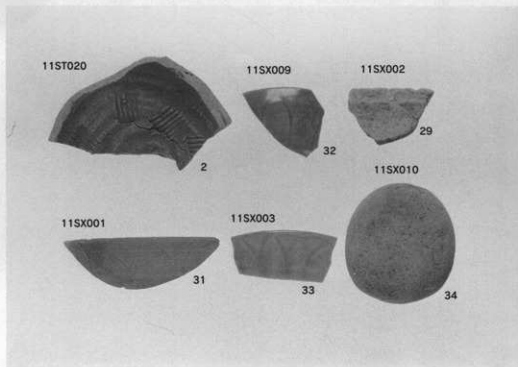
Pla.007

11ST019数珠玉出土状況（南から）

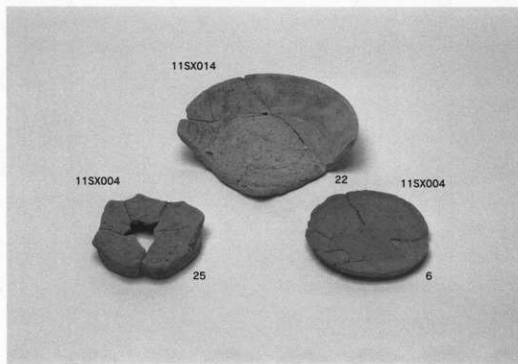


Pla.008

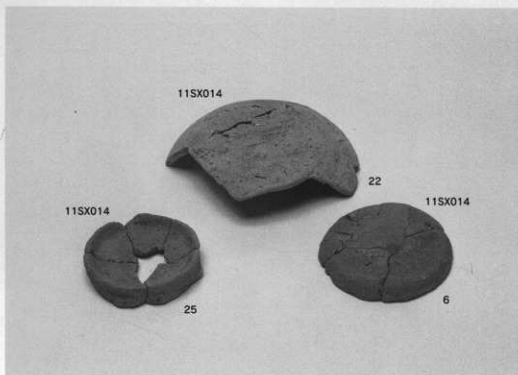
11ST020数珠玉出土状況 近接（南から）



Pla.009 宝11ST020・21SX001・002・003・009・010出土遺物

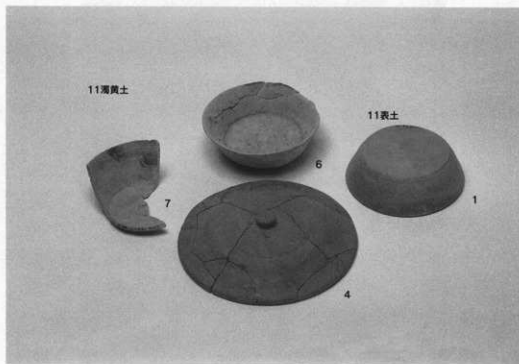


Pla.010 宝11SX004・014出土遺物



Pla.011

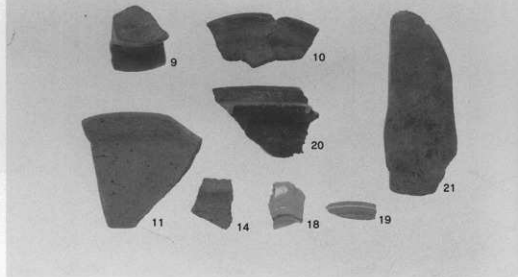
宝11SX004・014出土遺物



Pla.012

宝11黄濁土・表土出土遺物

11表土



Pla.013

宝11表土出土遺物



Pla.014 宝満山遺跡群第21次調査全体写真(東から)



Pla.015

宝満山遺跡群第21次調査全体写真（東から）



Pla.016

宝満山遺跡群第21次調査全体写真（東から）



Pla.017 宝満山遺跡群第21次調査全体写真（西から）



Pla.018 南谷から見た高尾山城と筑紫平野



Pla.019

南谷から見た糟屋平野



Pla.020

調査区表土剥ぎ状況（南から）



Pla.021

21SX001 表土剥ぎ状況 (東から)



Pla.022

21SX002 表土剥ぎ状況 (東から)





Pla.023

21SX002 表土剥ぎ状況 (西から)



Pla.024

21SX002・003表土剥ぎ状況 (東から)



Pla.025

21SX003 表土剥ぎ状況 (南西から)



Pla.026

21SX005 表土剥ぎ状況 (北から)



Pla.027

21SX005・065 表土剥ぎ状況（北から）



Pla.028

21SX006 表土剥ぎ状況（西から）



Pla.029

21SX007・008 埋め戻し状況 (北から)



Pla.030

21SX007・008 埋め戻し状況 (西から)



Pla.031

21SX008 表土剥ぎ状況 (東から)



Pla.032

21SX008・010 表土剥ぎ状況 (南西から)



Pla.033

21SB070完掘状況 (東から)



Pla.034

21SB070留め石 (東から)



Pla.035

21SB120完掘状況（北から）



Pla.036

21SB120完掘状況（東から）



Pla.037

21SB120完掘状況（西から）



Pla.038

21SK011遺物出土状況（北から）





Pla.039

調査区黄灰土除去時（南から）



Pla.040

21SX001黄灰土除去状況（東から）



Plia.041

21SX002 黄灰土除去状況（南から）



Plia.042

21SX002 黄灰土除去状況（西から）



Pla.043

21SX002 黄灰土除去状況（西から）



Pla.044

21SX002東石積み 黄灰土除去状況（西から）



Pla.045

21SX002遺物出土状況（西から）



Pla.046

21SX003 黄灰土除去状況（東から）



Pla. 047

21SX005 黄灰土除去状況（北から）



Pla.048

21SX005 黄灰土除去状況（南から）



Pla.049

21SX005 黄灰土除去状況 (南から)



Pla.050

21SX005 黄灰土除去状況 (西から)



Pla.051

21SX006・022・024南側（西から）



Pla.052

21SX006・022・024北側（西から）



Pla.053

21SX006・022・024 (北から)



Pla.054

21SX006・022・024 (北から)





Pla.055 21SX006・022・024中央（西から）



Pla.056

21SX007 黄灰土除去状況（東から）



Pla.057

21SX007 黄灰土除去状況（東から）



Pla.058

21SX007 黄灰土除去状況（西から）



Pla.059

21SX008 黄灰土除去状況（西から）



Pla.060

21SX012 黄灰土除去状況（西から）



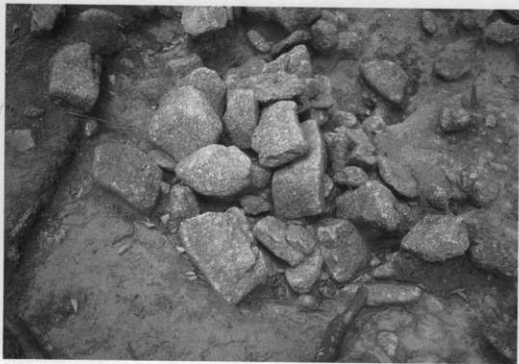
Pla.061

21SX014 黄灰土除去状況（西から）



Pla.062

21SX024 黄灰土除去状況（南西から）



Pla.063

21SX030 黄灰土除去状況（南から）



Pla.064

21SX031 黄灰土除去状況（東から）



Pla.065

21SX040 黄灰土除去状況（南から）



Pla.066

21SX050・055 黄灰土除去状況（南から）



Pla.067

21SX095 黄灰土除去状況（北西から）



Pla.068

21SX105・115 黄灰土除去状況（西から）



Pla.069

21SX110・003・002 黄灰土除去状況（西から）



Pla.070

21SX115 黄灰土除去状況（南から）





Pla.071

1トレンチ (東から)



Pla.072

1トレンチ (西から)



Pla.073

2トレンチ (北から)



Pla.074

2トレンチ (21SX013) (南から)



Pla.075

3トレンチ (西から) 4トレンチ



Pla.076

4トレンチ (5トレンチ一部) (西から)



Pla.077

6トレンチ (東から)



Pla.078

7トレンチ (東から)



Pla.079

8トレンチ (北から)



Pla.080

21SK011E-W土層 (南から)



Pla.081

21SX002東N-S土層（西から）



Pla.082

21SX002西N-S土層（南西から）



Pla.083

21SX002西N-S土層（西から）



Pla.084

21SX002南N-S土層（西から）



Pla.085

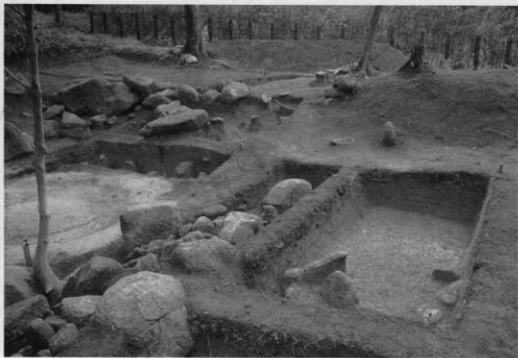
21SX002西側E-W土層 (北から)



Pla.086

21SX002東側E-W土層 (北から)





Pla.087

21SX002E-W土層 (北西から)



Pla.088

21SX003N-S土層 (北西から)



Pla.089

21SX003N-S土層 (北東から)



Pla.090

21SX007N-S土層 (北西から)



Pla.091

21SX008N-S土層 (西から)



Pla.092

21SX010E-W土層 (北から)



Pla.093

21SX012N-S土層 (西から)



Pla.094

21SX012N-S土層北部分近接 (西から)



Pla.095

21SX022北E-W土層 (南から)



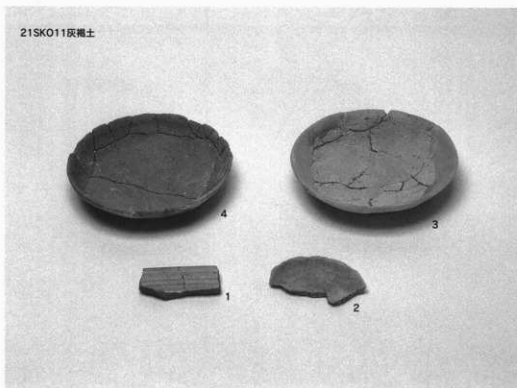
Pla.096

21SX022南E-W土層 (南から)



Pla.097

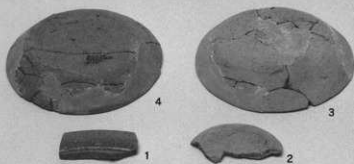
3トレンチ灰褐土層検出（北西から）



Pla.098

宝21SK011灰褐土出土遺物

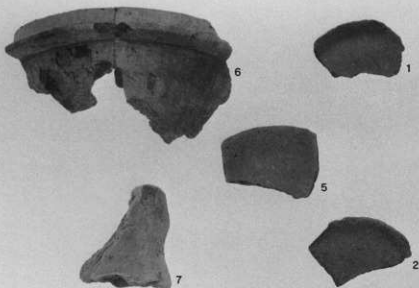
21SKP01灰褐土



Pla.099

宝21SK011灰褐土出土遺物

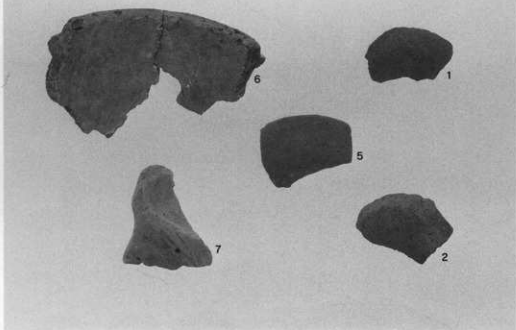
21SX001茶灰土



Pla.100

宝21SX001茶灰土出土遺物

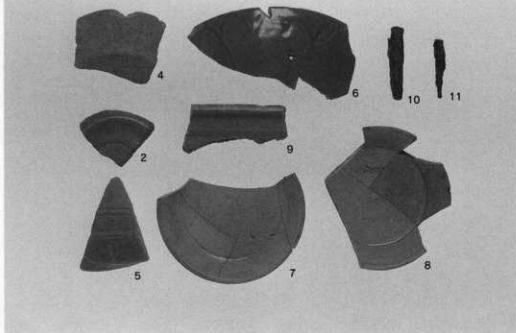
21SX001茶褐土



Pla.101

宝21SX001茶灰土出土遺物

21SX001黄灰土



Pla.102

宝21SX001黄灰土出土遺物

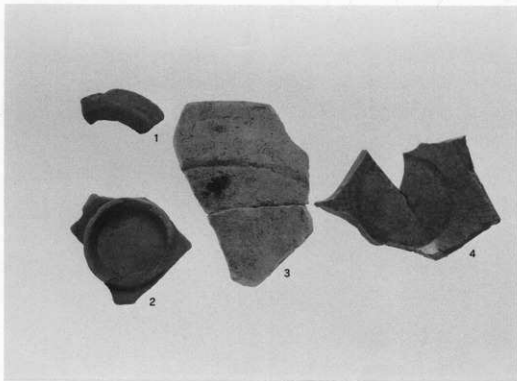


21SX001



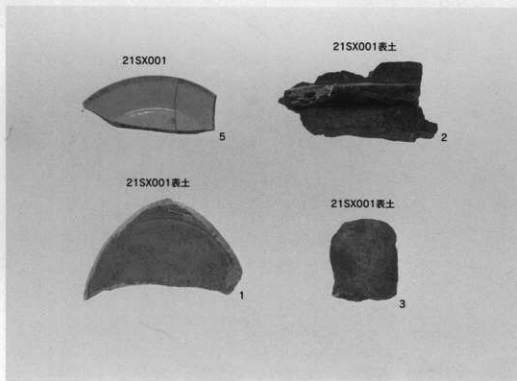
Pla.103

宝21SX001出土遺物



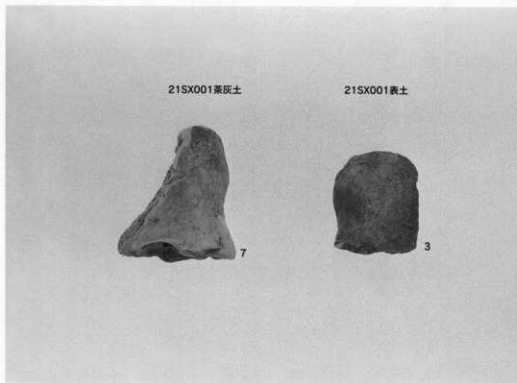
Pla.104

宝21SX001出土遺物



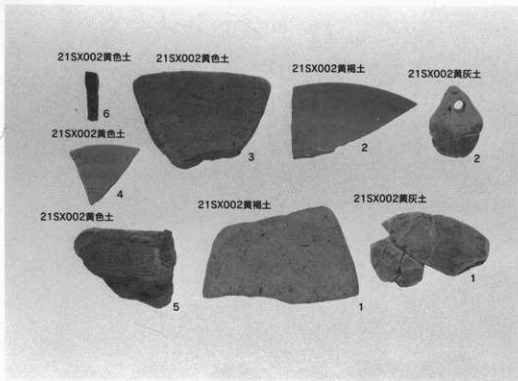
Pl.105

宝21SX001・001表土出土遺物



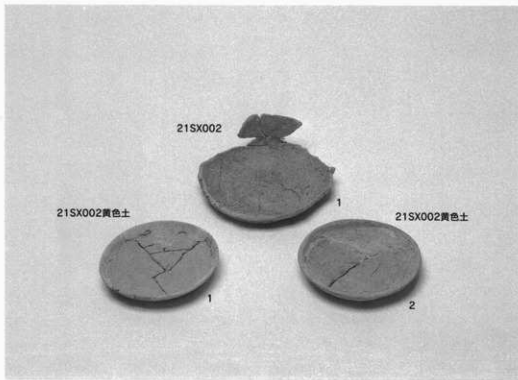
Pl.106

宝21SX001茶灰土・001表土出土土製品



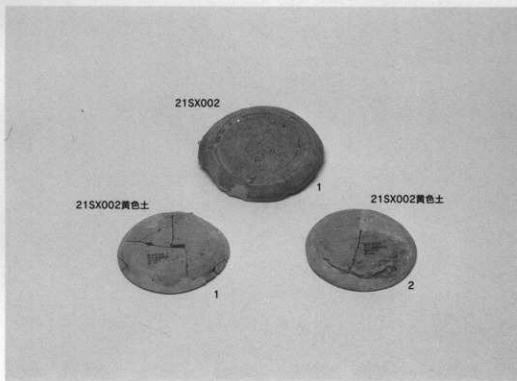
Pla.107

宝21SX002黄色土・002黄灰土・002黄褐土出土遺物



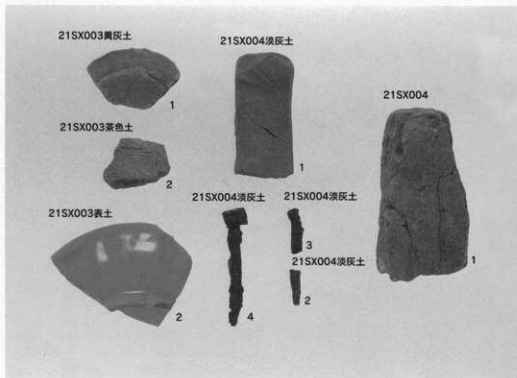
Pla.108

宝21SX002黄色土・002出土遺物



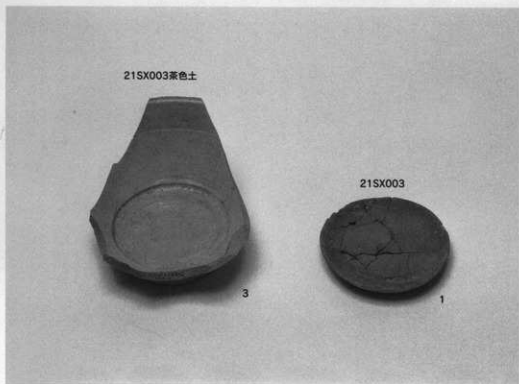
Pl.109

宝21SX002黄色土・002出土遺物



Pl.110

宝21SX003茶色土・003黄灰土・003表土・004淡灰土・004出土遺物



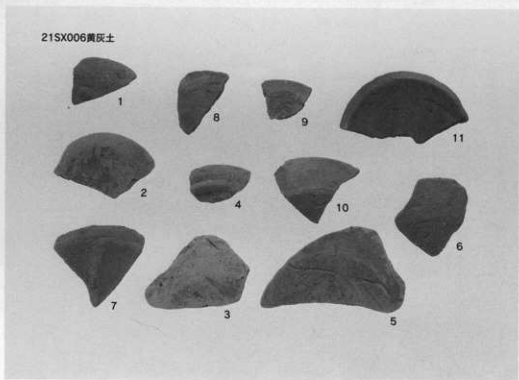
Pl.111

宝21SX003茶色土・003出土遺物



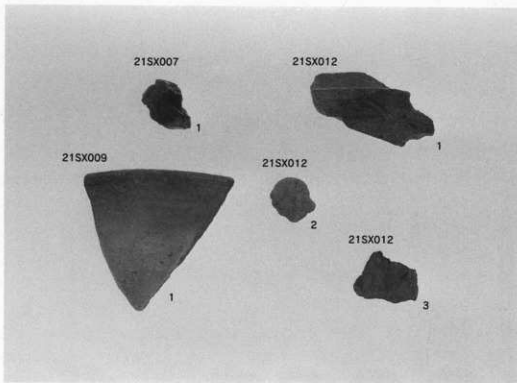
Pl.112

宝21SX003茶色土・003出土遺物



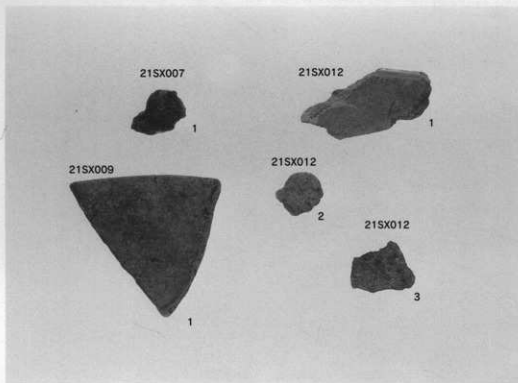
Pla.113

宝21SX006黄灰土出土遺物



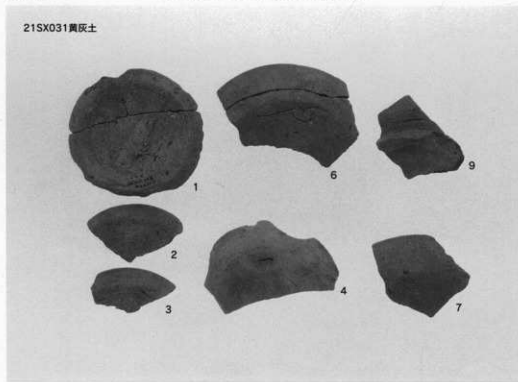
Pla.114

宝21SX007・009・012黄灰土出土遺物



Pla.115

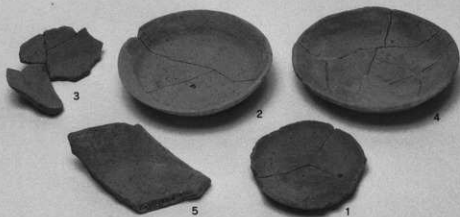
宝21SX007・009・012黄灰土出土遺物



Pla.116

宝21SX031黄灰土出土遺物

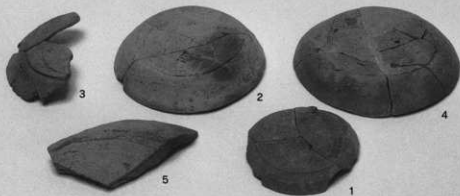
21SX031黑灰土



Pla.117

宝21SX031黑灰土出土遺物

21SX031黑灰土

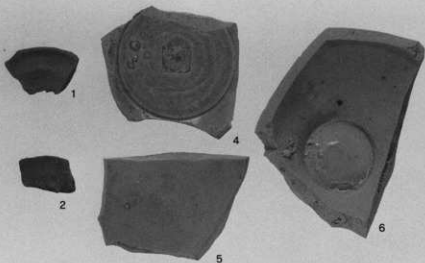


Pla.118

宝21SX031黑灰土出土遺物



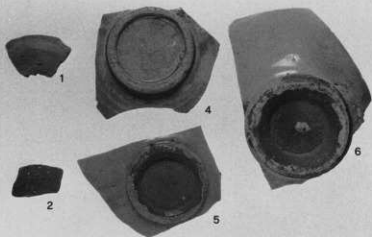
21SX022茶褐土



Pl.119

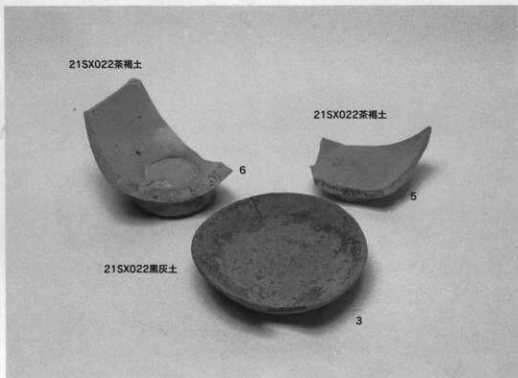
宝21SX022茶褐土出土遺物

21SX022茶褐土



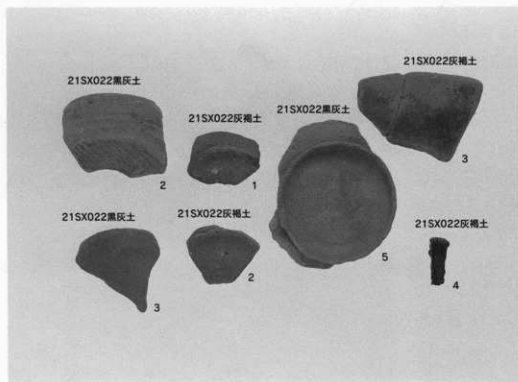
Pl.120

宝21SX022茶褐土出土遺物



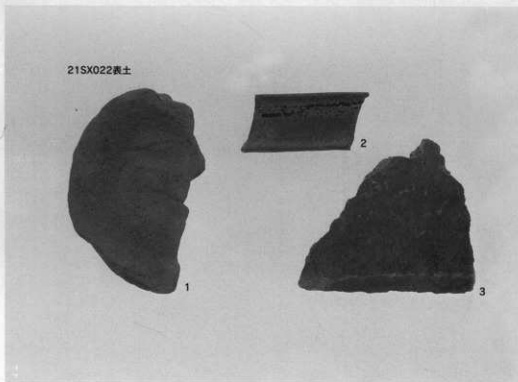
Pla.121

宝21SX022茶褐土・022黑灰土出土遺物



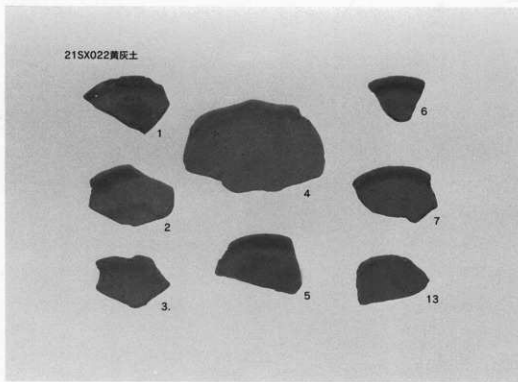
Pla.122

宝21SX022黑灰土・022灰褐土出土遺物



Pla.123

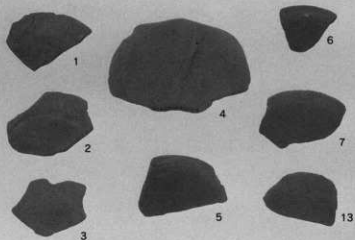
宝21SX022表土出土遺物



Pla.124

宝21SX022黄灰土出土遺物

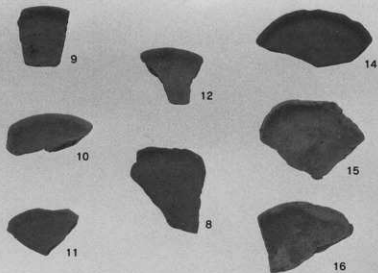
21SX022黄灰土



Pl.125

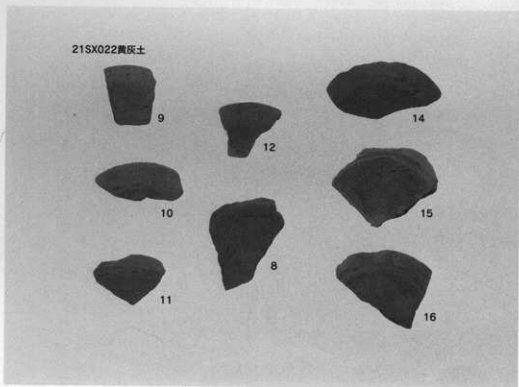
宝21SX022黄灰土出土遺物

21SX022黄灰土



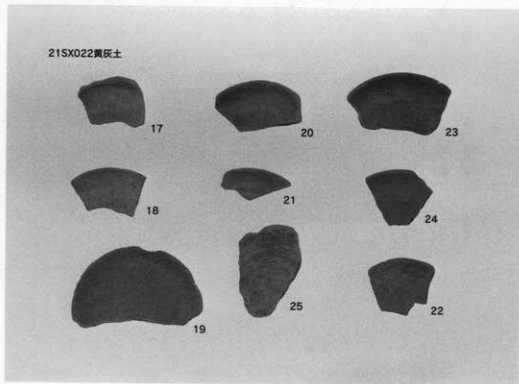
Pl.126

宝21SX022黄灰土出土遺物



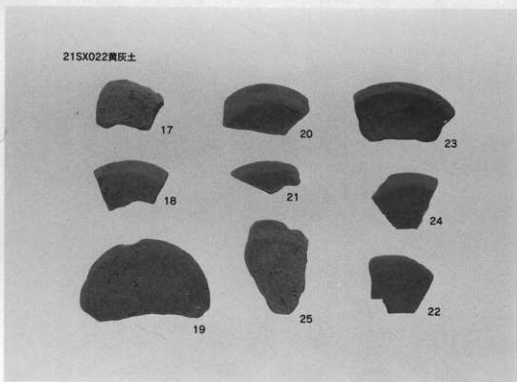
Pla.127

宝21SX022黄灰土出土遺物



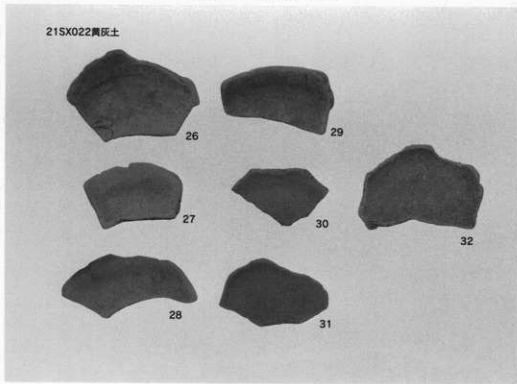
Pla.128

宝21SX022黄灰土出土遺物



Pla.129

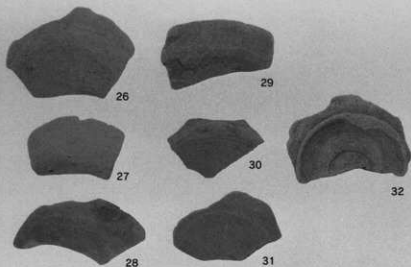
宝21SX022黄灰土出土遺物



Pla.130

宝21SX022黄灰土出土遺物

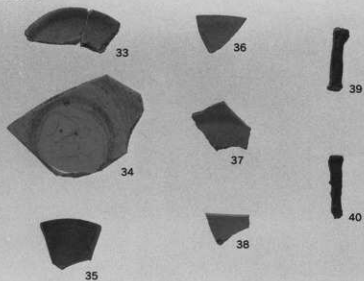
21SX022黄灰土



Plat.131

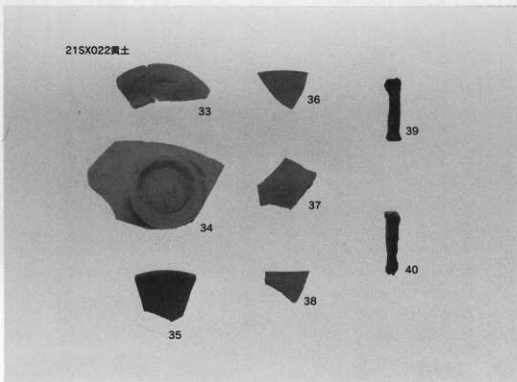
室21SX022黄灰土出土遺物

21SX022黄灰土



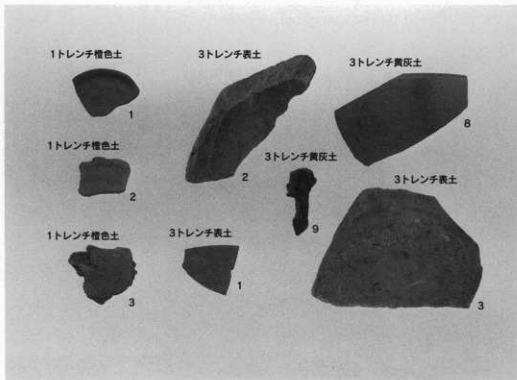
Plat.132

室21SX022黄灰土出土遺物



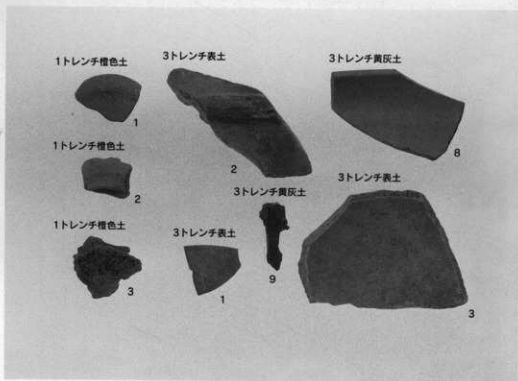
Pla.133

宝21SX022黄灰土出土遺物

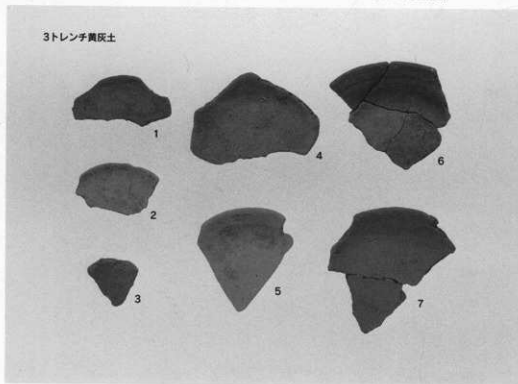


Pla.134 宝21 1トレンチ橙色土・3トレンチ黄灰土・3トレンチ表土出土遺物



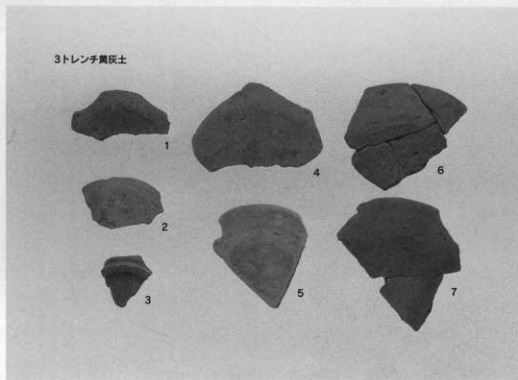


Pl.135 宝21 1トレンチ橙色土・3トレンチ黄灰土・3トレンチ表土出土遺物



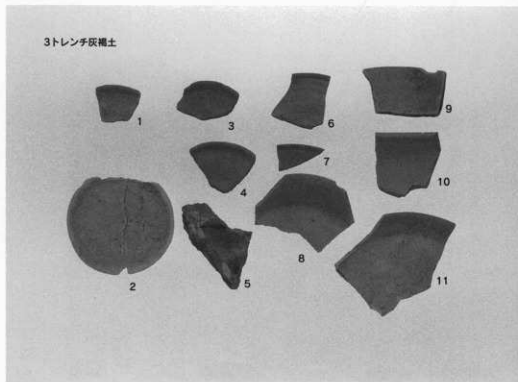
Pl.136

宝21 3トレンチ黄灰土出土遺物



Pla.137

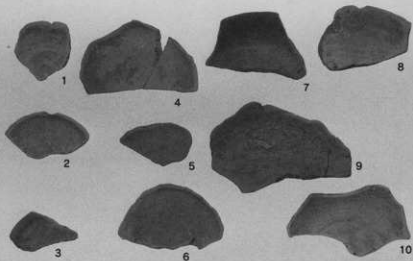
宝21 3トレンチ黄灰土出土遺物



Pla.138

宝21 3トレンチ灰褐色土出土遺物

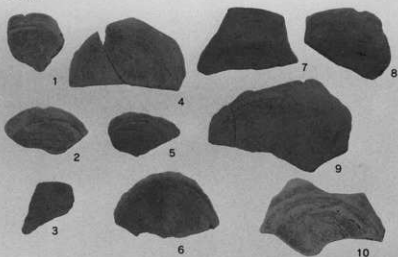
4トレンチ黄灰土



Pla.139

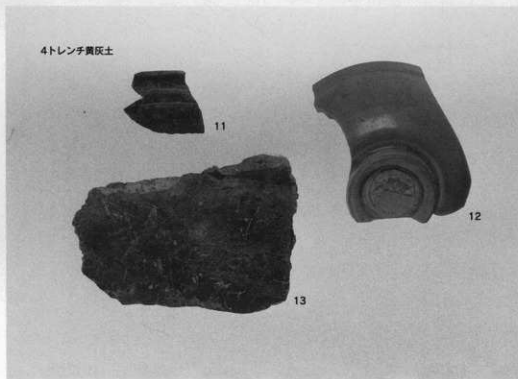
宝21 4トレンチ黄灰土出土遺物

4トレンチ黄灰土



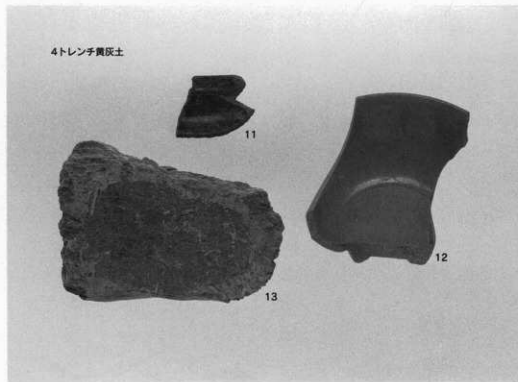
Pla.140

宝21 4トレンチ黄灰土出土遺物



Pl.141

宝21 4トレンチ黄灰土出土遺物



Pl.142

宝21 4トレンチ黄灰土出土遺物

4トレンチ黒灰土



Pla.143

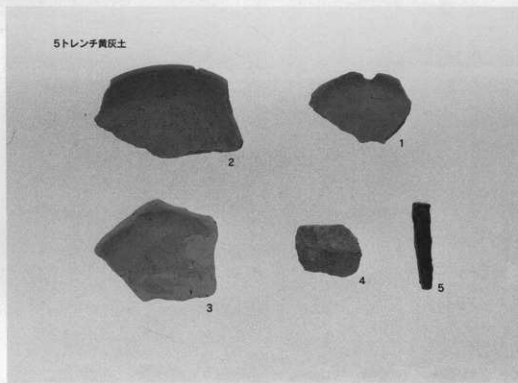
宝21 4トレンチ黒灰土出土遺物

4トレンチ黒灰土



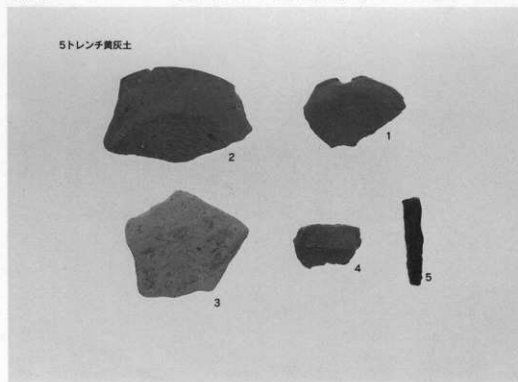
Pla.144

宝21 4トレンチ黒灰土出土遺物



Pla.145

宝21 5トレンチ黄灰土出土遺物



Pla.146

宝21 5トレンチ黄灰土出土遺物裏面

太宰府市の文化財 第55集

宝満山遺跡群III

宝満山遺跡11・21次調査

平成13年(2001)年3月

編集 太宰府市教育委員会  
発行 〒818-0198  
福岡県太宰府市観世音寺1丁目1-1  
印刷 四ヶ所印刷  
〒838-0058  
福岡県甘木市大字馬田336

印刷仕様；

画像スクリーン線数 250線  
アルミPS版使用

CD-ROM仕様；

Macintosh/Windowsハイブリット版  
画像データ書き込みはAcrobat Reader 4.0を使用



Y=41,190

Y=41,200

Y=41,210

Y=41,220

宝21庭園状遺構実測図(S=1/100)  
『宝満山遺跡群Ⅲ』 太宰府市の文化財  
第55集 2001 太宰府市教育委員会

X=59,230

X=59,240

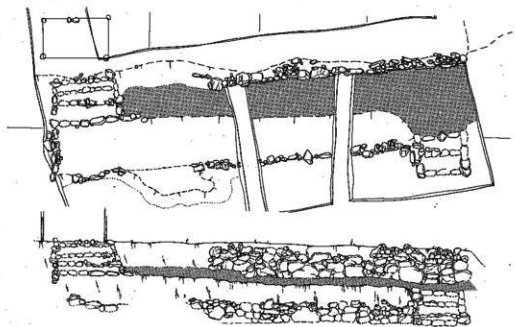
X=59,270

X=59,290

X=59,320

X=59,340





宝21SX022 横断面定画

0 2m